宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第147集

朝草原遺跡（あさくさばるいせき）
尾立第3遺跡（おだてだいいせき）

Asakusabaru Site
Odate 3 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書42

２００７

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第147集

朝草原遺跡（あさくさばるいせき）
尾立第3遺跡（おだてだいいせき）

Asakusabaru Site
Odate 3 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書42

２００７

宮崎県埋蔵文化財センター

大師山と朝草原遺跡、尾立第３遺跡、朝倉遺跡（南から）

朝草原遺跡（C区）土層断面

尾立第３遺跡土層断面

序

宮崎県教育委員会では、平成 11 年度から東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地の埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、本書はその発掘調査報告書となります。

本書に掲載した朝草原遺跡は、山裾と山裾から広がる台地に位置し、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物が確認されました。特に、縄文時代草創期から早期と思われる薄手の無文土器が出土したことは、県内での該期の土器を考える上での貴重な資料となりました。

また、尾立第３遺跡は、朝草原遺跡とは山を挟んで反対側の山の中腹に位置します。遺跡の面積は決して大きくありませんが、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺構・遺物が多数確認されました。特に、傾斜地で小規模な範囲からも礫群 10 基や集石遺構２基が検出されたということは、今後、当地域の旧石器時代・縄文時代早期の人々の生活を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関･地元の方々、並びに御指導･御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 19 年２月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長　清 野　勉

例　言

1.　本書は、平成 17 年度に実施した、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う朝草原遺跡・尾立第３遺跡の発掘調査報告書である。

2.　発掘調査は、日本道路公団から委託を受け宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成 17 年 10 月 1 日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。

3.　発掘調査の期間は、以下のとおりである。
朝草原遺跡　　平成 17 年 9 月 1 日から平成 17 年 12 月 22 日
尾立第３遺跡　　平成 17 年 9 月 1 日から平成 17 年 10 月 26 日

4.　現地での実測は、朝草原遺跡は井上美奈子、河野康男が、尾立第３遺跡は井上、河野、渡辺美幸、石津晴菜が行った。

5.　空中写真撮影については、（有）スカイサーベイ九州に、基準点設置については（株）新藤測量設計事務所に委託した。

6.　現地での写真撮影は、井上、河野が行い、出土遺物の写真撮影は、井上が行った。

7.　整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレース等は井上が行い、一部石器の実測図及びトレースは、（株）大成エンジニアリングに委託した。

8.　本書で使用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の 1 /50,000 図を利用した。また、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供の 1 /2,000 図を基に作成した。

9.　土層断面及び土器の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局／監修『新版標準土色帖』に拠った。

10.　本書で用いた標高は海抜絶対高であり、方位は座標北（G.N.）を基本とするが、遺構実測図などの一部に磁北（M.N.）を用いた。座標北（G.N.）は「N」と表記する。

11.　本書で用いた遺構の略号は、次のとおりである。
ＳＣ＝土坑　ＳＩ＝礫群、集石遺構

12.　両遺跡で実施した樹種同定、放射性炭素年代測定は、（株）古環境研究所に委託した。

13.　本書の執筆・編集は井上が担当した。

14.　出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第Ⅱ章　朝草原遺跡の調査
第１節　調査の経過と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第２節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第３節　Ａ区の調査記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第４節　Ｂ区の調査記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第５節　Ｃ区の調査記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第６節　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

第Ⅲ章　尾立第３遺跡の調査
第１節　調査の経過と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第２節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第３節　尾立第３遺跡の調査記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第４節　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

第Ⅳ章　おわりに
石器の遺跡間接合～おわりに代えて～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

挿図目次

第１図　朝草原・尾立第３遺跡周辺遺跡分布図（Ｓ＝1/50,000）・・・・・・・・・・・・・5
第２図　朝草原遺跡周辺地形図（Ｓ＝1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第３図　尾立第３遺跡周辺地形図（Ｓ＝1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第４図　確認調査遺物実測図（Ｓ＝1/1、1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第５図　確認調査トレンチ配置図（Ｓ＝1/2,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第６図　朝草原遺跡グリッド配置図（Ｓ＝1/600）・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第７図　Ａ区土層断面図（Ｓ＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第８図　Ａ区表採石器実測図（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第９図　Ａ区遺構分布図及び石器分布図（Ｓ＝1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・15
第10図　土器分布図（Ｓ＝1/600）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第11図　Ａ区出土石器実測図（１）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第12図　Ａ区出土石器実測図（２）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第13図　Ａ区出土石器実測図（３）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第14図　Ａ区出土石器実測図（４）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第15図　Ａ区出土石器実測図（５）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第16図　Ａ区出土石器実測図（６）（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第17図　Ａ区出土石器実測図（７）及び土器実測図（１）（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・22
第18図　Ａ区出土石器実測図（８）（Ｓ＝1/1、1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・24
第19図　Ａ区出土土器実測図（２）（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第20図　Ａ区出土土器実測図（３）（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

第 21 図　Ａ区検出土坑実測図（Ｓ＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第 22 図　Ｂ区出土表採石器実測図（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第 23 図　Ｂ区・Ｃ区遺構分布図及び遺物出土分布図（Ｓ＝1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第 24 図　Ｂ区礫群実測図（Ｓ＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
第 25 図　Ｂ区出土石器実測図（１）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第 26 図　Ｂ区出土石器実測図（２）（Ｓ＝1/1、1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第 27 図　Ｃ区土層断面図（Ｓ＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第 28 図　Ｃ区集石遺構実測図（Ｓ＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第 29 図　Ｃ区出土石器実測図（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第 30 図　Ｃ区出土土器実測図（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第 31 図　確認トレンチ配置図（Ｓ＝1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第 32 図　尾立第３遺跡グリッド配置図（Ｓ＝1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第 33 図　土層断面図（Ｓ＝1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
第 34 図　表採土器（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第 35 図　遺構分布図（Ｓ＝1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第 36 図　礫群実測図（１）（Ｓ＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第 37 図　礫群実測図（２）（Ｓ＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 38 図　礫群実測図（３）及び集石遺構実測図（Ｓ＝1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第 39 図　散礫のグリッドごとの総重量模式図（Ｓ＝1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第 40 図　石器出土分布図（Ｓ＝1/200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第 41 図　出土石器実測図（１）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第 42 図　出土石器実測図（２）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第 43 図　出土石器実測図（３）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 44 図　出土石器実測図（４）（Ｓ＝1/1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第 45 図　出土石器実測図（５）（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第 46 図　出土石器実測図（６）（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第 47 図　出土石器実測図（７）（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第 48 図　出土接合石器実測図（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 49 図　遺跡間接合石器実測図（Ｓ＝1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

表目次

第１表　朝草原遺跡土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第２表　朝草原遺跡石器計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第３表　尾立第３遺跡石器計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

図版目次

巻頭図版１　大師山と朝草原遺跡、尾立第３遺跡、朝倉遺跡（南から）
巻頭図版２　朝草原遺跡（Ｃ区）土層断面、尾立第３遺跡土層断面
図版１　朝草原遺跡俯瞰（北から）、朝草原遺跡Ａ区調査区俯瞰（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
図版２　朝草原遺跡Ａ区Ⅳ層無文土器出土状況（南東から）、朝草原遺跡Ａ区土層断面（南から）・・・・・・・・・・ 75
図版３　朝草原遺跡Ａ区検出 SC １～ SC ３断面及び完掘、Ⅴ層無文土器出土状況、Ｋ３グリッド土層断面・・・・・・ 76
図版４　朝草原遺跡Ｂ区・Ｃ区俯瞰、Ｂ区北壁土層断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
図版５　朝草原遺跡Ｂ区検出 SI ４、SI ５、Ｃ区検出 SI １～ SI ３検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
図版６　朝草原遺跡Ａ区出土石器（角錐状石器、ナイフ形石器、細石刃核、細石刃、敲石、石鏃、剥片、石核）・・・・ 79
図版７　朝草原遺跡Ａ区・Ｃ区出土無文土器、Ｂ区・Ｃ区出土石器（角錐状石器、細石刃核、石鏃、剥片、石核）・・・ 80
図版８　尾立第３遺跡俯瞰、北側散礫（西から）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
図版９　尾立第３遺跡検出 SI １～ SI ８検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
図版 10　尾立第３遺跡検出 SI ９～ SI12 検出状況及び断面、完掘、石器出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
図版 11　尾立第３遺跡出土石器（角錐状石器、ナイフ形石器、台形石器、掻器、二次加工剥片、敲石、細石刃核、石鏃、剥片、石核、接合石器）、朝草原遺跡と尾立第３遺跡の接合資料・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年２月に基本計画がなされ、平成９年３月には整備計画路線となった。さらに平成９年 12 月に建設大臣（現国土交通大臣）から日本道路公団へ施行命令が発令され、公団は翌年２月から事業に着手している。

それに伴い、県教育委員会は、平成 10 年度に都農～西都間の分布調査を行い、計 79 遺跡の埋蔵文化財包蔵地の存在を確認した。調査は、平成 11 年度から宮崎県教育委員会が日本道路公団九州支社の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

本調査に先立ち、朝草原遺跡は、平成 17 年２月 14 日から３月 17 日と平成 17 年６月１日から７月 27 日の２回に分けて確認調査を行った。その結果、鬼界アカホヤ火山灰（以下、K-Ah）下層の暗褐色土から集石遺構１基が検出され、縄文時代早期の土器や石器、その下層の褐色土からは後期旧石器時代のナイフ形石器、剥片が出土した。尾立第３遺跡は、平成 17 年６月１日から７月 27 日にかけて確認調査を行った。その結果、姶良 Tn 火山灰（以下、ＡＴ）より上層の褐色土より後期旧石器時代から縄文時代草創期と思われる剥片が多数出土した。

これらの確認調査を元に、尾立第３遺跡は全調査対象面積を 1,000㎡とし、平成 17 年９月１日から 10 月 26 日まで本調査を実施することとなった。併せて、朝草原遺跡も同年９月１日から 12 月 22 日まで 4,430㎡の本調査を実施した。整理作業は平成 17 年 12 月から行い平成 18 年度に終了した。

第2節　調査組織

調査の組織は次のとおりである。

【調査主体】　宮崎県教育委員会
　　宮崎県埋蔵文化財センター

平成 16 年度

所　　長	宮園　淳一
副所長兼総務課長	大薗　和博
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
調査第一課長	髙山　富雄
主幹兼総務係長	石川　恵史
調査第一係長	谷口　武範
主幹兼調査第二係長	長津　宗重

平成 17 年度

所　　長	宮園　淳一
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課長	宮越　　尊
調査第一課長	髙山　富雄
主幹兼総務係長	石川　恵史
主幹兼調査第一係長	長津　宗重
主幹兼調査第二係長	菅付　和樹

平成 18 年度

所　　長	清野　　勉
副所長	加藤　悟郎
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課長	宮越　　尊
調査第一課長	髙山　富雄
主幹兼総務担当リーダー	髙山　正信
主幹兼調査第一担当リーダー	長津　宗重
主幹兼調査第二担当リーダー	菅付　和樹

【調査担当】

〔朝草原遺跡〕

調査第一課調査第一係主査	安藤　真二（平成16年度）
調査第二係主査	河野　康男

調査第二係主査　　長友　久昭
調査第二係主事　　堀田　孝博
調査第二係主事　　井上美奈子
（平成17年度）

〔尾立第３遺跡〕
調査第一課調査第二係主査　　河野　康男
調査第二係主事　　井上美奈子
調査第一係主事　　渡辺　美幸
調査第二係調査員　　石津　晴菜
（平成17年度）

【調査報告書作成担当】
調査第一課調査第二係主事　　井上美奈子
（平成17年度）
調査第一課調査第二担当主事　　井上美奈子
（平成18年度）

なお、発掘調査、遺物整理、報告書執筆に際して、以下の方々より御指導・御協力を受けた（敬称略、順不同）。

【東九州自動車道発掘調査指導委員】
泉　　拓良（京都大学）
小畑　弘己（熊本大学）
田崎　博之（愛媛大学）
広瀬　和雄（国立歴史民俗博物館）
本田　道輝（鹿児島大学）
柳沢　一男（宮崎大学）

【整理指導・調査指導・調査協力】
清野　孝之（文化庁）
吉永　真也（都農町教育委員会）
赤塚　次郎（愛知県埋蔵文化財調査センター）
野口　　淳（明治大学校地内遺跡調査団）
常松　幹夫（福岡市教育委員会）
西　　哲弘（大分県教育庁）
綿貫　俊一（大分県教育庁）
田中　裕介（大分県教育庁）
塩地　潤一（大分市教育委員会）
永松　正大（大分市教育委員会）
宮田　　剛（大分市教育委員会）

第３節　立地と環境

１　地理的環境

朝草原遺跡及び尾立第３遺跡は、宮崎県都農町に所在する（第１図）。都農町は宮崎県の中央よりやや北寄り、東に日向灘を望み、南の宮崎市と北の延岡市のほぼ中間に位置している。

朝草原遺跡は、標高 79 ～ 83m、名貫川と都農川支流上町川の間の大師山の東側山裾に存在する（第２図）。また、尾立第３遺跡は、標高 95 ～ 100m を測り、朝草原遺跡とは山を挟んだ反対側の大師山西側中腹に存在する（第３図）。

両遺跡周辺は、隆起のたびに名貫川と上町川の浸食活動が活発化した結果形成された開析扇状地である。これらの河川の浸食活動により新しい扇状地と古い扇状地の間には段差が生じ、数段の河岸段丘が形成された。本遺跡周辺は約７万年前に形成され、河岸段丘上位に当たる。両遺跡周辺は、唐瀬原、新田原、茶臼原などの洪積台地と同じ成因のものである。

２　歴史的環境

都農町に所在する両遺跡周辺には、遺跡詳細分布調査によって多くの遺跡が周知されているが、発掘調査による詳細な遺跡の解明はほとんど行われていない。

旧石器時代の遺跡は、いずれも表採であるが、尖頭器・石核が出土した黒萩遺跡、剥片が出土した京塚遺跡（第１図４）、又猪野原遺跡の存在が知られている。

縄文時代になると、遺跡は標高 20 m以上の高地にあり、開析谷によって形成された河川やその支流に近い台地上に所在している。そのほとんどが縄文時代早期に帰属する。

竜ヶ平第１遺跡（第１図 13）は、大師山から南東に延びる丘陵とその延長にある標高約 94 mの台地上に所在し、朝草原遺跡（第１図８）や尾立第３遺跡（第１図 10）にも近接している。打製石鏃や押型文、貝殻文、条痕文、縄文、網目撚糸などの文様をつけた土器で、多くの縄文時代早期の遺物が出土

している。舟川中原遺跡は、都農町の北部、尾鈴山麓の一角にあり、標高 85 ～ 90 mの東へなだらかに延びる小さな舌状台地上に広がっている。都農町教育委員会によって確認調査が行われており、縄文時代早期の石鏃、押型文（山形文・楕円文）土器、縄文土器、竹管文土器、無文土器などが出土している。

黒石遺跡（第１図５）は都農町の中央に位置する牧内台地の南麓にあり、そのまま南に緩やかに傾斜する標高約 55 ～ 58 mの丘陵地にある。縄文時代早期の集石遺構３基とともに、打製石鏃、磨石、石匙や押型文、貝殻文、条痕文、櫛描文土器が出土している。

白水遺跡は、牧内台地の南端の標高約 160 mにあり、黒石遺跡のほぼ真北にある遺跡である。縄文時代早期の集石遺構が７基検出され、押型文、条痕文、無文土器が出土した。

新別府川原遺跡は都農町の南部にあり、名貫川の左岸に広がる標高約 57 mの河岸段丘の南端にある。縄文時代後期の竪穴住居跡が１軒検出され、塞ノ神土器が出土している。

弥生時代になると遺跡数も数多く確認されている。発掘調査が行われているのは境ヶ谷第１遺跡(第１図３)、新別府下原遺跡（第１図 14)、森遺跡（第１図７)、白水遺跡（第１図２）の４遺跡である。４～５mほどの方形プランの住居跡が白水遺跡を除いて検出されている。

境ヶ谷第１遺跡は、竪穴住居跡２軒と多数の土器が出土した。住居跡の規模は４～５m程度である。遺物は、壺形、甕形、鉢形、高坏形の土器、磨石、石錘等が出土している。遺跡の帰属時期は弥生時代後期後半とされる。

新別府下原遺跡は、竪穴住居跡が７軒、土坑５基、周溝状遺構３基が検出された。遺物は、磨製石庖丁、両端抉り入り石庖丁、砥石、磨石、鉄鎌片、壺形、甕形、高坏形、鉢形土器が出土している。

新別府下原遺跡は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて営まれた集落跡であるが、調査区外から弥生時代中期の竪穴住居跡が５軒、試掘によって確認されていることから遺跡の範囲はさらに広がるものと考えられる。

森遺跡は、時期不明の竪穴住居跡２軒と瀬戸内系の高坏の脚部が２点、壺形土器、磨製石鏃、砥石がそれぞれ１点ずつ出土している。白水遺跡は、遺構は確認されていない。弥生時代後期と思われる小形の甕形土器などが数十点出土している。

いくつか弥生時代から古墳時代にかけて集落遺跡が存在し、人の生活・活動なども分かるものの、集落規模は通時的に小規模である。

都農町内には海岸部を中心に 12 基の県指定古墳がある。前方後円墳２基、円墳 10 基で全て積石塚である。内部主体や副葬品などは不明であるが、積石塚は県内では珍しく、都農町に集中して築造される。この他に、新別府川原、木戸平、舟川中原に円墳が１基ずつ見られる。

古代以降の遺跡は未だ都農町内では確認されていない。しかし、日向国は昔から馬の名産地として知られ、『日本書紀』にも日向の駒を称える記述がある。宮崎県は鉄製品の出土数が全国的に多く、古墳時代後期以降、特に馬具の出土が目立つ。『延喜式』には馬牧の「都濃野」の記述があり、これは正しく都農を示しているだろう。今後の調査により、都農町内から馬牧の存在が確認され、宮崎県における古代馬生産の実態が明らかにされることを期待する。

都農町内における本格的な東九州自動車道関連の発掘調査は、平成 17 年度から始まったばかりで、朝草原遺跡、尾立第３遺跡のほかに、朝倉遺跡（第１図９)、立野第２遺跡（第１図 12)、立野第５遺跡(第１図 13)の発掘調査が行われた。特に朝倉遺跡は、本報告の朝草原遺跡・尾立第３遺跡に挟まれて隣接し、両遺跡と密接に関わる可能性がある。ＡＴ下位層から縄文時代早期までの連続した遺構や遺物が良好な状態で多数確認されている。その他、弥生時代後期の甕が廃棄されたと思われる土坑、近世の石組遺構などが検出されており、都農町の通史的な様相を知る上で今後重要な遺跡となるだろう。

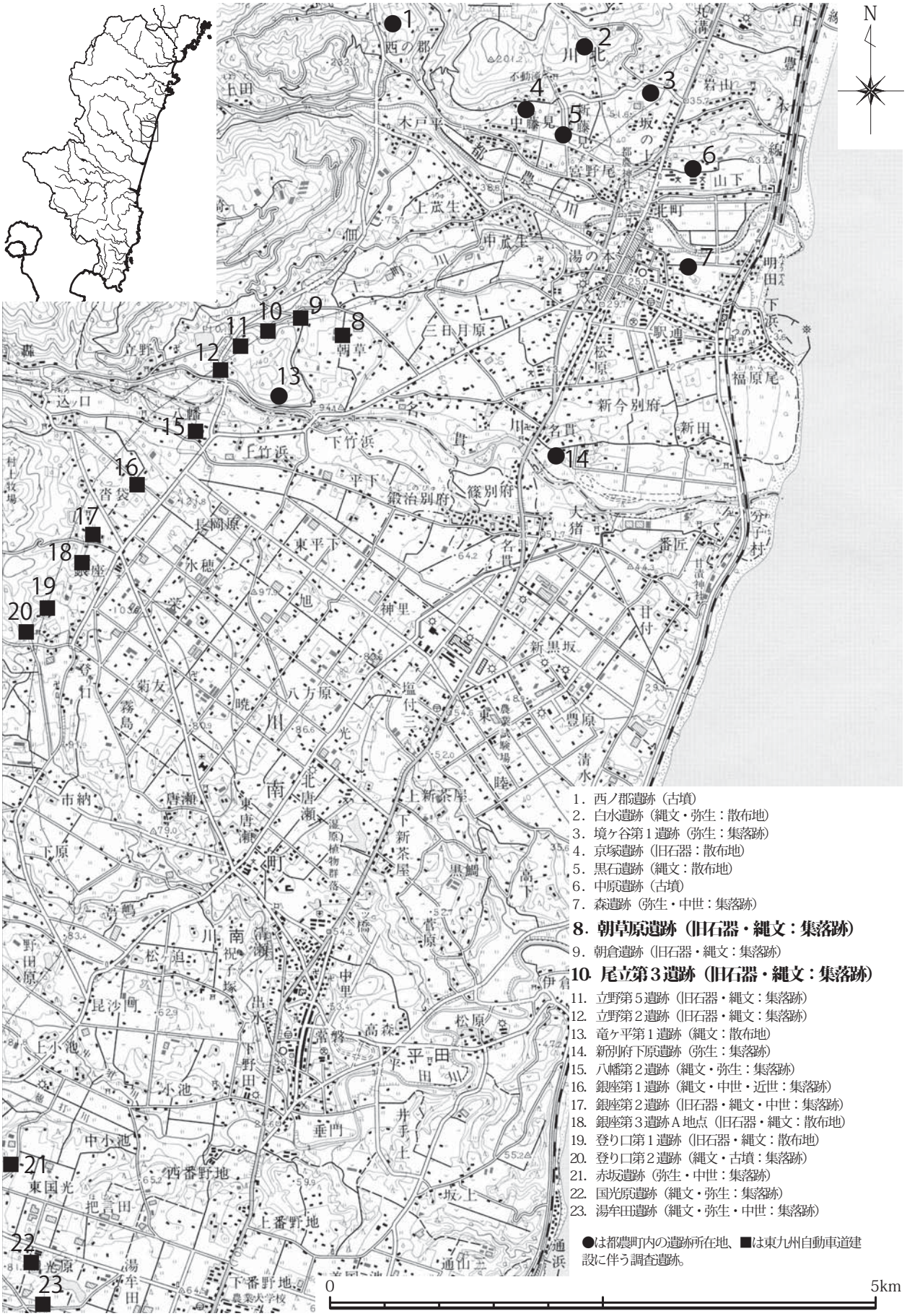
立野第２遺跡では、狭小の調査面積の中に 15 基ほどの集石遺構が、縄文時代早期の無文土器や貝殻文系土器ともに見つかっている。

立野第５遺跡は、立野第２遺跡に隣接しており、急斜面地に立地する遺跡のため層位的に安定してい

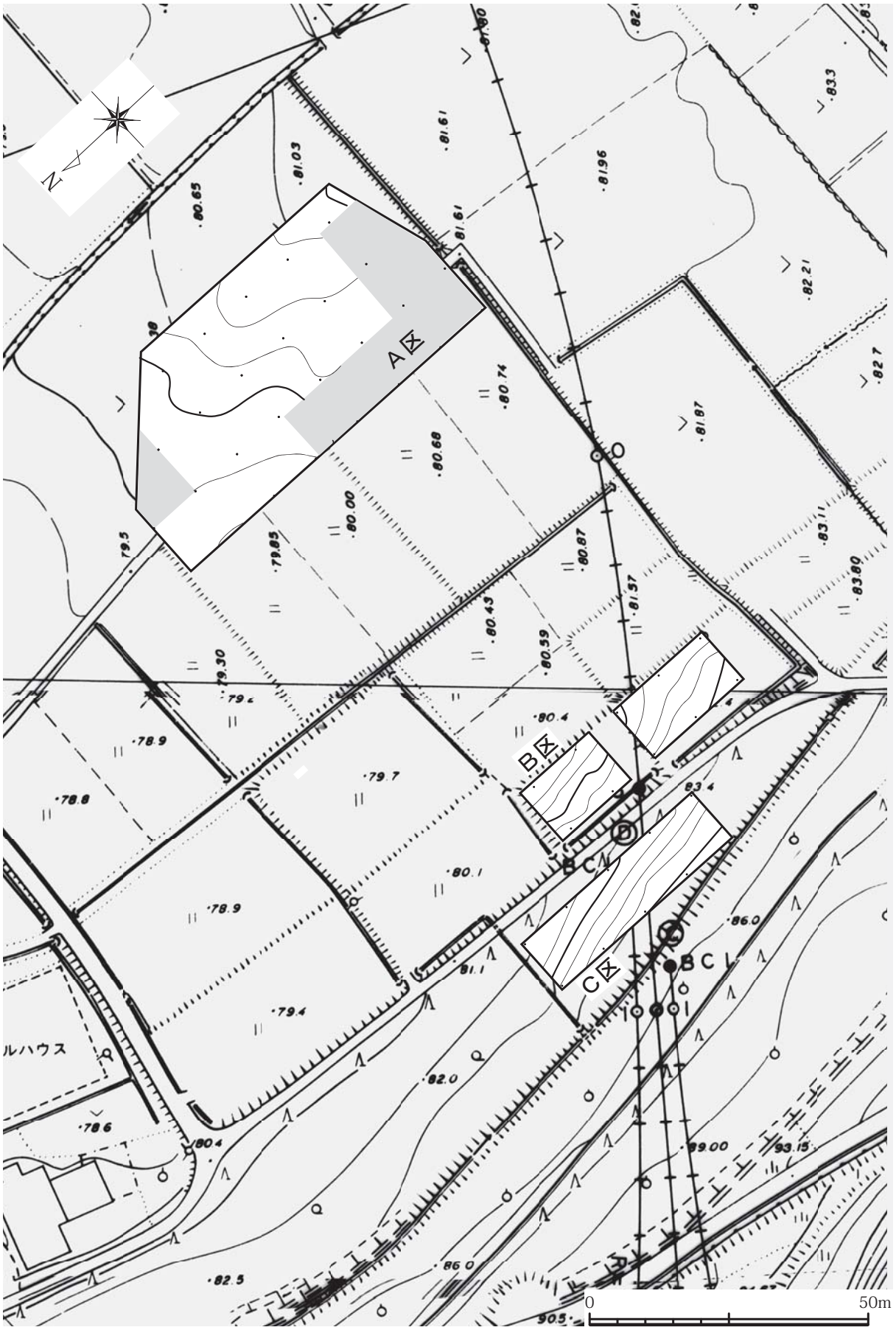
ない箇所も見られるが、朝倉遺跡と同様にＡＴ下位層からも遺物が出土している。

都農町では分布調査や表採資料によって、旧石器時代の存在は確認されていたが、包含層からAT下位層の遺構・遺物が確認されたのは朝倉遺跡と立野第５遺跡が初めてであり、今後、都農町のみならず宮崎県域の旧石器時代研究に大きな影響を与えることになるであろう。

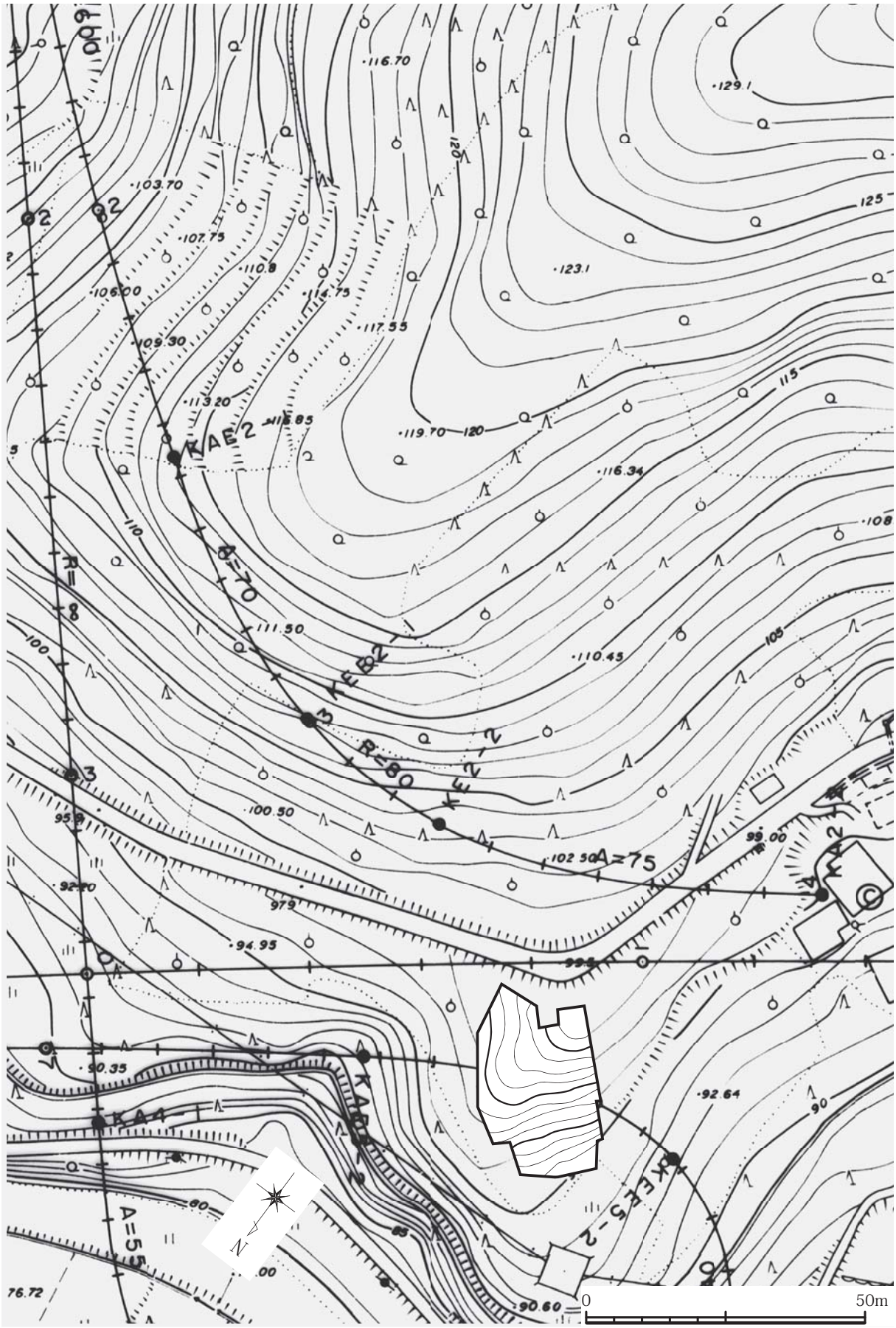
【参考文献】
都農町　1998　『都農町史』通史編
長津宗重 / 編　1989『新別府下原遺跡』都農町教育委員会
長津宗重 / 編　1990『新別府下原遺跡』都農町教育委員会
宮崎県都農町　1983　『国土利用計画（都農町計画）』
宮崎県埋蔵文化センター　2006　『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ』
吉永真也　1992　『黒石遺跡』　都農町教育委員会
吉永真也　1993　『森遺跡』　都農町教育委員会



第１図　朝草原・尾立第３遺跡周辺遺跡分布図（S＝1/50,000）



第２図　朝草原遺跡周辺地形図（S＝1/1,000）



第3図　尾立第3遺跡周辺地形図（S＝1/1,000）

第Ⅱ章　朝草原遺跡の調査

第1節　調査の経過と方法

1　確認調査の概要

朝草原遺跡の本調査に先立ち、調査対象総面積12,600㎡のうち調査区東側の8,900㎡を平成17年2月14日から平成17年3月17日まで、調査区西側の3,700㎡を平成17年6月1日から7月27日までの2回に分けて確認調査を行った（第5図）。

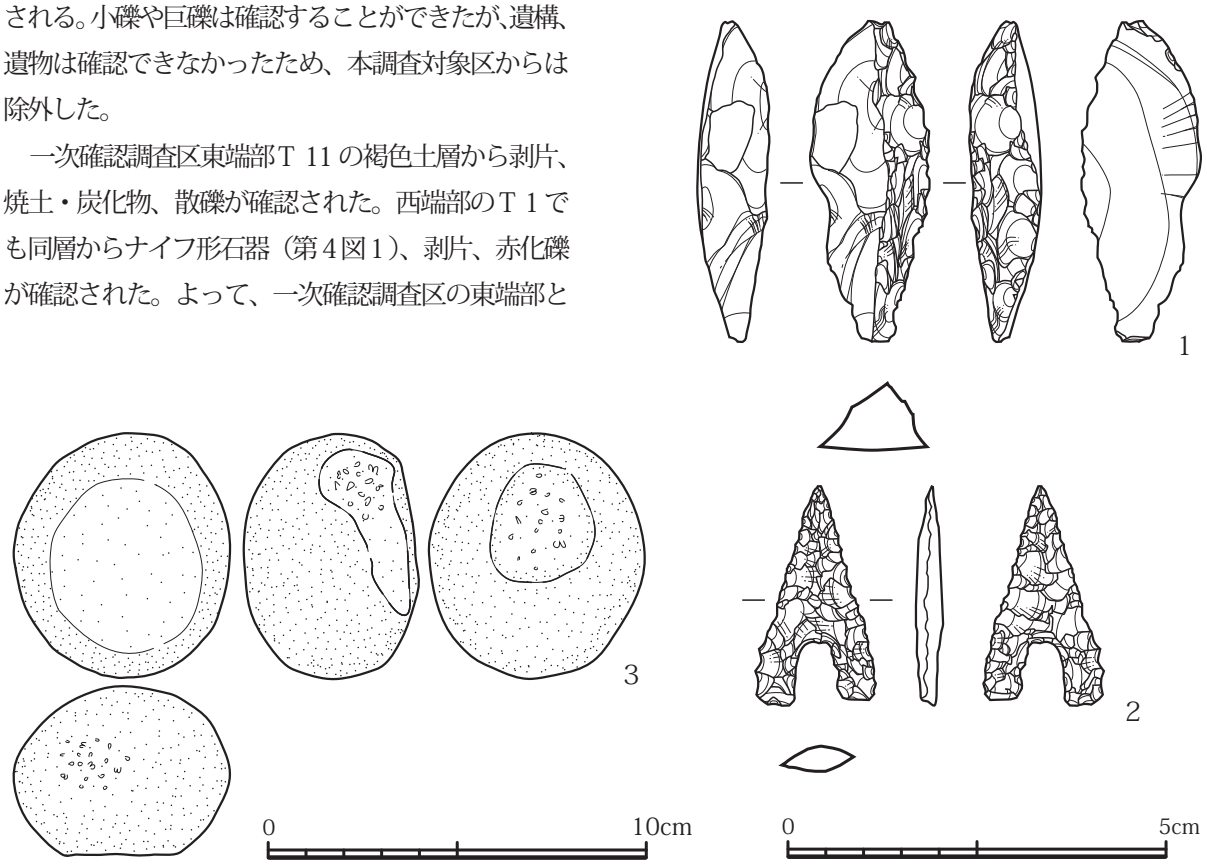
一次確認調査では、8,900㎡に対して15箇所のトレンチ（900㎡）を設定し調査を行った。特に調査区の中央部は良好なK-Ahの堆積が見られる。東西とも中央部に向かって徐々にK-Ahの堆積が厚くなり、最大厚は表土から104cmの深さに位置する。T 13からT 15のトレンチはK-Ah層辺りから湧水する。T 3からT 5からも湧水し、T 5・T 6辺りが最もK-Ahの堆積も厚く、検出したレベルも低かったため、かつて調査区中央には緩やかな谷部があったと推定される。小礫や巨礫は確認することができたが、遺構、遺物は確認できなかったため、本調査対象区からは除外した。

一次確認調査区東端部T 11の褐色土層から剥片、焼土・炭化物、散礫が確認された。西端部のT 1でも同層からナイフ形石器（第4図1）、剥片、赤化礫が確認された。よって、一次確認調査区の東端部と西端部の計3,500㎡を本調査対象区とした。

二次確認調査では、3,700㎡に対して15箇所のトレンチ(235㎡）を設定し調査を行った。傾斜地に立地しているが、削平により階段状に3段の平坦面で形成されている。

比較的大きなトレンチをそれぞれ各段に3本ずつ設定し調査を行ったところ、下段部のT 3でK-Ah下層の暗褐色土層から1基の集石遺構が検出され、石鏃（第4図2）、黒曜石の砕片、敲石（第4図3）、剥片が出土した。上段、中段のトレンチからは遺構・遺物とも確認されず、後世の攪乱により土層も良好でなかったため、本調査対象区から除外した。よって、下段のみの930㎡の調査が決定した。

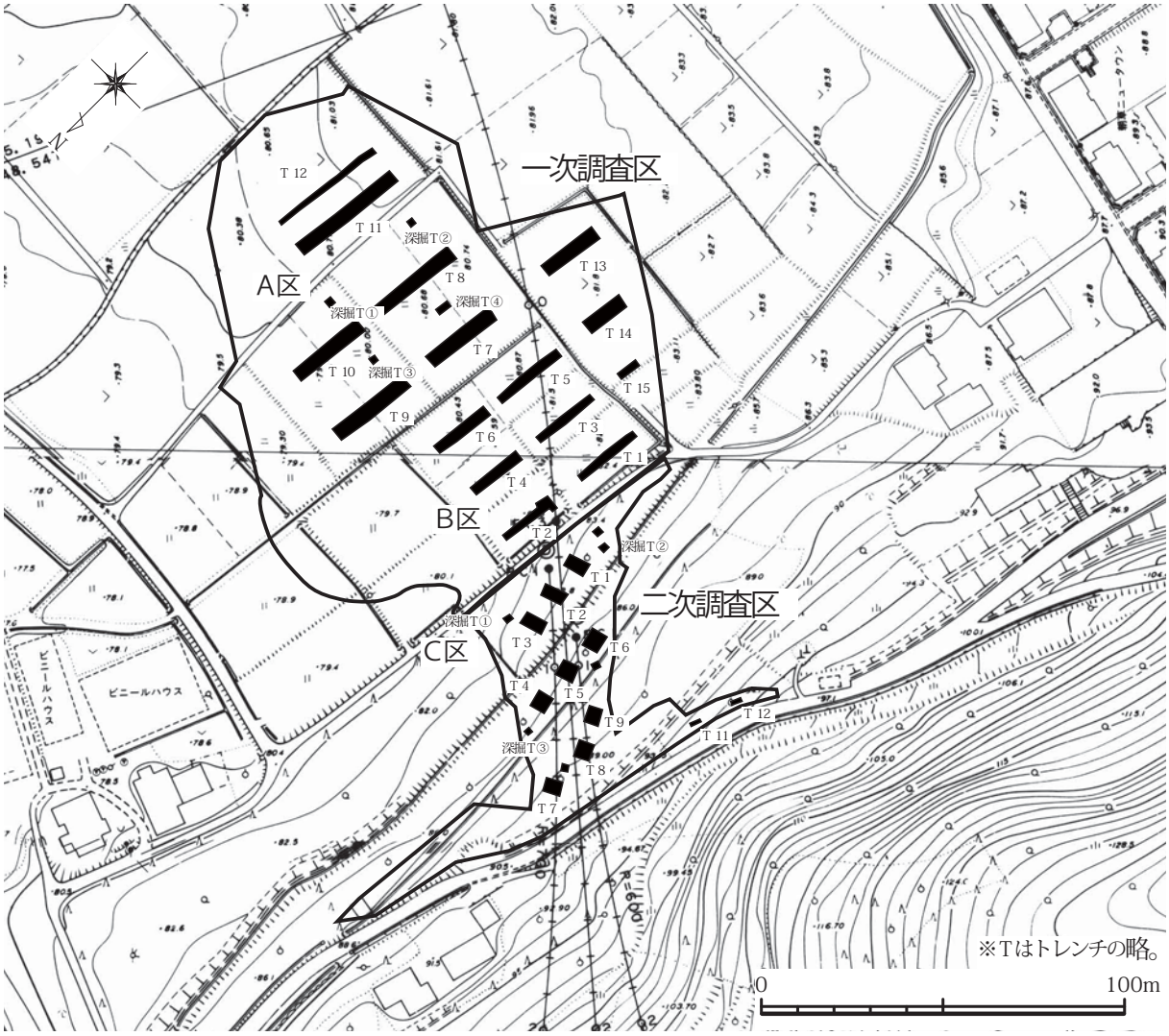
以上、2回の確認調査の結果をもとに4,430㎡の面積の本調査を行った。



第4図　確認調査出土遺物実測図（S＝1/1, 3はS＝1/2）

調査日誌抄（平成17年）

9.15（木）　現場事務所・駐車場の整地。
9.16（金）　現場事務所・作業員休憩棟などの設営。
（9.20（火）から10.26（水）まで尾立第３遺跡調査中。）
9.26（月）　A区、重機による表土剥ぎ開始。
10.11（火）　人力で表土を精査。
　　グリッド杭の設定。
10.26（水）　A区25%調査。縄文時代早期の無文土器片出土。
10.28（金）　土坑１基検出。周辺から土器片が出土。
11. 1（火）　石鏃、砕片の集中区を検出。
11. 2（水）　土器片の集中出土区が３箇所となる。
11. 4（金）　焼土を含んだ土坑を検出。
11.10（木）　調査指導委員による調査指導。
11.14（月）　遺物が全く出土しないグリッドを除外し、100%調査開始。
11.15（火）　土器片の出土が広がるため、調査区内にある農道を一部付け替えて調査。
11.16（水）　焼土を含んだ土坑を検出。
11.17（木）　遺構の写真撮影、実測、土層断面を記録。
11.18（金）　トータルステーションによる遺物取り上げ。
11.21（月）　C区、重機による表土剥ぎ。
11.22（火）　A区、空中撮影。
　　B区、重機による表土剥ぎ。
11.24（木）　A区、コンタ図作成。
11.25（金）　A区、重機による埋め戻し。
　　B区・C区グリッド杭の設定。
　　C区、調査開始。集石遺構１基検出。（確認調査時に１基検出しており、合計２基となる。）
11.28（月）　C区で姫島産黒曜石の打製石鏃出土。
11.29（火）　集石遺構の写真撮影、実測。
12. 1（木）　貝殻条痕の無文土器出土。
12. 2（金）　集石遺構の検出。
　　B区、人力による表土精査開始。削平が著しく、ATとブラックバンドが混ざり合ったような層が見える。非常に固い。
12. 7（水）　礫群検出。
12. 8（木）　B区南側半分はブラックバンドを掘り下げたところ（100%）で、調査終了。剥片が数点出土。北側より礫群検出。
12. 9（金）　写真撮影、実測。トータルステーションによる遺物取り上げ。
12.14（水）　B区・C区、空中撮影。
12.19（月）　コンタ図と遺物取り上げ。
　　C区、土層断面図作成。
12.20（火）　作業員調査最終日。機材の搬出。
12.21（水）　現場埋め戻し。
12.22（木）　現地調査終了。撤収。



第５図　確認調査トレンチ配置図（S＝1/2,000）

2　発掘調査の方法

朝草原遺跡は、大師山の東側山裾とそこから広がる台地に立地する遺跡である。確認調査の結果、本来の遺跡範囲の中央部分が谷になっており、本調査対象範囲からはずれたため、便宜上調査区を東からＡ・Ｂ・Ｃ区の３区に区分しＡ区から順に調査を開始した（第６図）。

本調査にあたり、重機で表土・耕作土を除去した後、国土座標を基準に 10 m間隔の大グリッドを西から東にＡ～Ｐ、北から南に１～９と設定した。その後、大グリッドを５ｍ×５ｍで４分割し、グリッド内の北西を小グリッド１、北東を小グリッド２、南西を小グリッド３、南東を小グリッド４と名称した。

Ａ区の調査では、まず小グリッド１である大グリッドの１／４を掘り下げ（以下「25％調査」という）、遺構・遺物が確認されれば、２／４（50％調査）、３／４（75％調査）、４／４（100％調査）と広げていった。

Ｂ区、Ｃ区の調査も同様に小グリッド１を先行して調査して行い、徐々に 50％調査、100％調査へと進行していった。

3　整理作業及び報告書作成

整理作業は平成 17 年 12 月から開始し、平成 18 年 10 月に終了している。遺物の整理については本センターにて、礫の整理については川南整理作業棟にて行った。礫は計測と接合を行った。

整理作業に時間的余裕を見つけられたので、朝草原遺跡と尾立第３遺跡から出土した石器類の遺跡間接合を試みた。期待した結果を得ることはできなかったが、朝草原遺跡から表採した剥片と尾立第３遺跡の遺物包含層から出土した剥片が接合するというものが３個体得られた。これについては、第Ⅳ章で若干述べる。

報告書作成にあたっては、本年度より本センターで取り組むデジタル入稿の方式をとった。使用 OS は windows2000professional である。

遺物・遺構平面図等のトレースについては株式会社アイシン精機の『遺構くん』と、Adobe 社の Illustrator を使用し、eps 形式で保存、レイアウトを行うという形をとっている。拓本等の画像の編集には Adobe 社の Photoshop を用いた。編集・レイアウトについては Adobe 社の InDesign を用いた。入稿に際しては InDesign 形式での入稿を行っている。

写真については従来どおりフィルムで撮影を行い、版下による入稿を行った。

第２節　層序

Ａ区は本来、谷地形であったところを耕作地に改変しているため、現在は平地であるが掘り下げていくにつれ、調査区中央に向かって落ち込み、それぞれの堆積層が厚くなる（図版３：Ａ区Ｋ３グリッド土層断面写真参照）。Ａ区の東側では、一部小林軽石が含まれると思われる層が堆積する。上層は大幅な削平を受けており、表土を除去すると本遺跡基本層序の第Ⅳ層である黒褐色土層から始まる。

Ｂ区は、大幅な削平により一部第Ⅵ層が見られる部分もあるが、第Ⅸ層や第Ⅹ層から始まるところが大部分のため、土層の記録は録れなかった（図版４：Ｂ区北壁土層断面写真参照）。

Ｃ区は傾斜地ではあるが土層の堆積状況が最もよく、本遺跡の層序の基礎となる。東九州自動車道基本層序[1]のＭＬ１に相当する層が３層に分かれる。

本遺跡における基本層序は以下に示すとおりであるが、東九州自動車道（都農～西都間）の調査においては基本的に認められるテフラやローム層、黒色土帯について共通の略称を用いており、文中のＭＢ０やＭＬ１などがこれにあたる。ただし、本遺跡が所在する都農町は宮崎県の県北にあたり、これまで共通認識として捉えられてきた東九州自動車道基本層序に多少そぐわない土層が確認され始めていることも事実である。

註）
1　宮崎県埋蔵文化財センターでは、東九州自動車道関連の遺跡調査に際して、新富・高鍋町域の発掘成果をもとに基本層序を作成し、遺跡間の共通理解を図っている。

①第Ⅰ層　表土（耕作土）

②第Ⅱ層　黒色土（Hue2.5Y　2/1）

クロボクに相当する。軟質土でしまりはない。粘性は弱い。

③第Ⅲ層　鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）

（Hue10YR　黄褐色　5/8、 Hue10YR　褐色　4/6、 Hue10YR　暗褐色　3/3）

２～３㎜の白色、黄橙色の火山ガラス質を含む。硬質で粘性はない。

④第Ⅳ層　黒色土（Hue10YR　2/1）

１㎜以下の細かい白粒子を含む。固くしまり、やや粘性がある。縄文時代早期の包含層。東九州自動車道基本層序のMB0に相当する。

⑤第Ⅴａ層　黒褐色土（Hue10YR　3/2）

固くしまり、粘性が強い。東九州自動車道基本層序ML1の上部に相当する。

⑥第Ⅴｂ層　暗褐色土（Hue10YR　3/3）

固くしまり、第Ⅴａ層よりもさらに粘性が強い。東九州自動車道基本層序のML1の中部に相当する。

⑦第Ⅵ層　褐色土（Hue10YR　4/4）

ややしまる。第Ⅴｂ層よりもさらに粘性の高い粘質土。東九州自動車道基本層序のML1の下部に相当する。

⑧第Ⅶ層　褐色土（Hue10YR　4/4）

粘性は高く、しまらない。斑点状ににぶい黄褐色土（Hue10YR　5/4）と黒褐色土（Hue10YR　2/3）を含み、黒褐色土の中に細かい白粒子を含む。Kr-Kbを含む層か。

⑨第Ⅷ層 姶良Tn（AT）火山灰二次堆積

（Hue10YR 褐色　4/4、 Hue10YR 黄褐色 5/6）

白色とオレンジの粒を多量に含む。固くしまり、ブロック状になる。C区は、⑨と⑩が混在しており分層不可能である。東九州自動車道基本層序のML2に相当する。

⑩第Ⅸ層　姶良Tn（AT）火山灰（Hue10YR　黄褐色　5/6）

⑪第Ⅹ層　暗褐色土（Hue10YR　3/3）

粘性が強い。固くしまり、クラックが発達している。東九州自動車道基本層序のMB2・MB3に相当する。

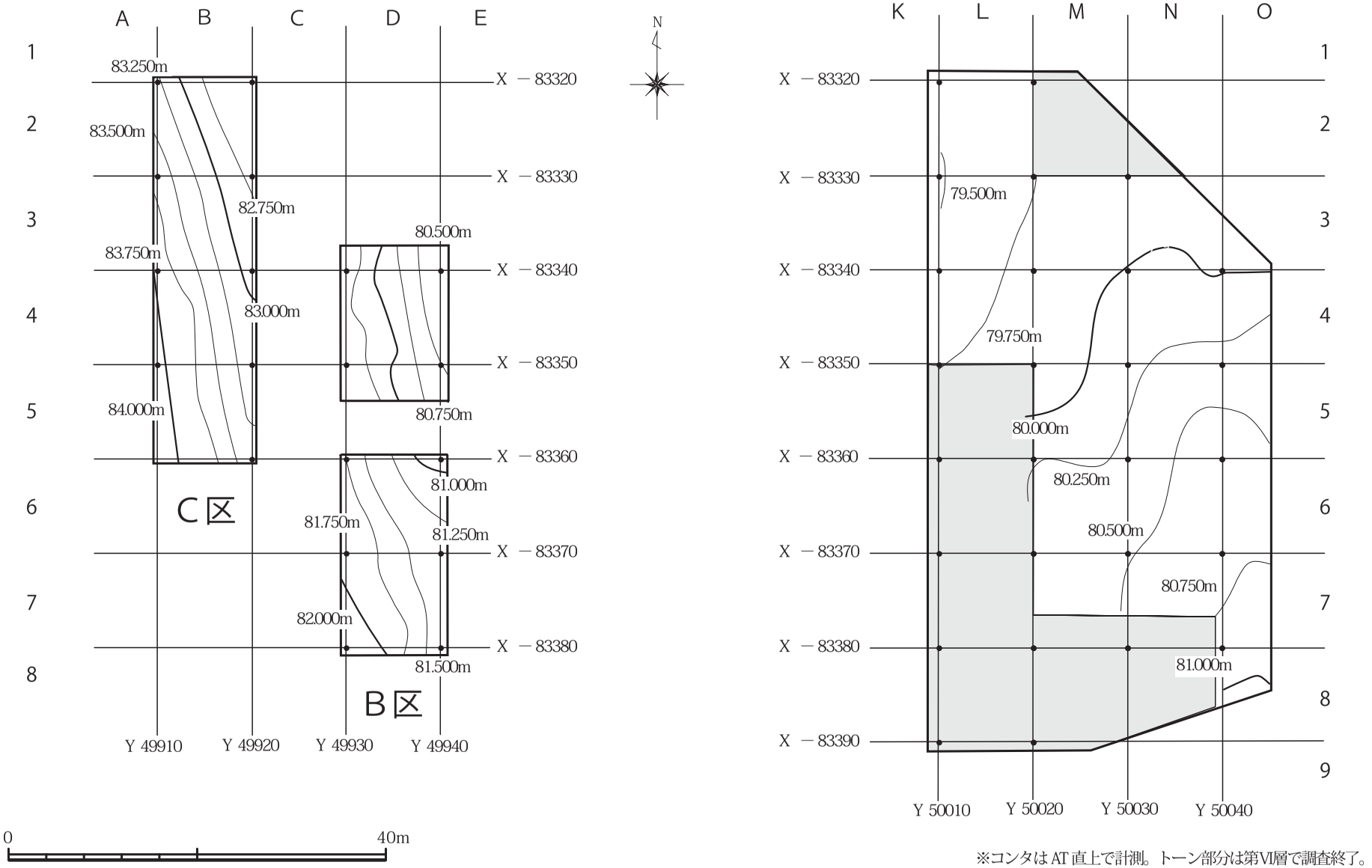
⑫第Ⅺ層　明褐色土（Hue7.5YR　5/6）

固くしまる。粘性が非常に強い。小石、赤褐色の礫を含む。

⑬第Ⅻ層　黄褐色土（Hue10YR　5/8）

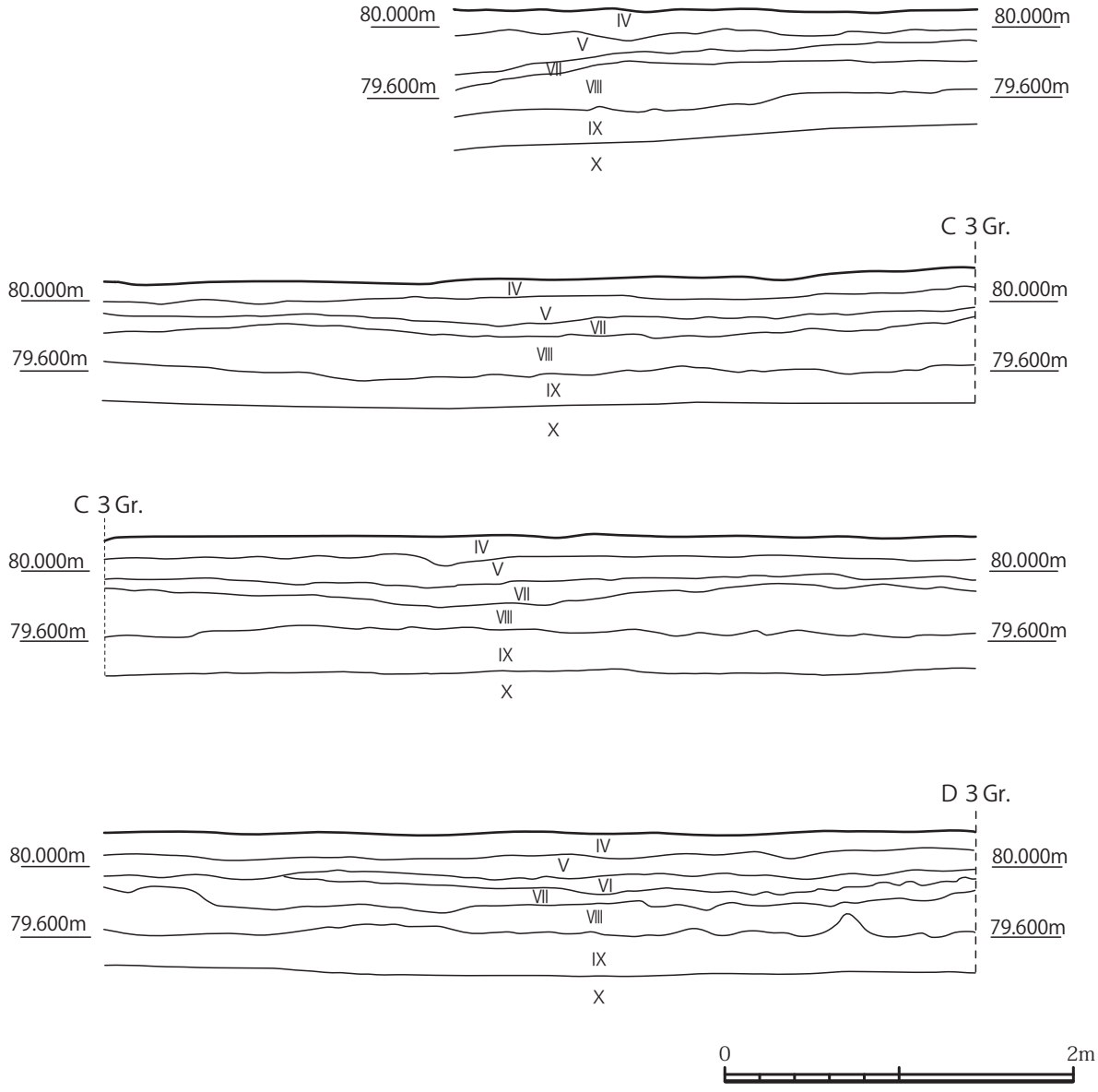
粘性は第Ⅺ層よりはない。非常に固くしまる。シルト質で巨礫を多数含む。

	層序	土色	略称
①	Ⅰ	表土・耕作土	
②	Ⅱ	黒色土	
③	Ⅲ	黄褐色土	K-Ah
④	Ⅳ	黒色土	MB0
⑤	Ⅴａ	黒褐色土	ML1（上部）
⑥	Ⅴｂ	暗褐色土	ML1（中部）
⑦	Ⅵ	褐色土	ML1（下部）
⑧	Ⅶ	褐色土	Kr-Kbか
⑨	Ⅷ	褐色土	ML2
⑩	Ⅸ	黄褐色土	AT
⑪	Ⅹ	暗褐色土	MB2,MB3
⑫	Ⅺ	明褐色土	
⑬	Ⅻ	黄褐色土	



※コンタはAT直上で計測。トーン部分は第Ⅵ層で調査終了。

第６図　朝草原遺跡グリッド配置図（S＝1/600）



第Ⅳ層　黒褐色土（Hue10YR　3/2）
固くしまり、粘性が強い。
第Ⅴ層　暗褐色土（Hue10YR　3/3）
固くしまり、第Ⅳ層よりもさらに粘性が強い。
第Ⅵ層　褐色土（Hue10YR　4/4）
ややしまる。第Ⅴ層よりもさらに粘性の高い粘質土。
第Ⅶ層　褐色土（Hue10YR　4/4）
粘性は高く、しまらない。斑点状ににぶい黄褐色土（Hue10YR　5/4）と黒褐色土（Hue10YR　2/3）を含み、黒褐色土の中に細かい白粒子を含む。
Kr-Kb を含む層か。
第Ⅷ層　姶良 Tn（AT）火山灰二次堆積（Hue10YR　褐色　4/4、　Hue10YR　黄褐色　5/6）
白色とオレンジの粒を多量に含む。固くしまり、ブロック状になる。C 区は、⑨と⑩が混在しており分層不可能である。
第Ⅸ層　姶良 Tn（AT）火山灰（Hue10YR　黄褐色　5/6）
第Ⅹ層　暗褐色土（Hue10YR　3/3）
粘性が強い。固くしまり、クラックが発達している。
第Ⅺ層　明褐色土（Hue7.5YR　5/6）
固くしまる。粘性が非常に強い。小石、赤褐色の礫を含む。

第7図　A区土層断面図（S＝1/40）

第３節　Ａ区の調査記録

１　概要

Ａ区の調査対象面積は、2,750㎡である。耕作地であったため、現在は平坦に整地されているが、AT層まで掘り下げると東から西に向かって緩やかに傾斜している（第７図）。Ａ区とＢ区の間の調査除外区となったところは湧水するので、当時は谷部であったことが推測される。土層断面は、Ｂ３グリッドの半分からＤ３グリッドまでの北側を記録した。東側では、一部小林軽石が含まれると思われる層が堆積する。後世の削平によりアカホヤ火山灰層も確認できず、表土を除去すると第Ⅳ層の暗褐色土層となる。そのため、表土中からは第８図のような石器が表採された。４は青色チャートの石鏃未製品と思われる。また、６のような緑泥変岩製の磨製石鏃の未製品や、図化していないが風倒木の撹乱中から古代の土師器片が出土しており、この地にも元は弥生時代以降の遺跡が存在していた可能性を指摘できる。

遺構・遺物の包含層である第Ⅳ層から第Ⅵ層までは 20 ～ 25cm 程の堆積しかなかったが、調査中の所見から、層位的安定性は保たれていることが見受けられた。

Ａ区では、３基の土坑と、106 点の石器類（第９図）、５個体分の無文土器（第 10 図）が確認された。

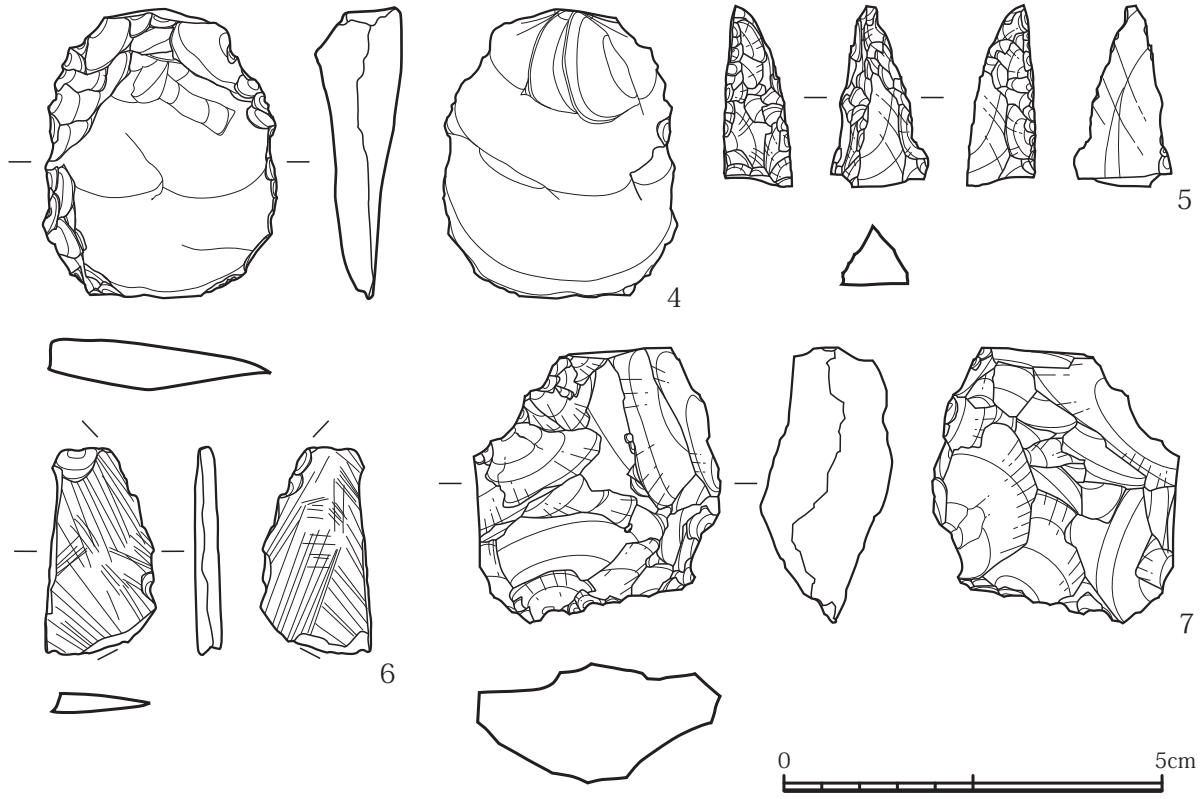
本節での報告は土層の上下関係を基準としているが、堆積層が薄いため、遺物の器種によっては同層から出土した遺物であっても、時期的に区分しているものもある。大別すると、第Ⅵ層～第Ⅴ層出土遺物が旧石器時代終末期、第Ⅴ層出土遺物が縄文時代草創期、第Ⅴ層～第Ⅳ層出土遺物が縄文時代早期に相当すると思われる。

２　旧石器時代終末期の遺物

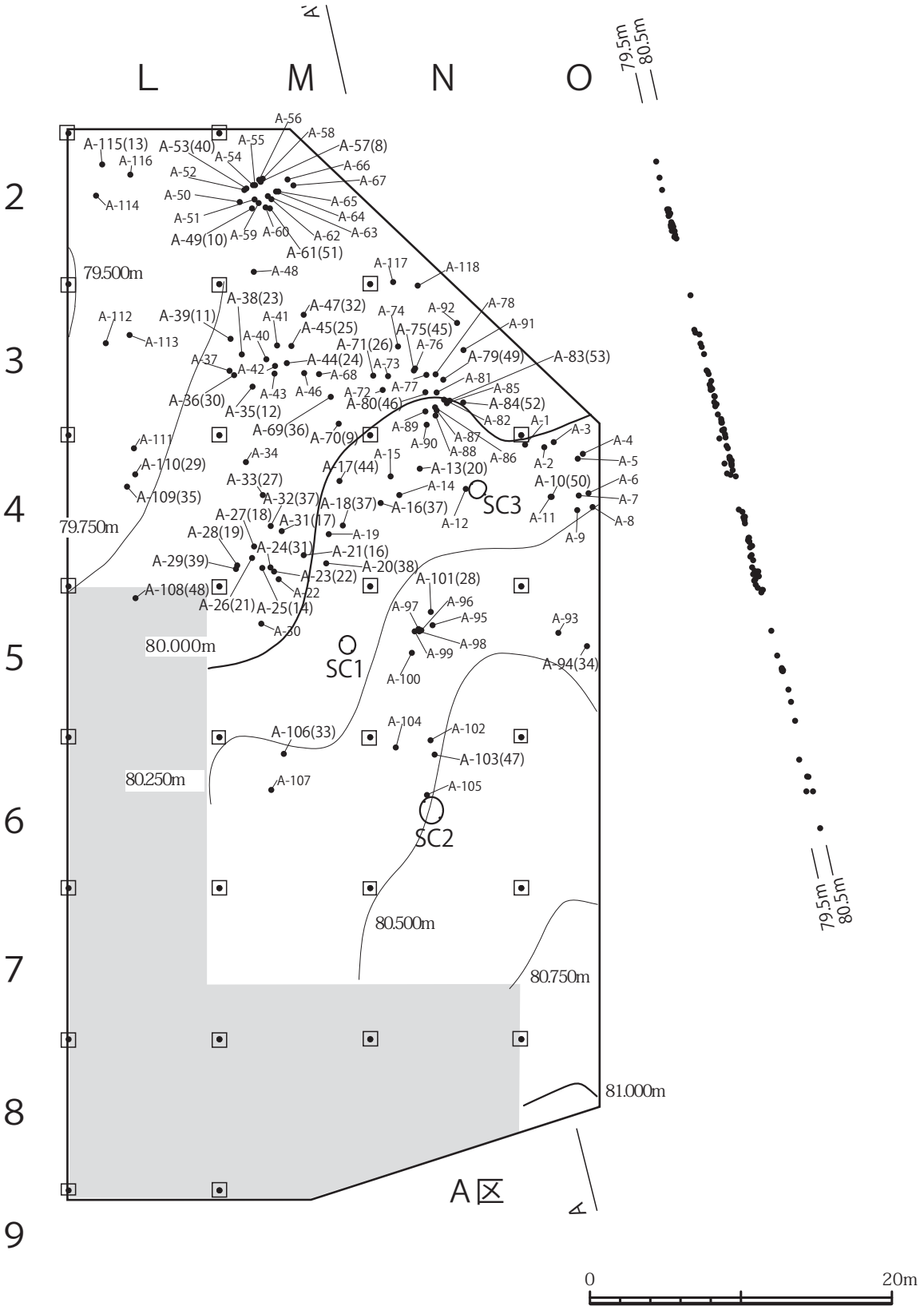
角錐状石器４点、ナイフ形石器２点、敲石２点などの製品が見られる。石材は、黒色流紋岩、灰色流紋岩、茶色流紋岩、白色流紋岩、黒色頁岩、ホルンフェルス、尾鈴山酸性岩類である。

角錐状石器（第 11 図８・９、第 12 図 10・11）

先端部もしくは末端部のみの出土、未製品を含めて４点出土している。全て瀬戸内技法によって剥離された横長剥片素材から製作している。８は正面に



第８図　Ａ区表採石器実測図　（Ｓ＝ 1/1）



第９図　Ａ区遺構分布図及び石器出土分布図　（Ｓ＝ 1/400）

（遺物番号は調査時の取り上げ順。石器観察表の「遺物 No.」に対応する。括弧の数字はﾚｲｱｳﾄ No.。トーン部分は第Ⅶ層で調査終了。）

剥離面を残す黒色頁岩の角錐状石器である。10と11の石材は、同母岩と思われる黒色流紋岩である。

ナイフ形石器（第12図12・13）

２点出土している。12は茶色流紋岩で製作されたいわゆる国府型ナイフである。

敲石（第17図38・39）

尾鈴山酸性岩類と砂岩の敲石が２点出土した。38は、背面に打撃による亀裂が見られる。また、39の付近から台石が出土している。

その他の石器（第15図27、第16図28～37）

剥片、石核などが出土している。剥片は、ホルンフェルス、茶色流紋岩が多く、図化したものはいずれも縦長剥片素材である。

石核も同様にホルンフェルス、黒色流紋岩の石材が見られる。

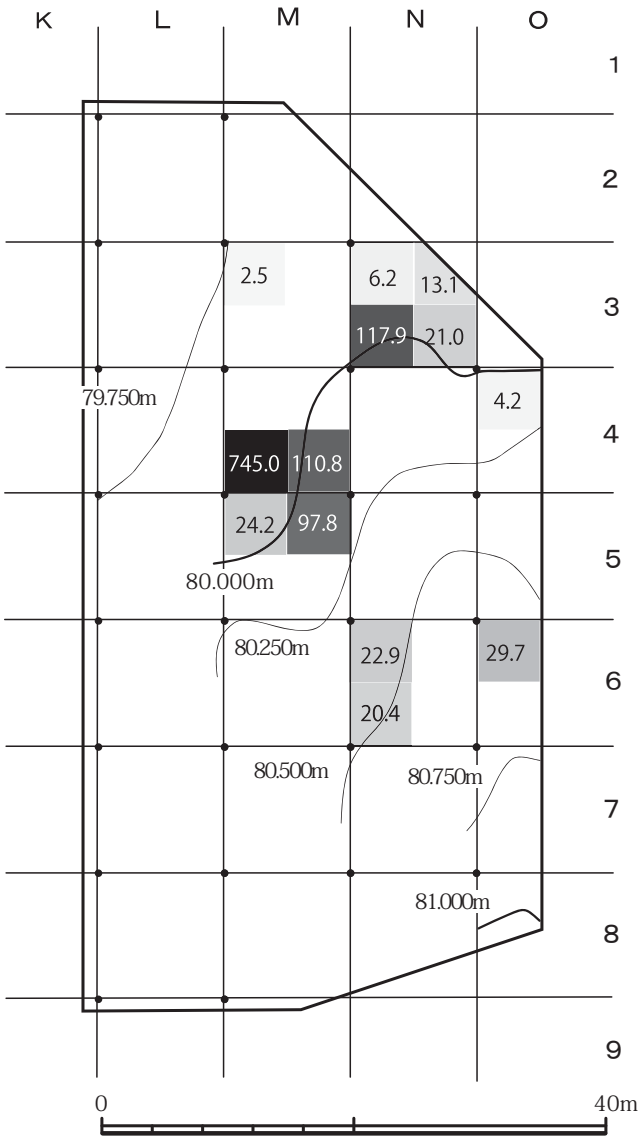
３　縄文時代草創期の遺物

主に、細石刃生産に関連する資料が出土している。細石刃のほかに、細石刃核、敲石、二次加工剥片、剥片、石核、無文土器が出土している。

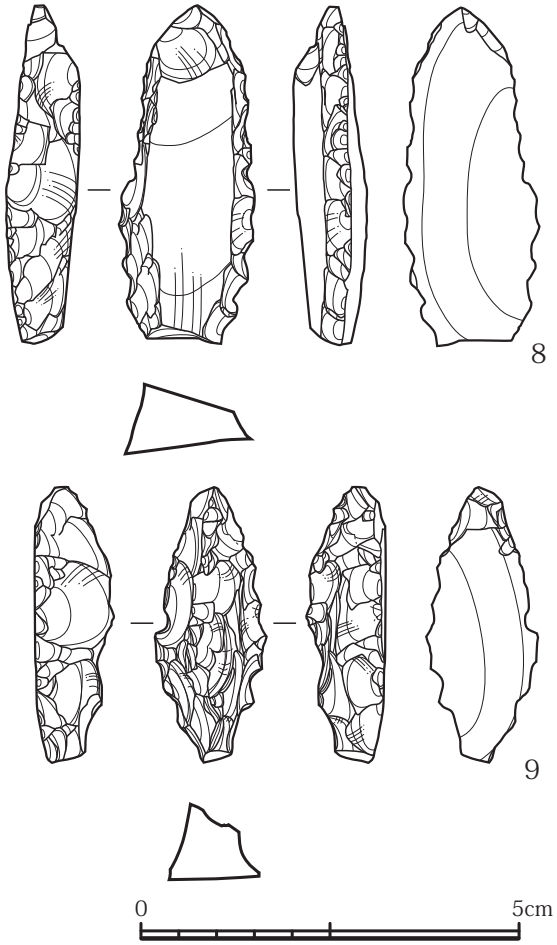
細石刃核（第13図14・15、第14図18・19第14図20、第15図21）

全部で６点出土しており、そのほとんどがＭ４グリッドから出土した。全て、いわゆる船野型細石刃核（14・15・18・19・20・21）と呼ばれる細石刃核が出土した。15は接合資料で、16と17に剥離して出土した。作業面を再生しようとして失敗したものと思われる。

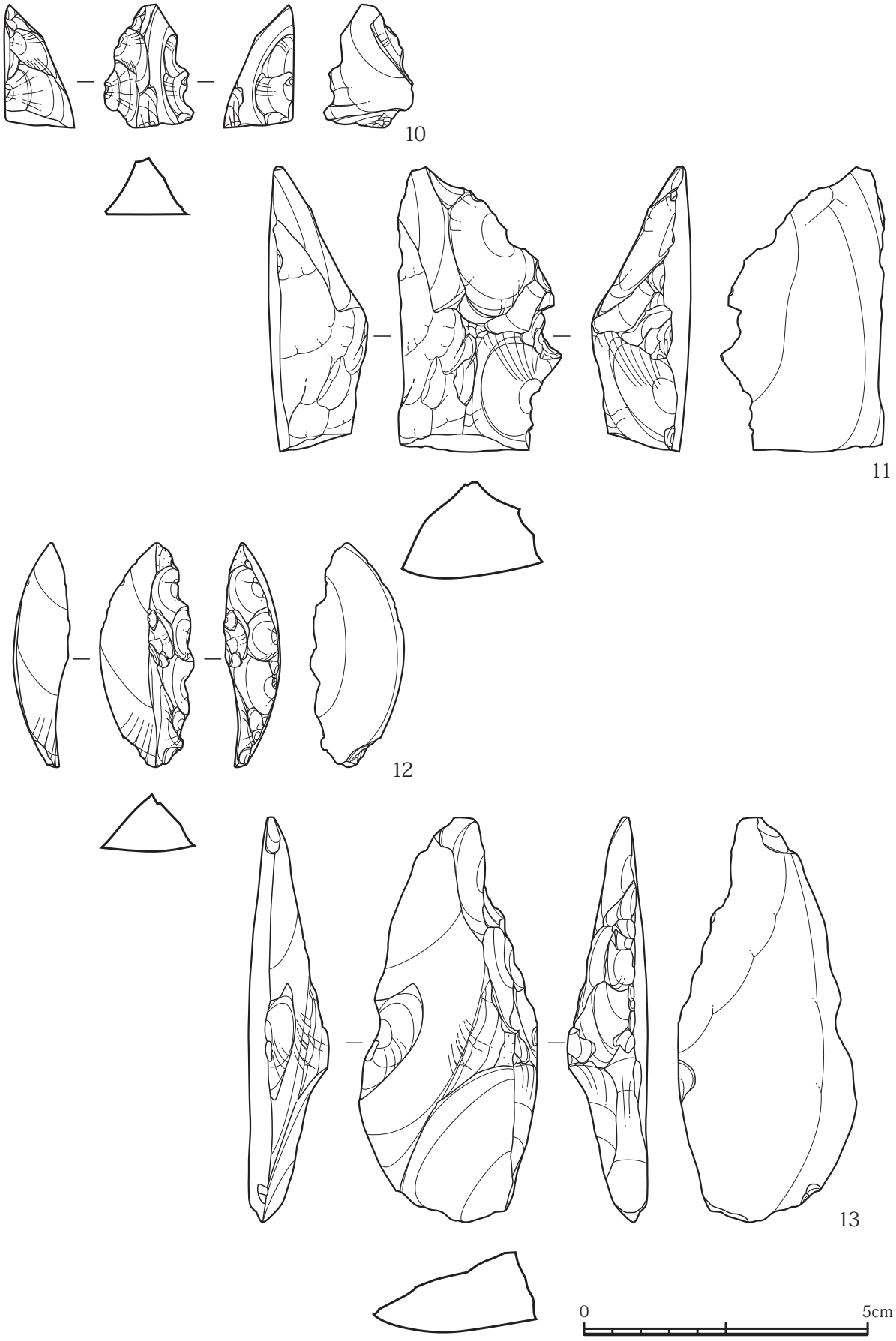
注目されるのは、石材によって細石刃採取後の形態に相違が見られることである。白色流紋岩を利用



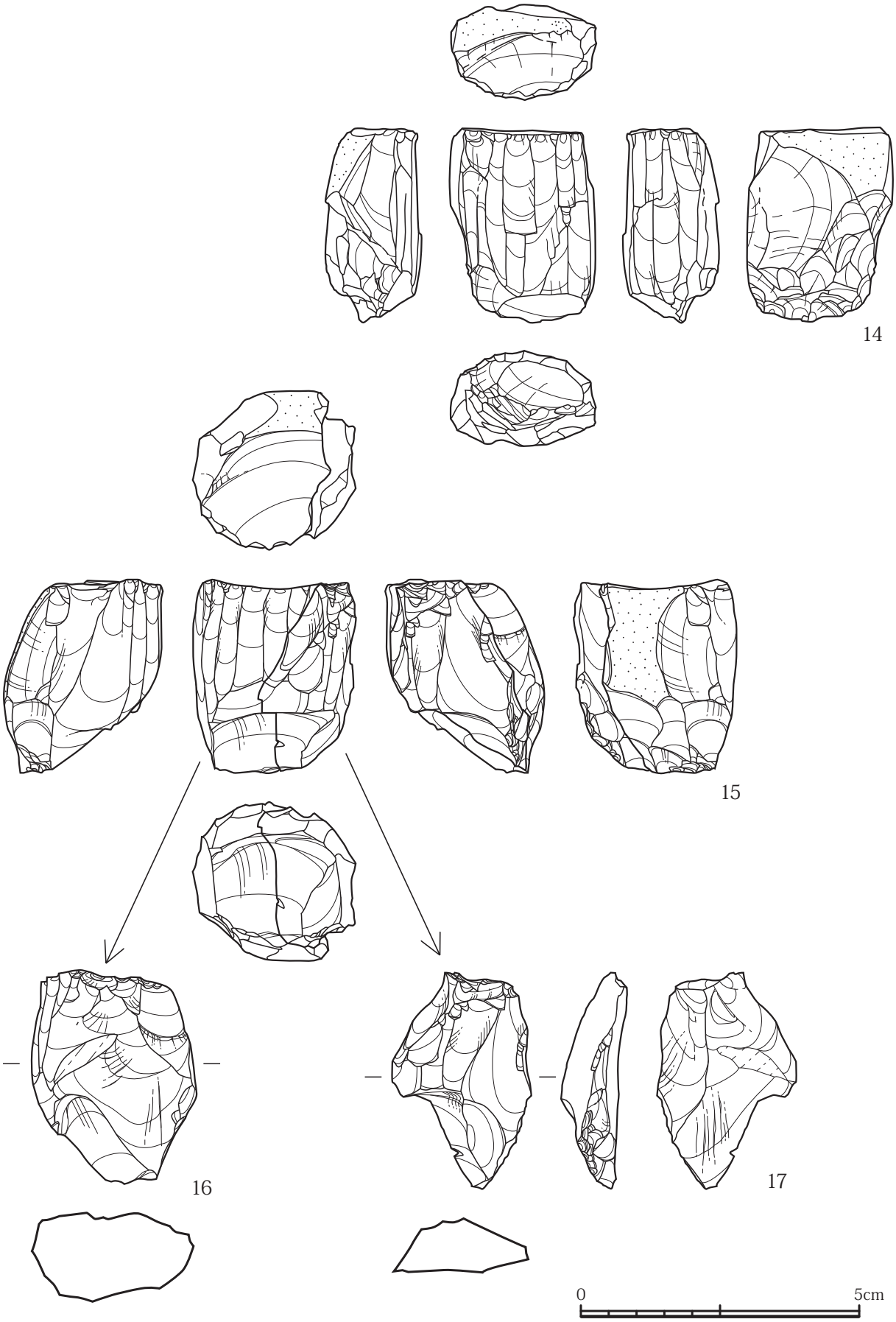
第10図　土器出土分布図（S＝1/600）
（数字はｇ単位）



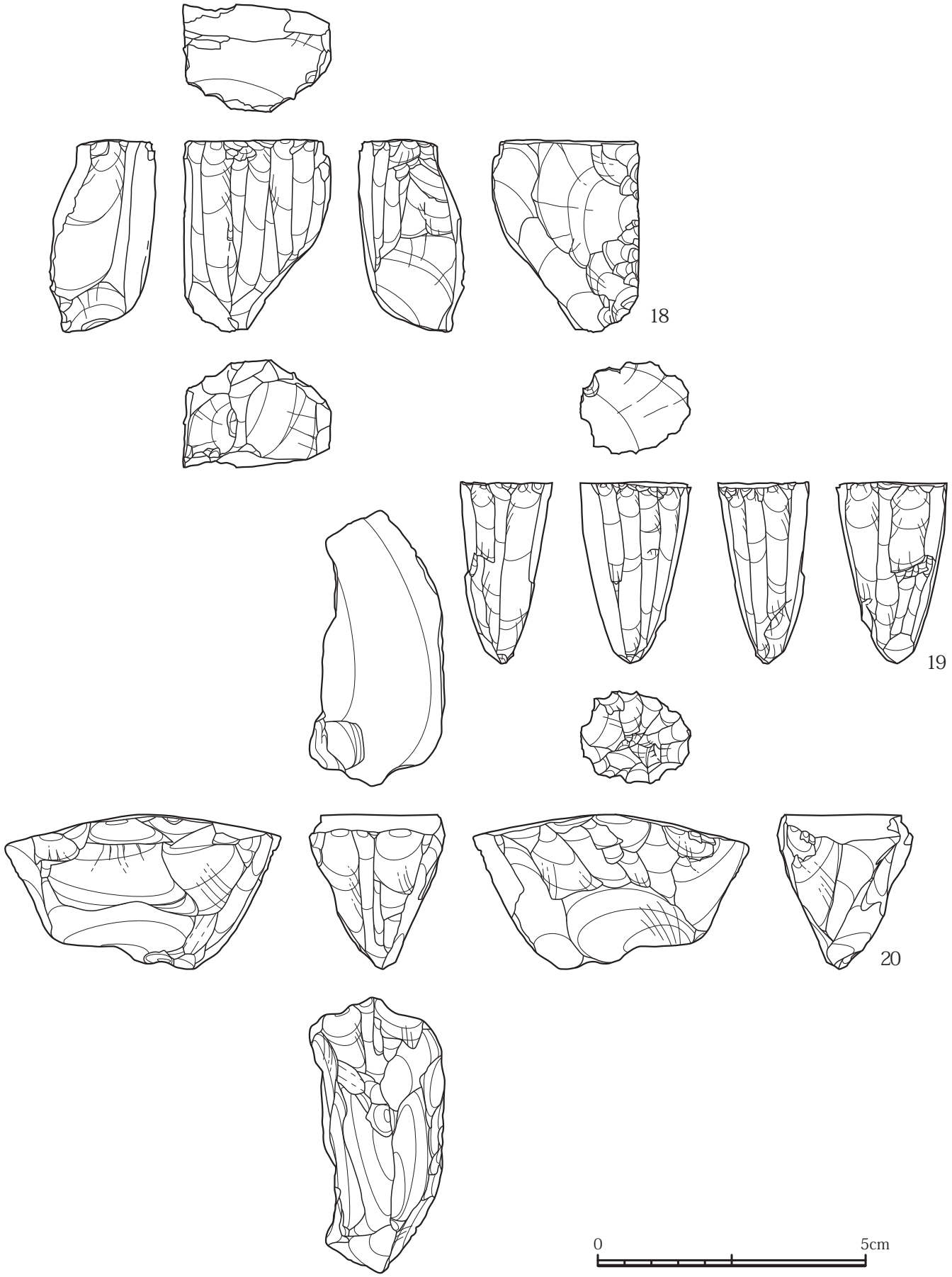
第11図　A区出土石器実測図（1）
（S＝1/1）



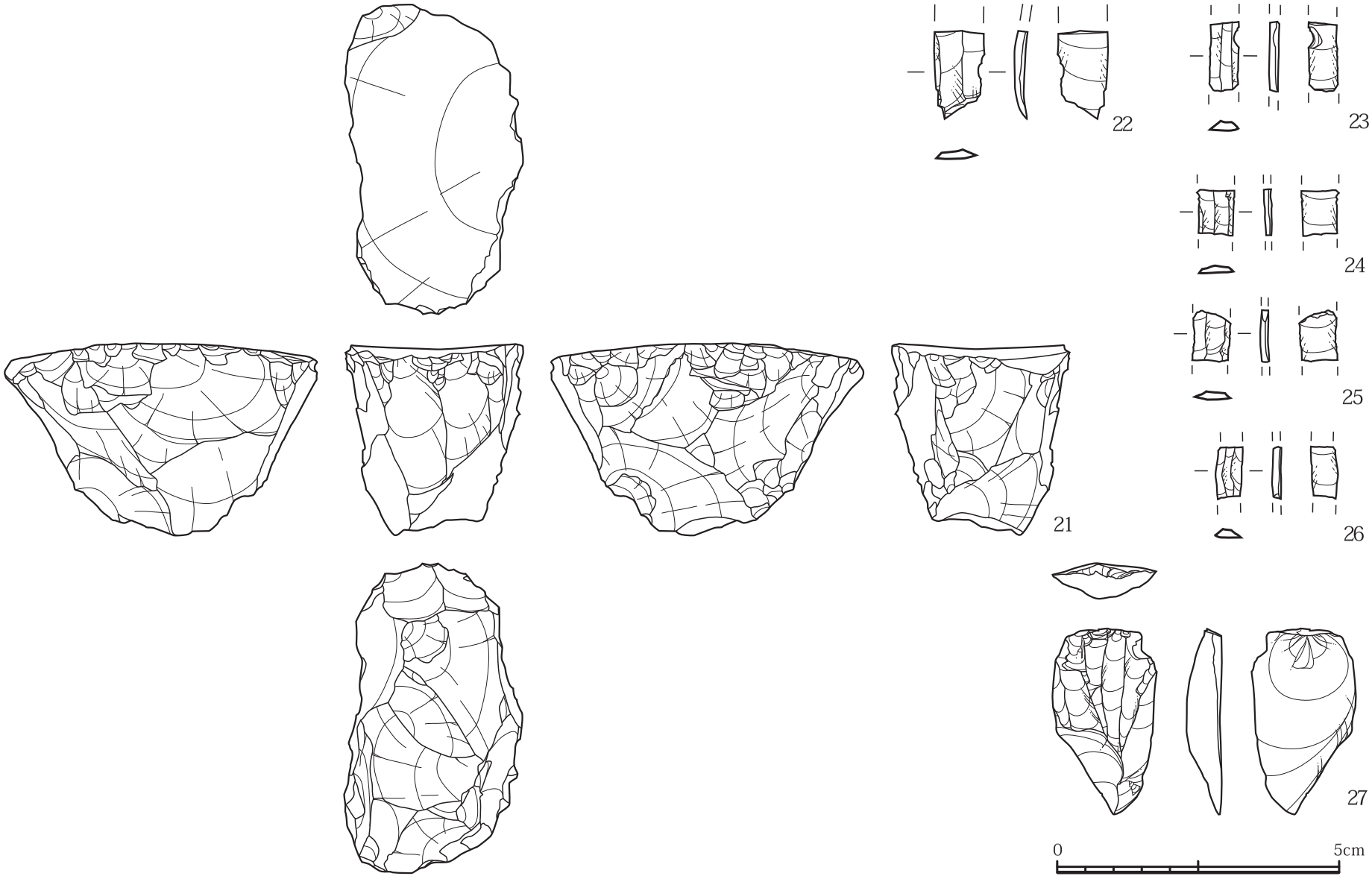
第 12 図　A 区出土石器実測図（2）（S ＝ 1/1）



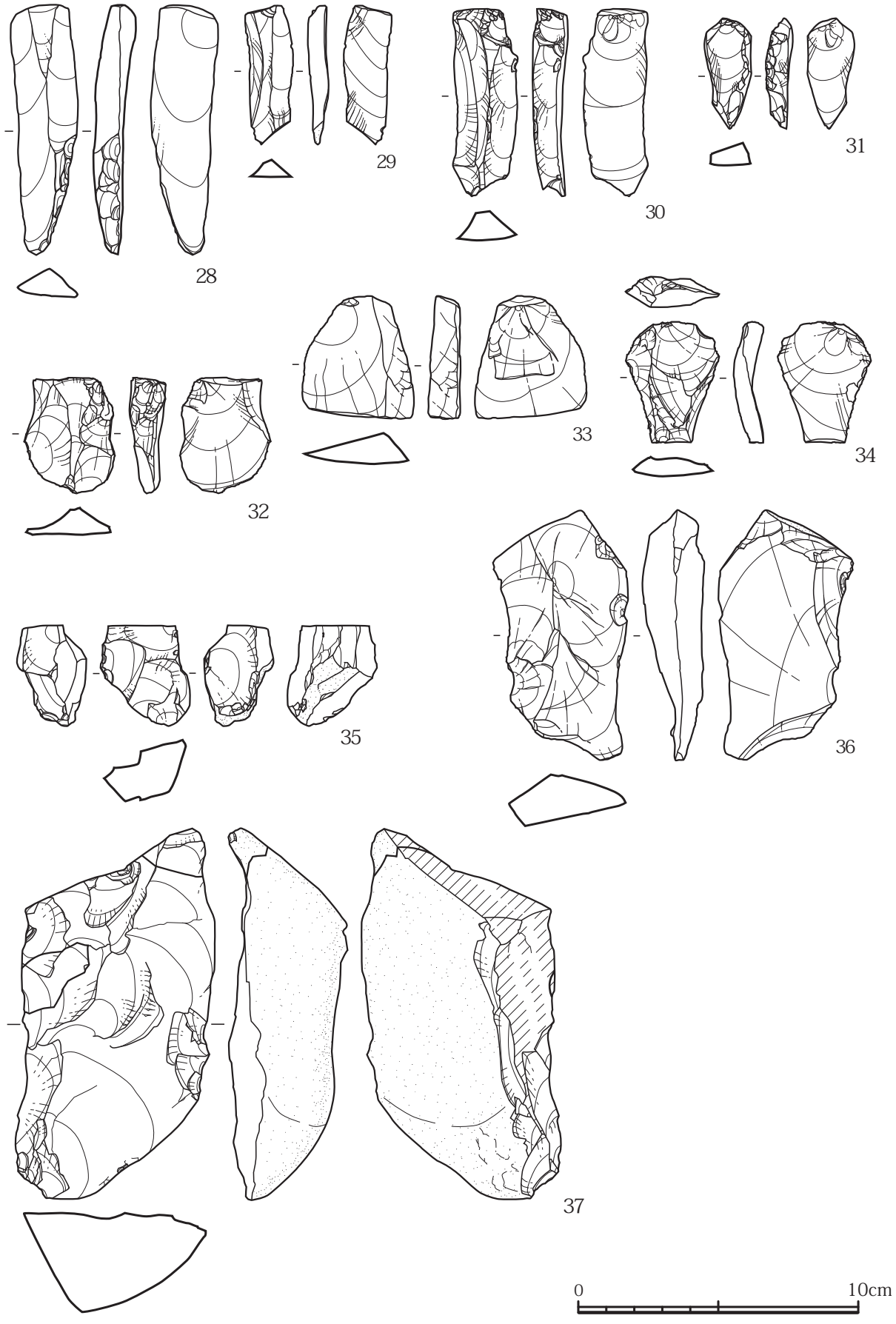
第 13 図　A 区出土石器実測図（3）（S ＝ 1/1）



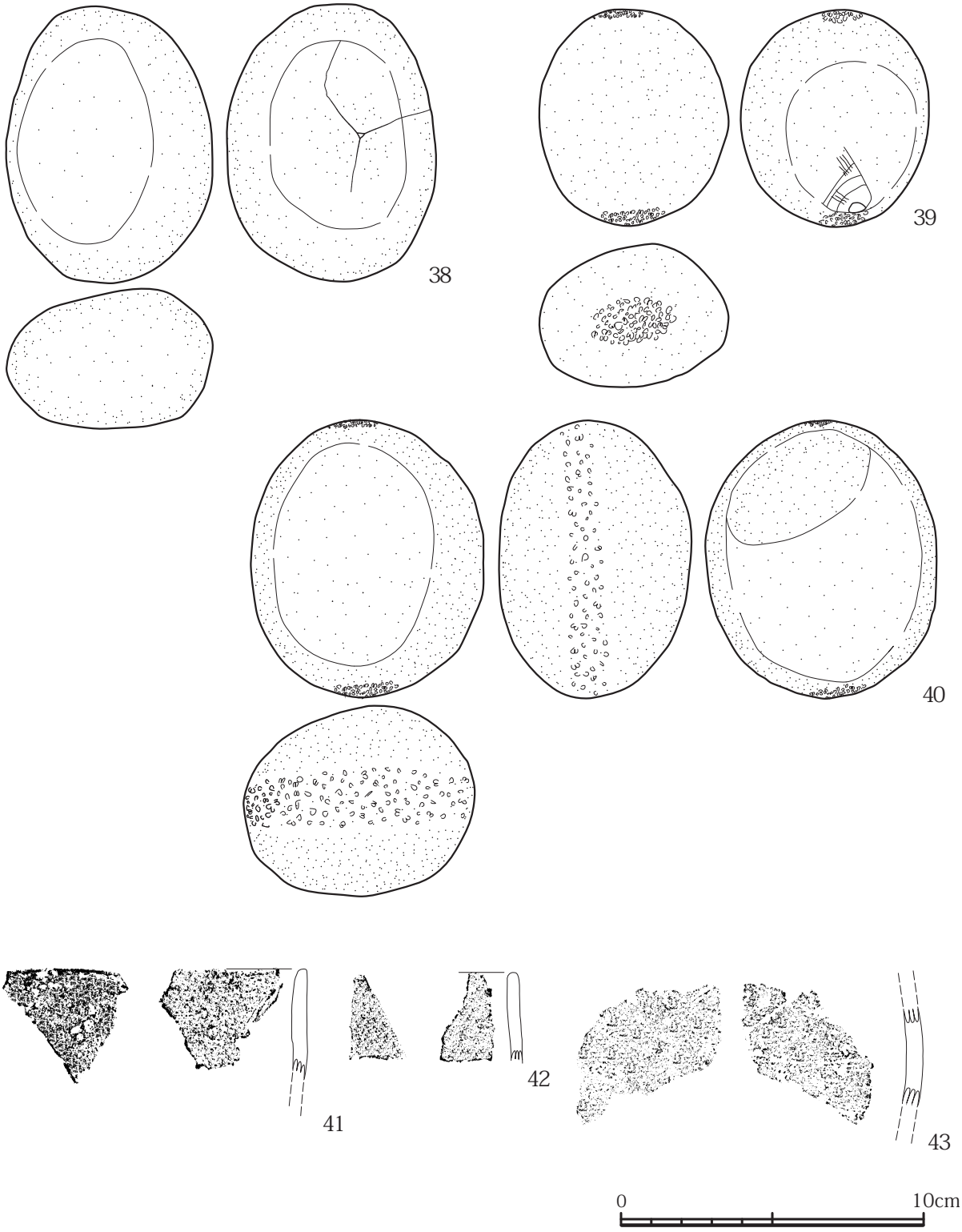
第 14 図　A 区出土石器実測図（4）（S ＝ 1/1）



第 15 図　A 区出土石器実測図（5）（S＝1/1）



第 16 図　A 区出土石器実測図（6）（S = 1/2）



第 17 図　A 区出土石器実測図（7）及び土器実測図（1）（S ＝ 1/2）

した細石刃核は、前述した 15 のように作業面を再生してまで細石刃を製作しようとしているものや、19 のように全面に渡って細石刃を採取し、打面が狭小な円形になるまで使用しているものがある。

一方、ホルンフェルスを利用した細石刃核（20・21）は、いずれも一定の大きさを保ったまま出土した。出土状況に層位的差が見られないため、時期差を知ることはできないが、白色流紋岩はホルンフェルスよりも細石刃製作に好まれた石材であったのではないかということが想定できる。

細石刃（第 15 図 22 ～ 26）

細石刃は 5 点出土しているが、細石刃核が集中して出土した地点から少し離れたＭ 3 グリッドからの出土が多い。また、石材も 5 点中 3 点が黒色流紋岩で、Ａ区では細石刃核の出土がなかった石材である。

その他の石器（第 15 図 27、第 16 図 28 ～ 37、第 17 図 38 ～ 40）

尾鈴山酸性岩類の敲石が 1 点出土している（40）。27 は白色流紋岩の作業面再生剥片である。Ｍ 4 グリッドから出土している。ほかに M4 グリッドから出土している白色流紋岩は、31 の縦長剥片がある。

無文土器（第 17 図 41 ～ 43）

縄文時代草創期から早期前半と思われる無文土器が、わずかではあるが出土している。Ｎ３－１グリッドから 1 点、Ｎ３－２グリッドから 1 点、Ｎ３－３グリッドから 3 点、Ｍ３－４グリッドから 1 点でいずれも第Ⅴ層から出土している。そのうちの 3 点を図化した。

口縁部が厚さ 0.4cm、胴部が厚さ 0.55cm と極めて薄手の無文土器である。また、調整は内外面ともに丁寧な横方向のナデで、色調も明赤褐色（Hue5YR 5/6）と明るく、焼成も大変良好である。

4　縄文時代早期の遺物

主に出土したのは、打製石鏃 5 点と二次加工剥片、剥片、無文土器である（第 18 図）。

打製石鏃（第 18 図 44 ～ 49）

44 は阿蘇象が鼻産ガラス質溶結凝灰岩製の石鏃である。他は若干色調は異なるが全てチャート製の石鏃である。48 は先端部のみの出土である。49 はチャート製の打製石鏃未製品と思われる。

剥片（第 18 図 50 ～ 53）

50 や 51 のようなチャート石材の小形の横長剥片と、大形の 52、53 のような剥片が出土しており、石材は砂岩である。

無文土器（第 19 図 54 ～ 60、第 20 図 61 ～ 66）

無文土器の出土分布は大きく 4 つに分かれる。縄文時代早期の土器と思われるものは土器片が 1 cm 程度のものが多く、接合も不可能なためほとんど図化できなかった。その中で、Ｍ 4 － 3 グリッドを中心として出土した土器群が、唯一復元可能な土器片であった。その大半は第Ⅳ層から出土しており、確認できる個体数は 2 個体ある（第 19 図 54 ～ 60 と第 20 図 61 ～ 65）。縄文時代草創期の無文土器と思われる土器の小片とは法量や色調が全く異なる。概ね厚さは、口縁部が 0.6cm、胴部が 0.7cm 程度で、色調はにぶい黄橙色（Hue10YR 6/4）や橙色（Hue7.5YR 6/6）が多い。いずれも底部は尖底で、底部に厚みはない。縄文時代草創期の無文土器ほどではないが、丁寧な横方向のナデで、焼成も良好な薄手無文土器である。

他に、 1 cm 程度の小片ばかりが出土し、図化できなかったが、Ｎ６－３グリッドを中心とした土器片群と、Ｎ３－３グリッドを中心とした土器片群がある。

1 片のみだが、Ｏ６－１グリッドから内側に貝殻条痕を施す無文土器が出土している（66）。

5　時期不明の土坑

Ａ区では、 3 基の土坑が検出された。検出面は第Ⅳ層もしくは第Ⅴ層で、自然科学分析の結果や状況から判断する限り、縄文時代早期の遺構である可能性は高い。しかし、上面が削平され、土坑の底面のみが浅く残っている状態で検出された。本遺跡では縄文時代早期以降の様相が全く分からなく、その有無も不明のため、帰属する時期は不明とする。

SC 1（第 21 図）

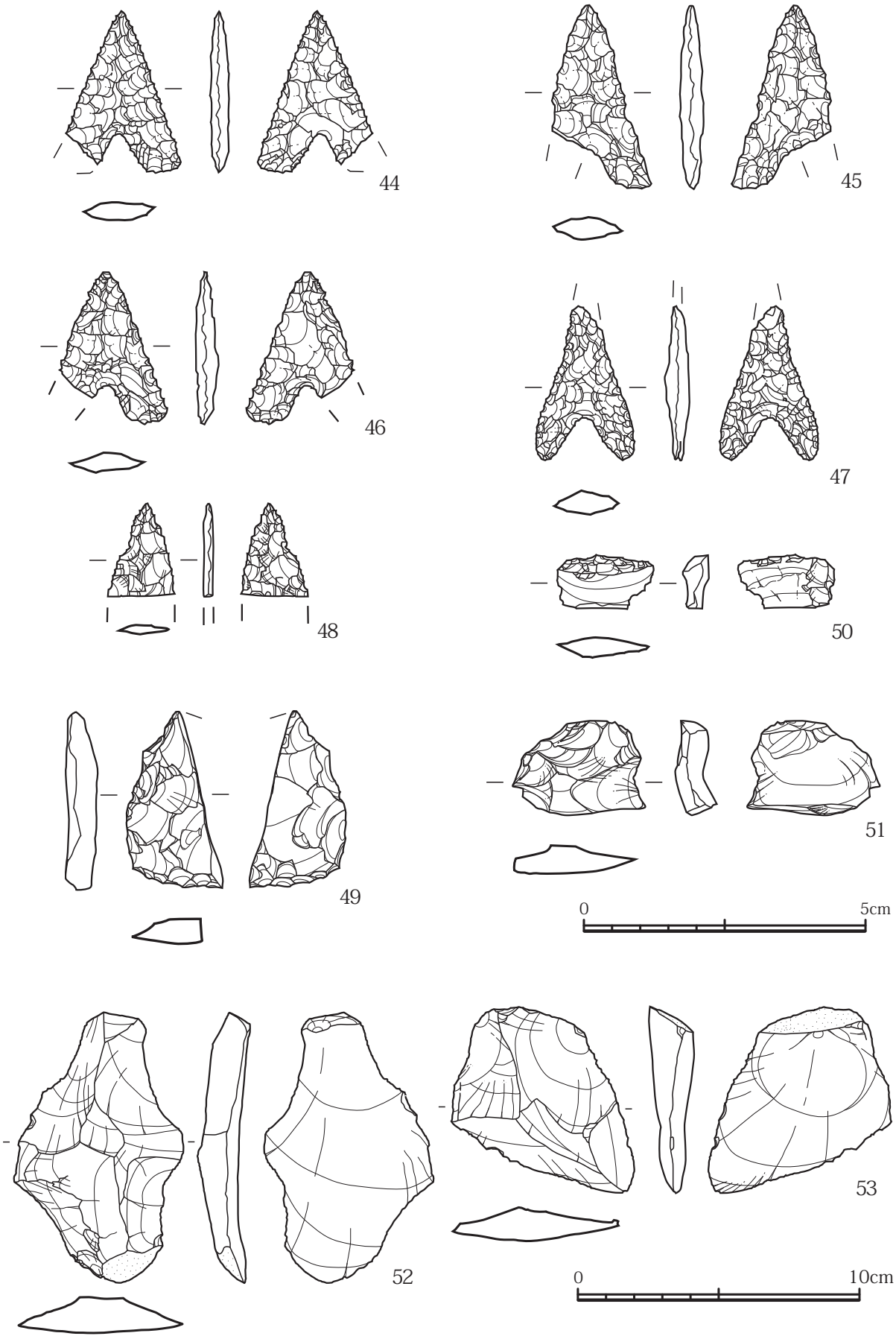
Ｍ５－２グリッドとＭ５－４グリッドの中央の第Ⅳ層から検出された。上面が削平されているため浅い土坑であるが、本来はもう少し深い土坑であったと思われる。断面を観察すると、焼土を掻き出したような痕跡があり、炉跡であると思われる。

SC 2（第 21 図）

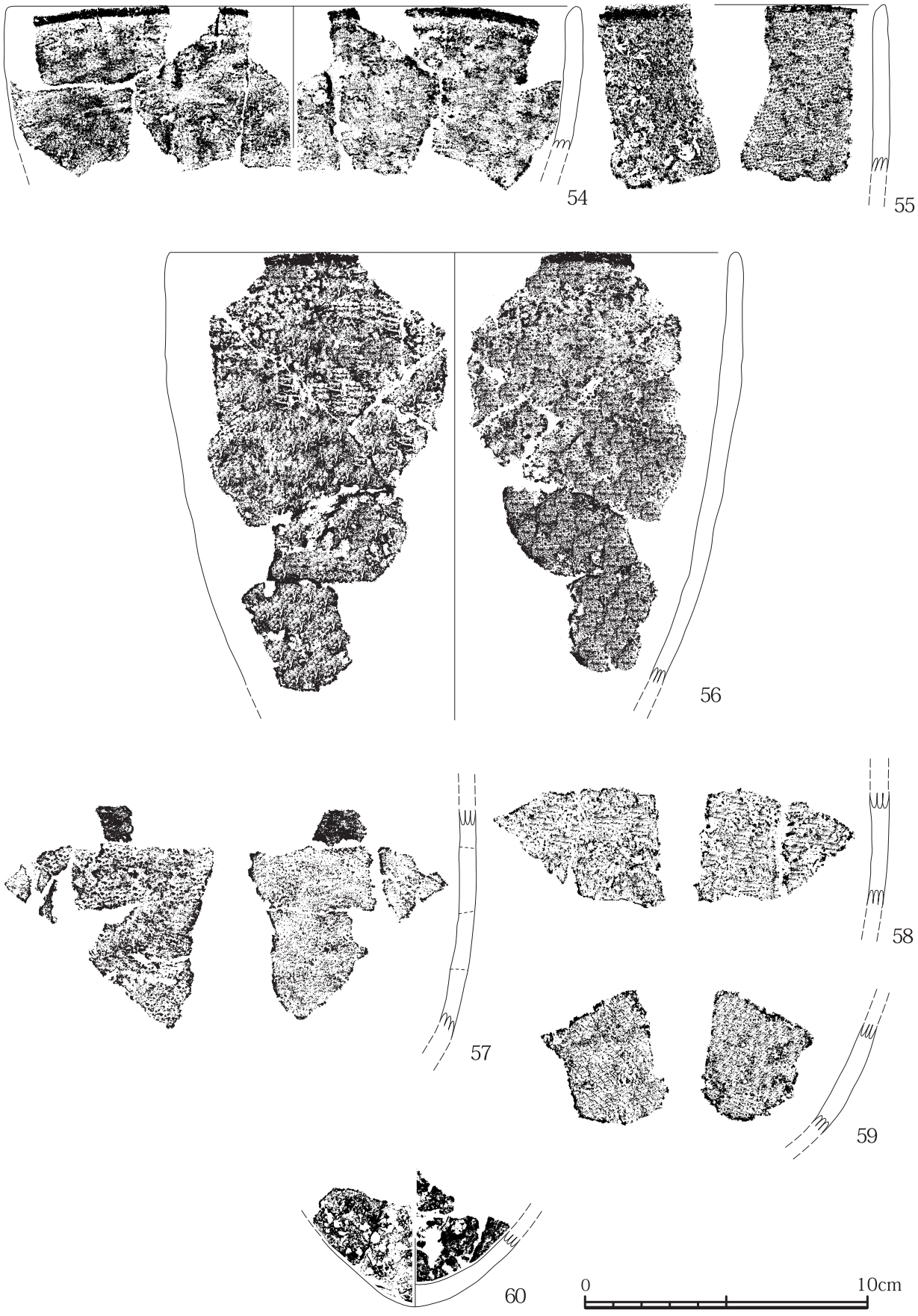
Ｎ６－１グリッドとＮ６－３グリッドの中央の第Ⅳ層から検出された。深さが 1 m程あり縦横軸は 30cm 程度、埋土中に焼土は確認できない。Ｎ６－３グリッドからは多数の縄文時代早期無文土器の小片が出土しており、何らかの関連性が考えられる。

SC 3（第 21 図）

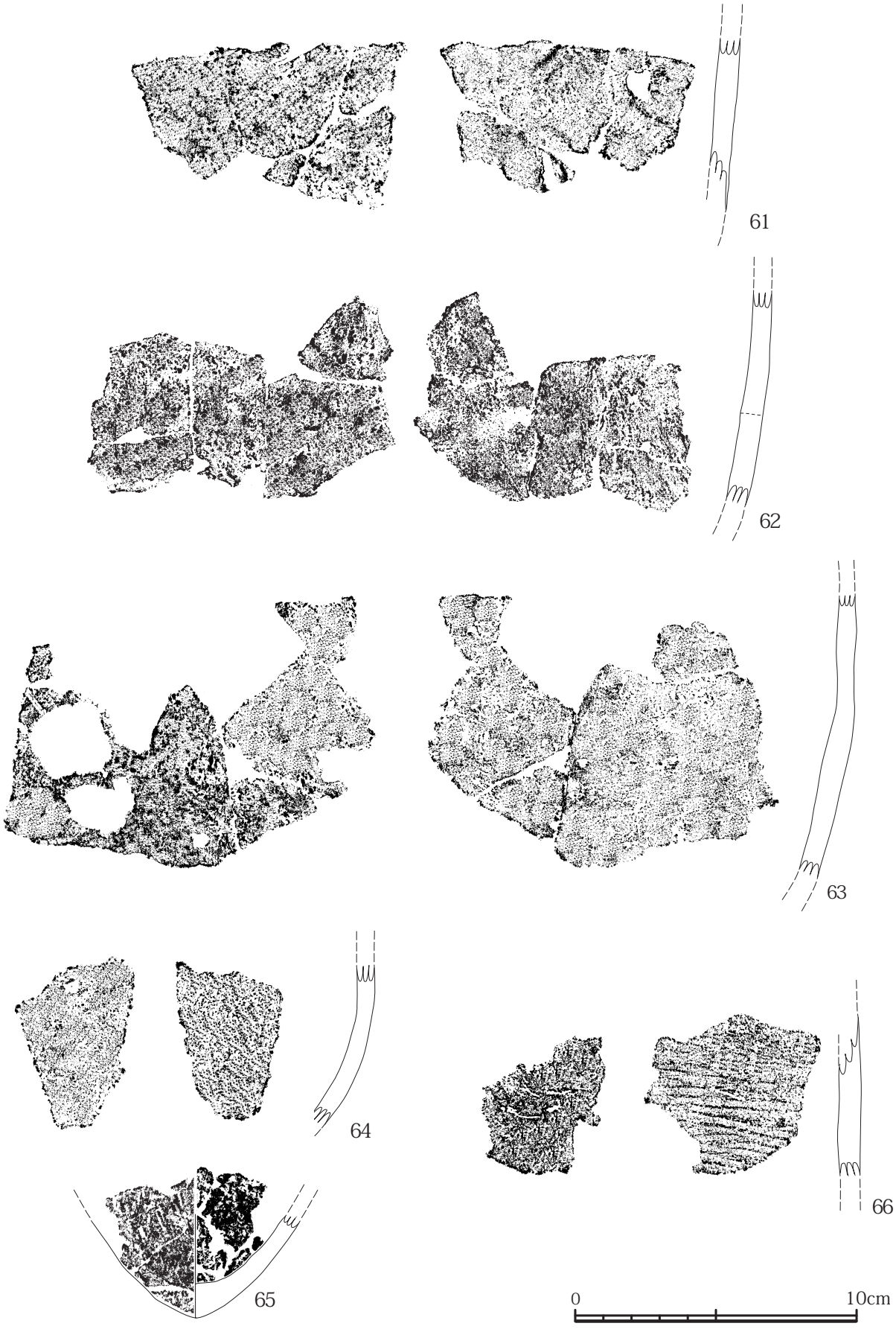
Ｎ４－２グリッドの第Ⅴ層から検出された。SC 1



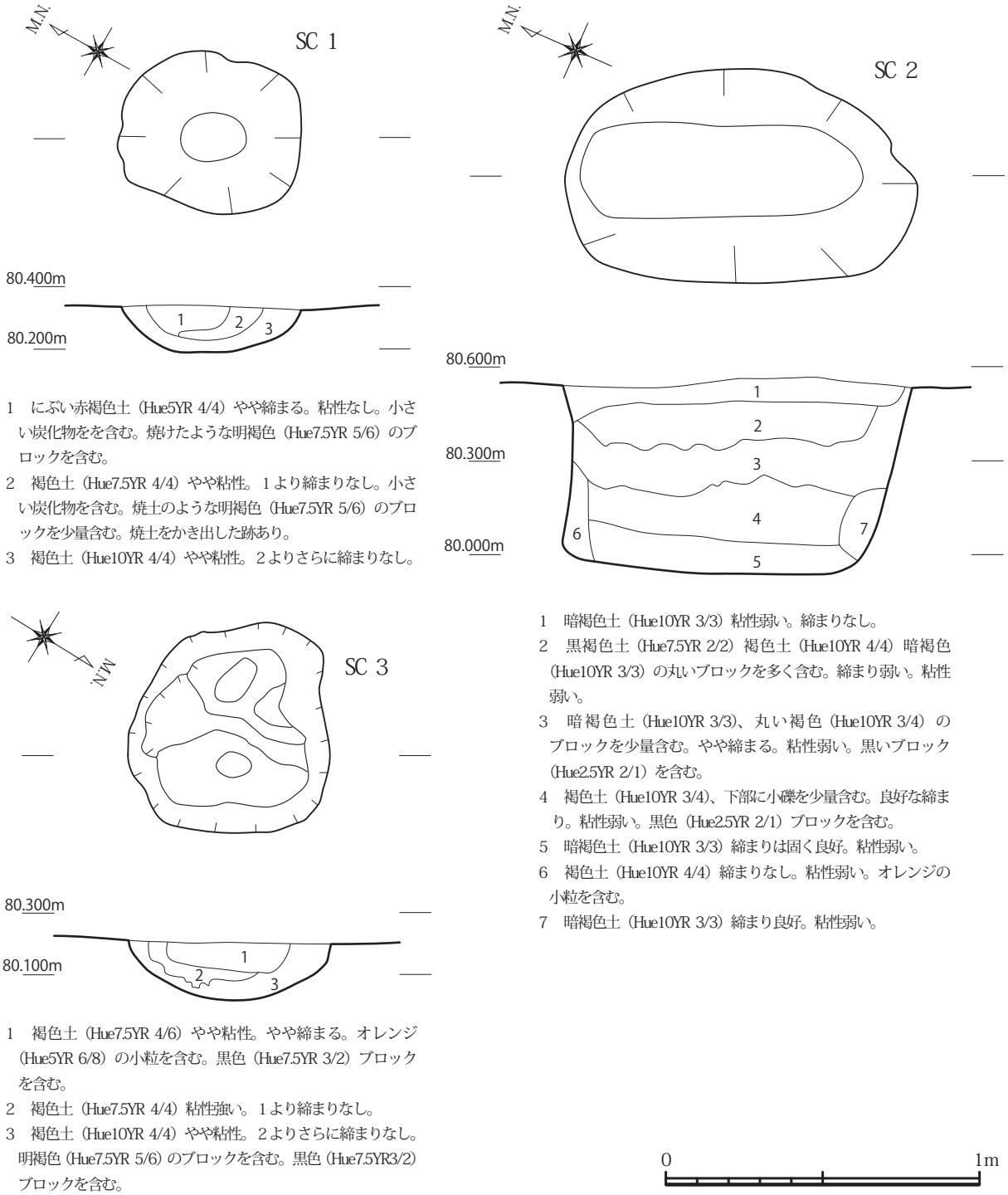
第 18 図　A 区出土石器実測図（8）（S ＝ 1/1、52,53 は S ＝ 1/2）



第19図　A区出土土器実測図（2）（S＝1/2）



第20図　A区出土土器実測図（3）（S＝1/2）



1　にぶい赤褐色土（Hue5YR 4/4）やや締まる。粘性なし。小さい炭化物をを含む。焼けたような明褐色（Hue7.5YR 5/6）のブロックを含む。

2　褐色土（Hue7.5YR 4/4）やや粘性。1より締まりなし。小さい炭化物を含む。焼土のような明褐色（Hue7.5YR 5/6）のブロックを少量含む。焼土をかき出した跡あり。

3　褐色土（Hue10YR 4/4）やや粘性。2よりさらに締まりなし。

1　暗褐色土（Hue10YR 3/3）粘性弱い。締まりなし。

2　黒褐色土（Hue7.5YR 2/2）褐色土（Hue10YR 4/4）暗褐色（Hue10YR 3/3）の丸いブロックを多く含む。締まり弱い。粘性弱い。

3　暗褐色土（Hue10YR 3/3）、丸い褐色（Hue10YR 3/4）のブロックを少量含む。やや締まる。粘性弱い。黒いブロック（Hue2.5YR 2/1）を含む。

4　褐色土（Hue10YR 3/4）、下部に小礫を少量含む。良好な締まり。粘性弱い。黒色（Hue2.5YR 2/1）ブロックを含む。

5　暗褐色土（Hue10YR 3/3）締まりは固く良好。粘性弱い。

6　褐色土（Hue10YR 4/4）締まりなし。粘性弱い。オレンジの小粒を含む。

7　暗褐色土（Hue10YR 3/3）締まり良好。粘性弱い。

1　褐色土（Hue7.5YR 4/6）やや粘性。やや締まる。オレンジ（Hue5YR 6/8）の小粒を含む。黒色（Hue7.5YR 3/2）ブロックを含む。

2　褐色土（Hue7.5YR 4/4）粘性強い。1より締まりなし。

3　褐色土（Hue10YR 4/4）やや粘性。2よりさらに締まりなし。明褐色（Hue7.5YR 5/6）のブロックを含む。黒色（Hue7.5YR3/2）ブロックを含む。

第 21 図　A区検出土坑実測図　（S = 1/20）

の土坑と類似し、上面が削平されているために検出時は浅い土坑だが、本来はもう少し深い土坑であったと思われる。

埋土中から炭化物が検出されたため自然科学分析にかけてみたところ、出土した炭化物は木材ではないとの結果を得た。所見したところ動物の脂が炭化したもののように見える。また、放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、この炭化物から 8,530 ± 50 年 BP（BC7,590 ～ 7,550 年）の年代値を得ている。

埋土中から焼土が確認でき、炉跡である可能性が高い。

第４節　Ｂ区の調査記録

１　概要

Ｂ区の調査対象面積は、750㎡である。耕作地であったため、現在は平坦に整地されているが、重機で表土を除去したところ、西に向かって緩やかに傾斜しており、旧地形は、調査区Ｃ区から続く大師山の山裾であったと推測される。

姫島産黒曜石の石鏃（第 22 図 67）が表採され、かつては縄文時代早期の遺構や遺物が存在したかもしれないが、相当大幅な削平を受けており詳細は不明である（図版４：Ｂ区北壁土層断面写真参照）。調査区の中央に大きな段差があり、北側の方がさらに下層まで削平されていた。表土を除去すると、調査区北側は、すでに第Ⅹ層の暗褐色土が出現し、山裾のＢ区調査区東端側の方にかろうじて姶良 Tn 火山灰が残存している状況である。調査区南側は一段高く地形が残っていたおかげで、第Ⅵ層から確認できる箇所もあった。

確認された遺構・遺物の数も少なく（第 23 図）、また出土層位も不安定である。出土した遺物を観察する限り、決して AT 下位層から出土し得ないものも見られ、出土層位を基準として遺構・遺物の帰属時期を決定することは困難である。

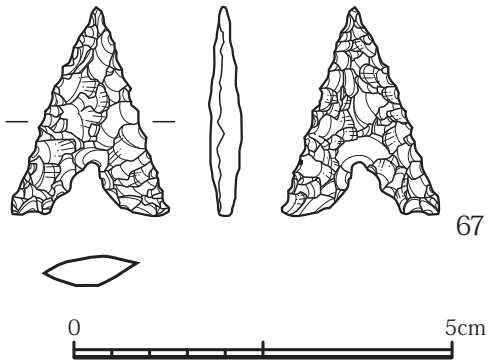
遺構・遺物の観察だけによると、遺跡の活動時期はＡ区と相違ないものと思われる。以下、簡単に検出した遺構・遺物について若干記述する。

２　旧石器時代終末期～縄文時代早期の遺構

礫群が２基検出された（第 23 図）。自然科学分析によって、約１万年前の遺構であるとの結果を得たが、出土層位が AT とブラックバンドが混在する層なので、礫群として報告する。

SI ４（第 24 図）

調査区北端のＤ３グリッドより検出された。掘り込みはない。礫群を構成する礫として、１ｍ大の巨礫が含まれる。構成礫は巨礫を除いた個体数が 127 個となり、平均すると長さ 6.7cm、幅 5.0cm の礫である。石材は全て尾鈴山酸性岩類である。黒曜石の細石刃核（第 25 図 69）や縦長剥片（第 26 図 72）



第 22 図　Ｂ区表採石器実測図（Ｓ＝ 1/1）

が礫群内から出土し、ホルンフェルス製の縦長剥片（第 23 図遺物 No.B-19）が遺構の東側端から出土している。

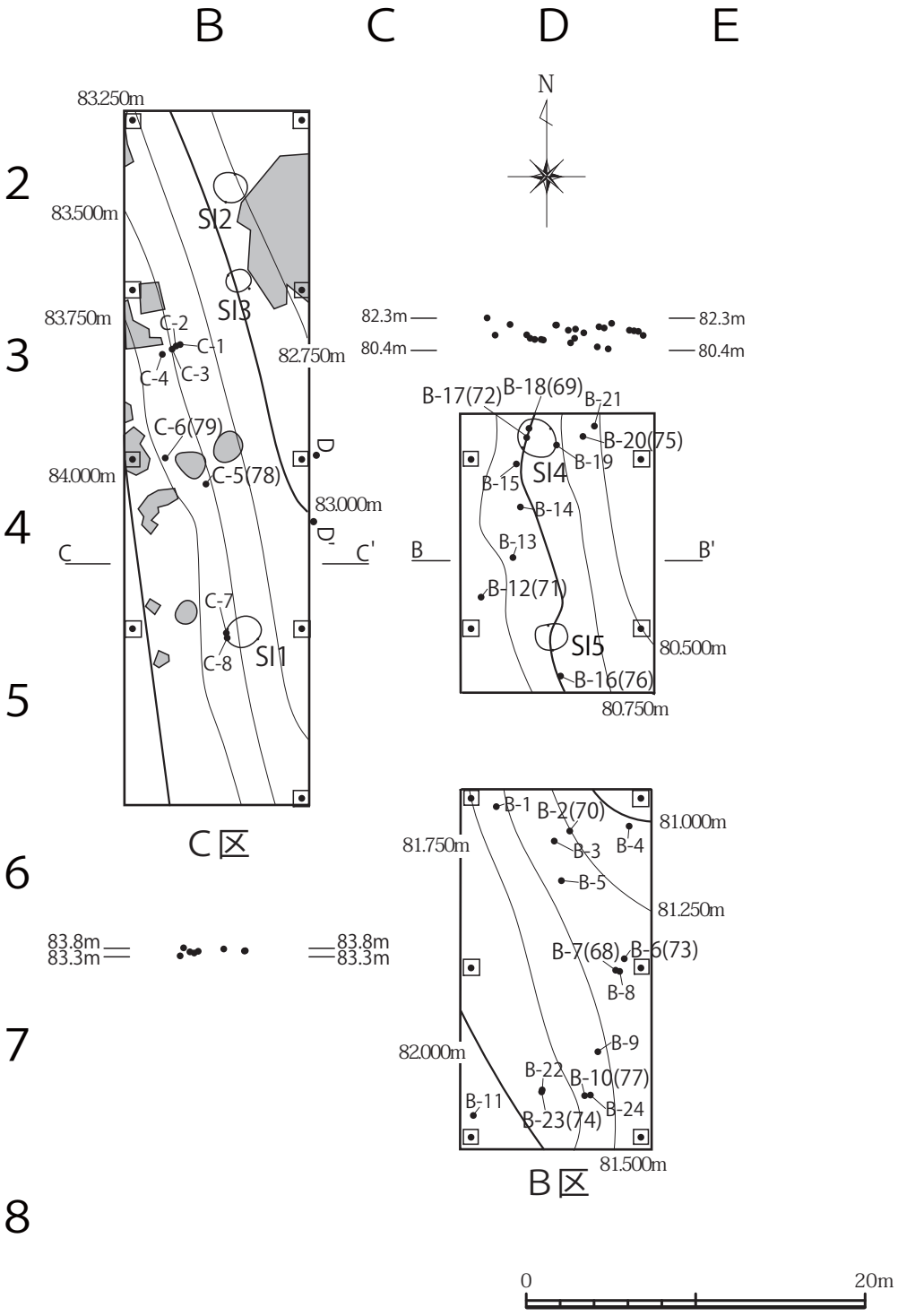
礫群内から炭化材が検出されたので、自然科学分析にかけてみたところ、北海道から九州までの広範囲に分布するコナラ属コナラ節の炭化材である樹種同定結果を得た。また、放射性炭素年代測定の結果、この炭化材は、10,620 ± 70 年（BC10,960 ～ 10,660、10,530 ～ 10,410 年）の年代値を得ている。

SI ５（第 24 図）

調査区中央のＤ５グリッドより検出された。掘り込みはない。構成礫は個体数として 22 個で、その平均は、長さ 9.3cm、幅 6.9cm である。ただし、SI ５はその北側に散礫状に礫が広がっている。北側に広がる散礫は、耕作土の土が下に入り込んでいるため、原位置を保っていないが、元々はこれらの散礫の礫も SI ５を構成していた礫と思われる（図版５：SI ５北側散礫写真参照）。北側散礫の構成礫は個体数として 113 個で、平均の長さ 9.1cm、幅 6.6cm を計り、石材は全て尾鈴山酸性岩類である。

３　旧石器時代終末期～縄文時代早期の遺物

前述したように、Ｂ区調査区は層位的な遺物属性を検討するには困難な調査区である。出土した遺物の点数も 24 点の石器のみである。層位では AT 下位の第Ⅹ層から、Ａ区では見られなかった灰色に橙色の斑点の入るホルンフェルスの剥片が出土し、縄文時代早期で多く見受けられる石材の遺物が含まれる。そこで、本項では時代を問わず、出土した遺物の記述をする。



第 23 図　B 区・C 区遺構分布図及び遺物分布図　（S = 1/400）

（遺物番号は調査時の取り上げ順。石器観察表の「遺物 No.」に対応する。括弧はレイアウト No.。トーン部分は撹乱）

角錐状石器（第 25 図 68）

1 点のみ確認できる。第 23 図の遺物番号 B －７と B －８の石器が接合した状態のものである。長さ 11.7cm、幅 4.9cm、厚さ 3.4cm のかなり大形な角錐状石器の未製品である。石材は赤茶色の縞模様が入る白色流紋岩である。第Ⅷ層から出土している。

細石刃核（第 26 図 69、第 27 図 70）

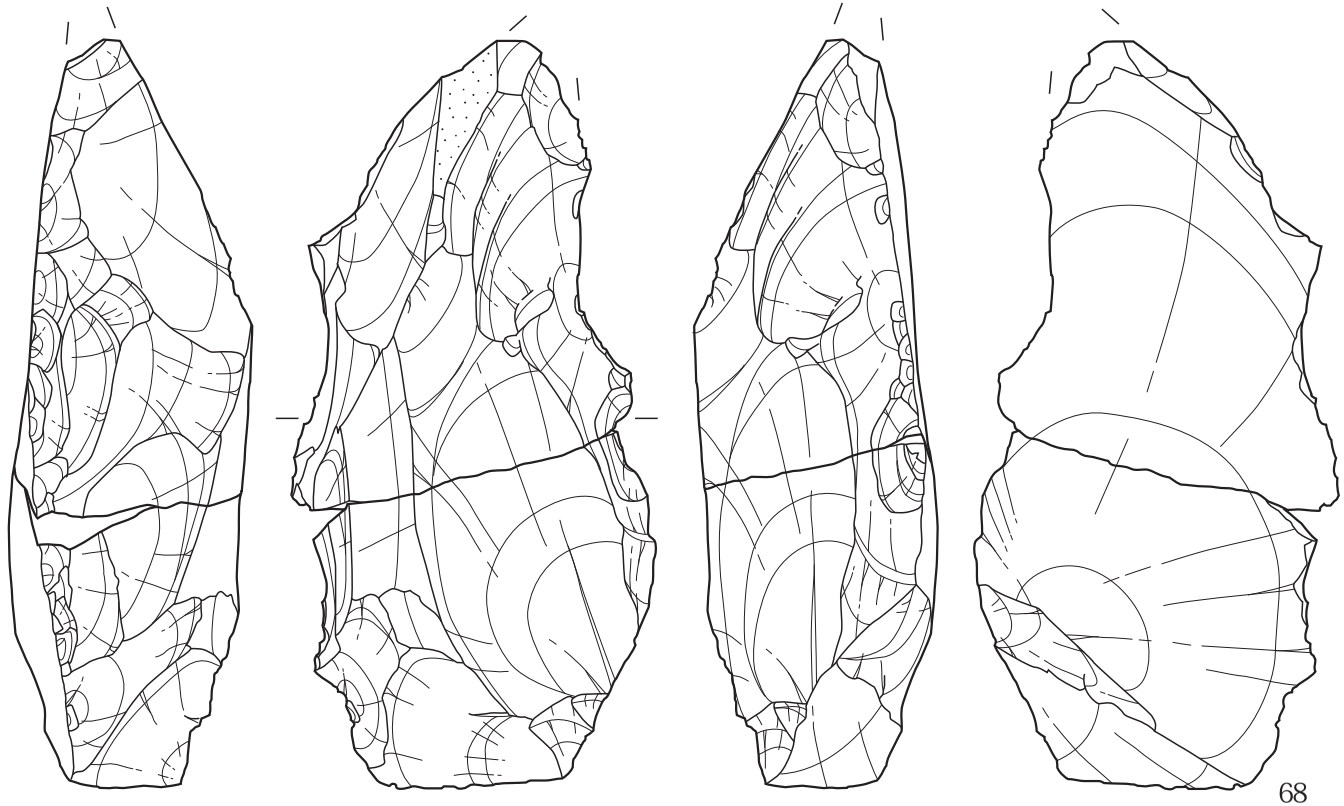
2 点出土している。石材は黒曜石と、黒色流紋岩でいずれも A 区では出土しなかった石材の細石刃核である。69 は桑ノ木津留産黒曜石で、右側面に礫面

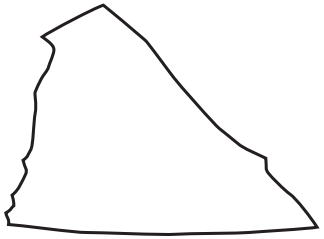
第 24 図　B 区礫群実測図 （S ＝ 1/20）

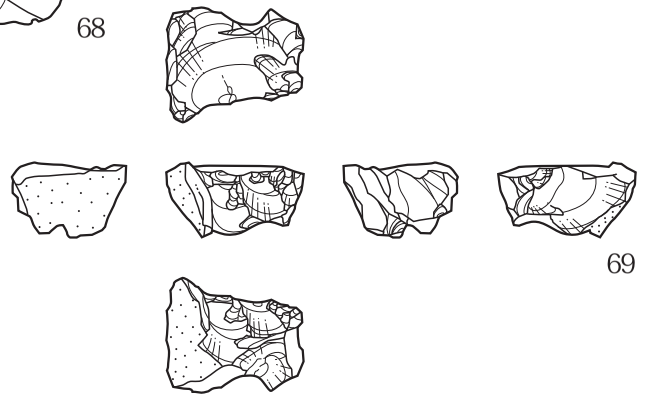
を残す。70 は本遺跡で唯一出土した黒色流紋岩の船野型細石刃核である。黒色流紋岩の細石刃はＡ区で出土している。

その他の石器（第 26 図 72 ～ 77）

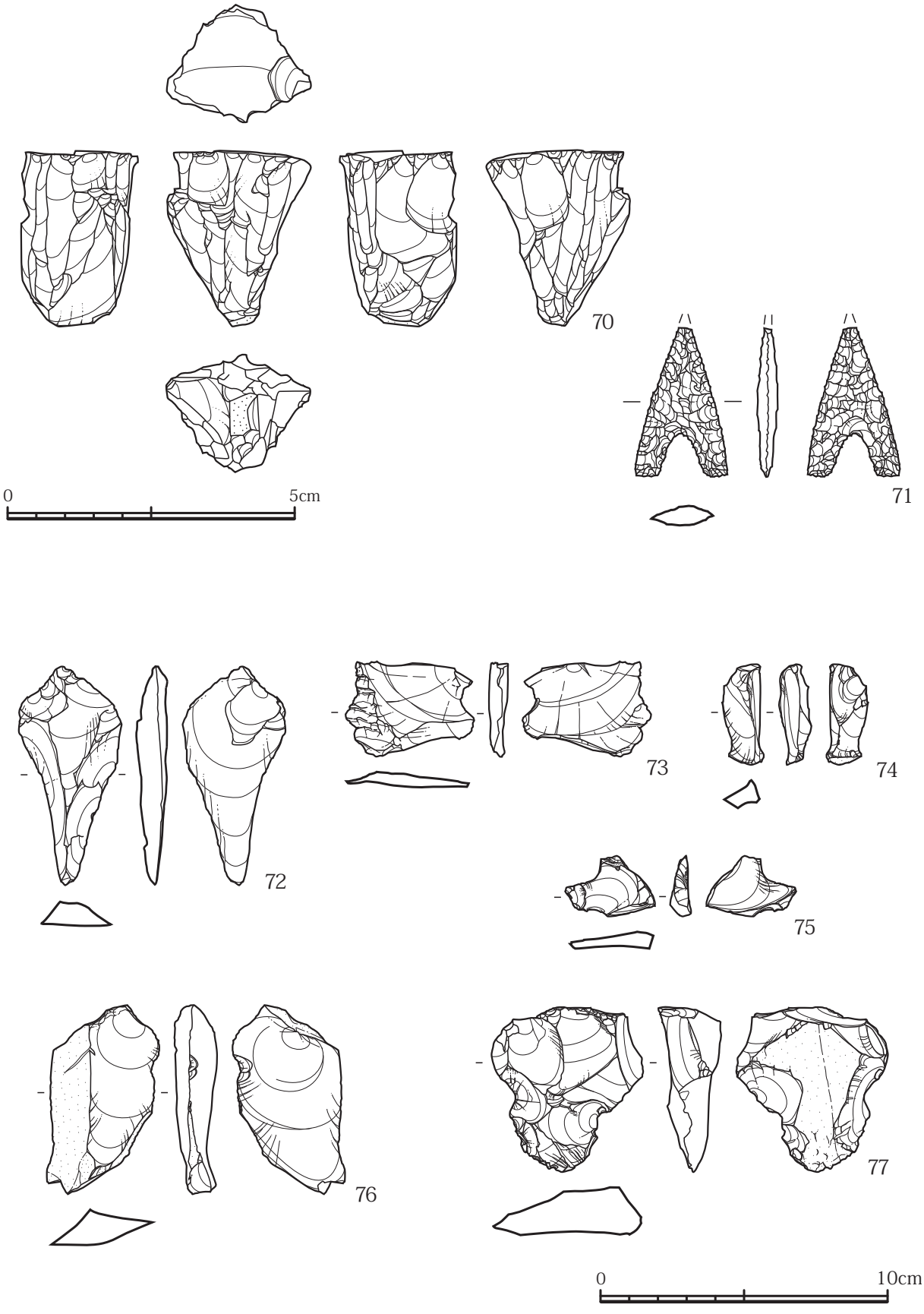
剥片や石核が出土した。帰属時期は不明である。72 は黒色流紋岩に白い斑点が無数に混在する流紋岩の縦長剥片素材である。77 は白色流紋岩の石核で背面に礫面を残す。







第 25 図　B 区出土石器実測図（1）（S = 1/1）



第 26 図　B 区出土石器実測図（2）（70,71 は S ＝ 1/1、S ＝ 1/2）

第５節　Ｃ区の調査記録

１　概要

Ｃ区の調査対象面積は、930㎡である。大師山の東側山裾に立地し、緩やかな傾斜をなす。現在も山裾としての地形を保っているため、傾斜地ではあるが層位は最も安定している（第 27 図）。ただし､所々大きな範囲で攪乱を受けている箇所はある。

確認調査の時点では、第Ⅹ層からホルンフェルスの剥片が１点出土したが、本調査において第Ⅹ層から遺物は出土しなかった。

Ｃ区調査区の遺構・遺物包含層は第Ⅳ層と第Ⅴ層で集石遺構３基が検出され、石器２点、土器片６点が出土した（第 23 図）。遺構・遺物の帰属時期は縄文時代早期と捉えられる。

２　縄文時代早期の遺構

集石遺構が３基検出された。集石遺構が検出された標高は 80.2m から 80.6m に収まる。掘り込みのあるＳＩ１のみ調査区南側より離れて検出され、掘り込みのないＳＩ２とＳＩ３は調査区北側から近接して検出された。形態に差は見られるが、検出状況からほぼ同時期の遺構と考えてよい。

ＳＩ１（第 28 図）

調査区の南側のＢ４グリッドとＢ５グリッドの間より検出された。礫の範囲は 1.6m × 1.0m で、構成礫は全て尾鈴山酸性岩類である。個体数として 166 個を数え、長さは 1.3cm から 23.8cm 内、幅は 0.9cm から 17.3cm 内の破砕礫を中心として構成される。総重量は 47,159g である。深さ 20cm 程度の掘り込みがあり､礫を含む。埋土は黒褐色土（Hue10YR 2/3）で、固くしまり、粘性はない。

遺構の西側端から無文土器の小片が出土している。

ＳＩ２（第 28 図）

調査区北側Ｂ２グリッドのＳＩ３の西側に隣接して検出された。礫の範囲は 1.4m × 0.8m で、密集度は低い。構成礫は全て尾鈴山酸性岩類である。個体数として 44 を数え、長さは 2.2cm から 22.4cm 内、幅は 1.7cm から 14.9cm 内の破砕礫を中心として構成される。総重量は 16,001g である。掘り込みはなく、比較的赤化した礫が多く見られる。

ＳＩ３（第 28 図）

調査区北側Ｂ２グリッドからＳＩ２の東側に隣接して検出された。礫の範囲は 1.2m × 1.1m で、密集度は低い。傾斜に沿って東側に流れてしまっているような礫もある。構成礫は全て尾鈴山酸性岩類で構成される。個体数として、52 個を数え、長さは 1.2cm から 13.9cm 内、幅は 1.2cm から 10.3cm 内の破砕礫を中心として構成される。総重量は 12,546g である。掘り込みはなく、比較的赤化した礫が多く見られる。

３　縄文時代早期の遺物

出土遺物は非常に少ない。石鏃が１点､剥片が１点、土器片が６点出土している。

石鏃（第 30 図 78）

石材に姫島産黒曜石を用いた打製石鏃である。先端部がわずかに欠損している。抉りの深いいわゆる鍬形の石鏃であるが、脚部と刃部の境界が極端にくびれる形態である。

剥片（第 30 図 79）

１点のみ出土した。縄文時代早期に多く見られる砂岩製で、横長剥片素材である。

無文土器（第 30 図 80 ～ 82）

土器片が６点出土したのみであるため、形態の復元は不可能である（第 30 図 80 ～ 82）。Ｂ３グリッドから４点とＢ４グリッドから２点出土しており、それぞれ別個体である。

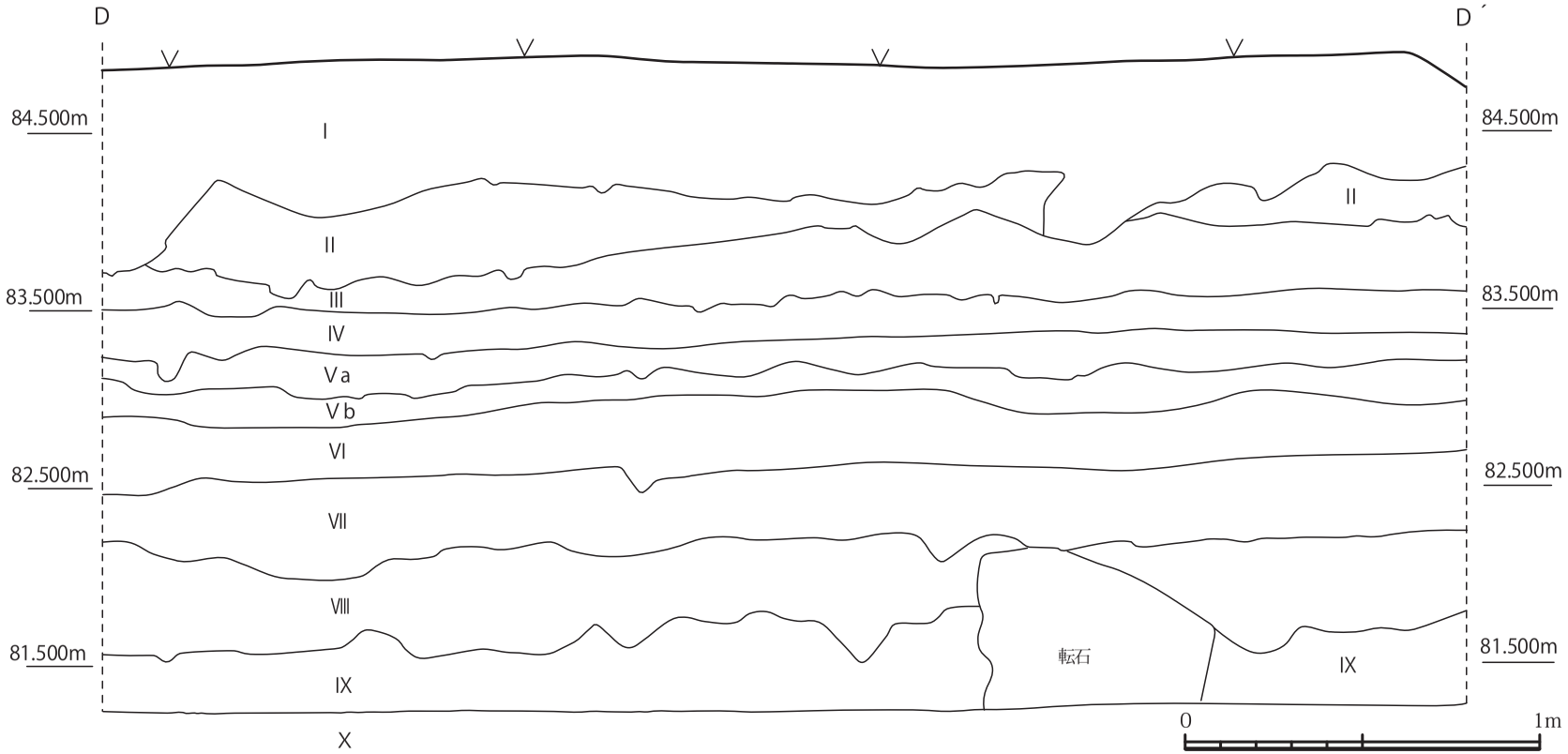
Ｂ３グリッドの第Ⅳ層から出土した土器は、外面に貝殻条痕を施した無文土器である。内面はナデを施す。器厚は 0.8cm から 1.0cm とＡ区から出土した無文土器よりもやや厚みがあるが、薄手無文土器の範疇に十分含まれる土器である。17 は確認調査によって同グリッド付近から出土した土器で、18 は確認調査時に出土した土器片と本調査で出土した土器が接合している。

Ｂ４グリッドでは、ＳＩ１のすぐ西側から無文土器片が２点出土した。第Ⅳ層から出土している。３cm 角の土器片で、磨耗も著しく、詳細は不明であるが、内外面ともに文様は見られず、調整はナデ調整と思

われる。小片であるため、器形は不明である。器厚が 1.1 ～ 1.3cm と本遺跡から出土した他の無文土器と比較すると、最も厚手である。SI 1 に伴う土器であると考えられる。

第 1 表　朝草原遺跡土器観察表（法量の括弧内は推定）

レイアウト番号	器種	器種部位	出土地点	出土層位	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
					口径	器厚	底部厚	外面	内面		外面	内面		
41	深鉢	口縁	M3-4Gr.	V層		0.4 ～ 0.5		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	明赤褐（Hue5YR5/6）	明赤褐（5YR5/6）	1 ～ 2㎜の砂岩粒、1 ～ 2㎜の白粒（長石）、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。2㎜の赤チャート粒を少量含む。	
42	深鉢	口縁	N3-3Gr.	V層		0.4		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	明赤褐（5YR5/6）	明赤褐（5YR5/6）	1 ～ 2㎜の砂岩粒、1 ～ 2㎜の白粒（長石）、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。2㎜の赤チャート粒を少量含む。	
43	深鉢	胴部	N3-3Gr.	V層		0.5 ～ 0.55		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	明赤褐（5YR5/6）	明赤褐（5YR5/6）	1 ～ 2㎜の砂岩粒、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。	
54	深鉢	口縁	M4-4Gr. ／ M4-3Gr.	IV層	（23.0）	0.6		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	1㎜以下の白粒、2㎜以下の灰白粒を多く含む	
55	深鉢	口縁	M4-3Gr.	IV層		0.5 ～ 0.6		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	灰黄褐（10YR5/2）橙（7.5YR6/6）	橙（7.5YR7/6）にぶい黄橙（10YR7/3）	1㎜以下の白粒、灰白粒を多く含む。3㎜程度の少量の砂粒。	
56	深鉢	口縁～胴部	M4-4Gr. ／ M4-3Gr.	IV層、V層	（20.0）	0.5 ～ 0.7		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	にぶい黄橙（10YR6/4）橙（7.5YR6/6）	にぶい黄橙（10YR7/4）橙（7.5YR6/6）	3 ～ 5㎜の砂岩粒、2㎜の赤チャート粒、1㎜以下の黒雲母、1㎜以下の白粒（長石）を多く含む。	
57	深鉢	胴部	M4-3Gr.	IV層、V層		0.6		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	橙（7.5YR6/6）にぶい黄橙（10YR6/4）	橙（7.5yr6/6）橙（7.5YR7/6）	1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。2㎜の赤チャート粒を少量含む。	
58	深鉢	胴部	M4-3Gr.	IV層		0.55 ～ 0.7		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	にぶい黄橙（10YR6/4）	橙（7.5YR6/6）	2 ～ 3㎜の砂岩粒、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。2㎜の赤チャート粒を少量含む。	
59	深鉢	底部付近	M4-3Gr.	IV層		0.5 ～ 0.6		無文。ナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR6/6）橙（7.5YR7/6）	2 ～ 3㎜の砂岩粒、2 ～ 3㎜の赤チャート粒、1㎜以下の白粒（長石）を多く含む。	
60	深鉢	底部（尖底）	M4-3Gr.	IV層		0.5 ～ 0.6	0.9	無文。ナデ調整。	ナデ調整。	良好	橙（7.5YR6/6）にぶい黄橙（10YR6/4）	橙（7.5YR6/6）	3㎜の砂岩粒、2 ～ 3㎜の赤チャート粒、1㎜以下の黒雲母、1㎜以下の白粒（長石）を多く含む。	
61	深鉢	胴部	M4-3Gr.	IV層		0.7 ～ 0.8		無文。ナデ調整。	ナデ調整。	良好	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	2 ～ 3㎜の白粒、1㎜以下の黒輝粒を多く含む。	スス付着
62	深鉢	胴部	M4-3Gr.	IV層		0.7 ～ 0.8		無文。ナデ調整。	ナデ調整。	良好	明黄褐（10YR6/6）にぶい黄褐（10YR5/3）	にぶい黄橙（10YR6/4）	3 ～ 5㎜の白粒、1㎜程度の白粒、1㎜以下の黒輝粒を多く含む。	スス付着
63	深鉢	胴部	M4-3Gr.	IV層、V層		0.6 ～ 0.8		無文。ナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄橙（10YR6/4）	1 ～ 2㎜の白粒、1㎜以下の黒輝粒を多く含む。	
64	深鉢	底部付近	M4-3Gr.	IV層		0.6		無文。横方向のナデ調整。	横方向のナデ調整。	良好	にぶい黄橙（10YR6/4）	にぶい黄橙（10YR7/4）	2 ～ 3㎜の砂岩粒、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。2㎜の赤チャート粒を少量含む。	
65	深鉢	胴部	O6-1Gr.	VI層		0.7 ～ 0.8		無文。横方向のナデ調整。	横方向の貝殻条痕調整。	良好	橙（5YR6/6）	にぶい橙（7.5YR6/4）にぶい黄橙（10YR7/4）	1 ～ 2㎜の砂岩粒、1 ～ 2㎜の赤チャート粒、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。	
66	深鉢	底部（尖底）	M4-3Gr.	IV層		0.6 ～ 0.7	1.2	無文。横方向のナデ調整。	ナデ調整。	良好	にぶい黄橙（10YR7/4）橙（7.5YR6/6）	にぶい黄橙（10YR7/4）	1 ～ 2㎜の白粒、1㎜以下の黒輝粒を多く含む。	
80	深鉢	胴部	C区			0.9 ～ 1.0		無文。貝殻条痕調整。	横方向のナデ調整。	良好	赤褐（5YR4/8）	にぶい赤褐（5YR4/3）灰黄褐（10YR4/2）	1 ～ 2㎜の砂岩粒、1㎜の赤チャート粒、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。	確認調査
81	深鉢	胴部	B3-1Gr.	V層		0.8 ～ 1.0		無文。貝殻条痕調整。	横方向のナデ調整。	良好	褐（7.5YR4/3）	明赤褐（5YR5/6）	1 ～ 2㎜の砂岩粒、1 ～ 2㎜の赤チャート粒、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。	
82	深鉢	胴部	B3-1Gr.	IV層		0.8 ～ 0.9		無文。貝殻条痕調整。	横方向のナデ調整。	良好	明赤褐（5YR5/8）	にぶい赤褐（5YR4/3）黒褐（7.5YR3/1）	1 ～ 2㎜の砂岩粒、1㎜以下の白粒（長石）、1㎜以下の黒雲母を多く含む。	1 点は確認調査で出土



第Ⅰ層　表土（耕作土）

第Ⅱ層　クロボク。黒色土（Hue2.5Y 2/1）
軟質土でしまりはない。粘性は弱い。

第Ⅲ層　鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）
（Hue10YR 黄褐色 5/8、Hue10YR 褐色 4/6、Hue10YR 暗褐色 3/3）
２～３㎜の白色、黄橙色の火山ガラス質を含む。硬質で粘性はない。

第Ⅳ層　黒色土（Hue10YR 2/1）
１㎜以下の細かい白粒子を含む。固くしまり、やや粘性がある。縄文時代早期の包含層。東九州自動車道基本層序の MB0 に相当する。

第Ⅴａ層　黒褐色土（Hue10YR 3/2）
固くしまり、粘性が強い。東九州自動車道基本層序 ML1 の上部に相当する。

第Ⅴｂ層　暗褐色土（Hue10YR 3/3）
固くしまり、第Ⅴａ層よりもさらに粘性が強い。東九州自動車道基本層序 ML1 の中部に相当する。

第Ⅵ層　褐色土（Hue10YR 4/4）
ややしまる。第Ⅴｂ層よりもさらに粘性の高い粘質土。東九州自動車道基本層序の ML1 の下位に相当する。

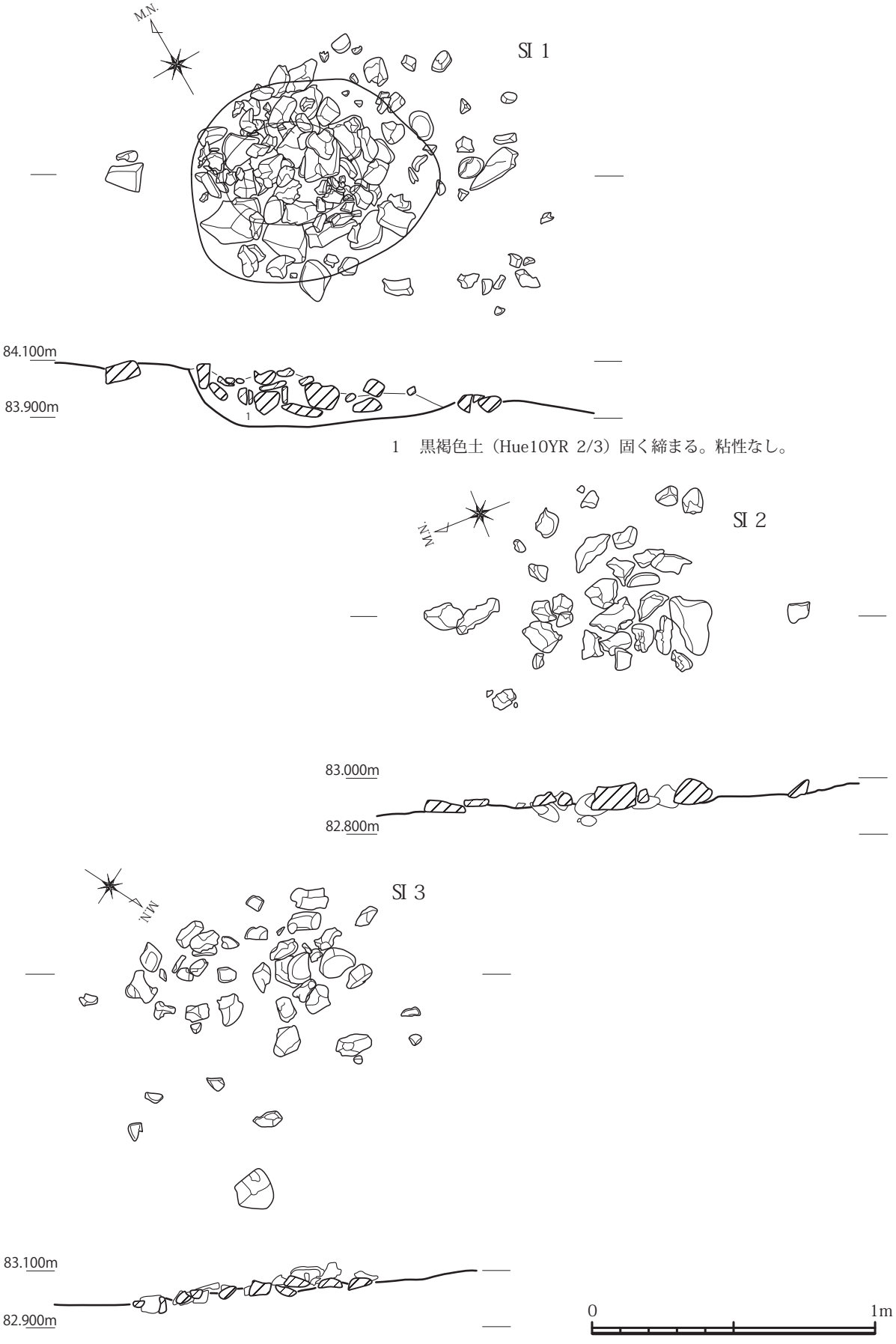
第Ⅶ層　姶良 Tn（AT）火山灰二次堆積 （Hue10YR 褐色 4/4、Hue10YR 黄褐色 5/6）
白色とオレンジの粒を多量に含む。
姶良 Tn（AT）火山灰 （Hue10YR 5/6）が混在する。

第Ⅷ層　暗褐色土（Hue10YR 3/3）
粘性が強い。固くしまり、クラックが発達している。

第Ⅸ層　明褐色土（Hue7.5YR 5/6）
固くしまる。粘性が非常に強い。小石、赤褐色の礫を含む。

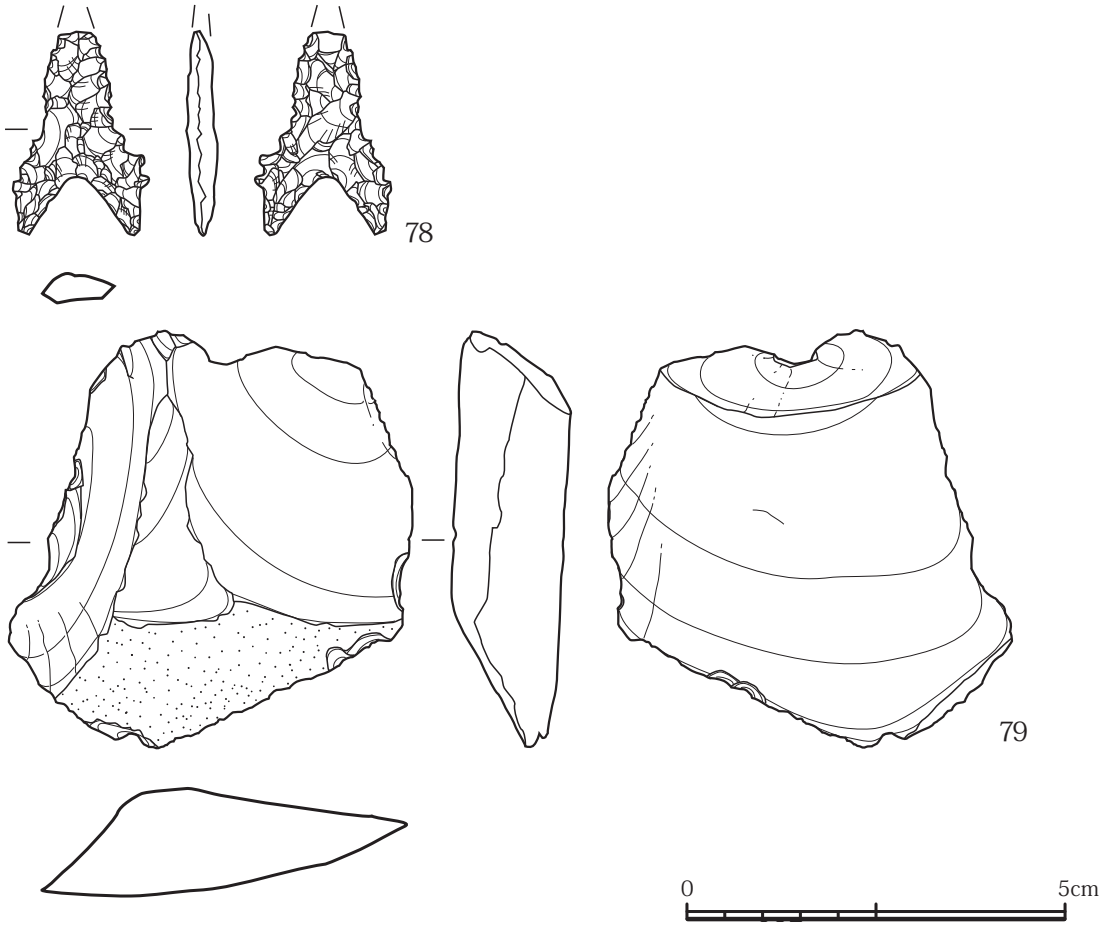
第Ⅹ層　黄褐色土（Hue10YR 5/8）
粘性は第Ⅺ層よりはない。非常に固くしまる。シルト質で巨礫を多数含む。

第 27 図　C 区土層断面図 （S ＝ 1/20）

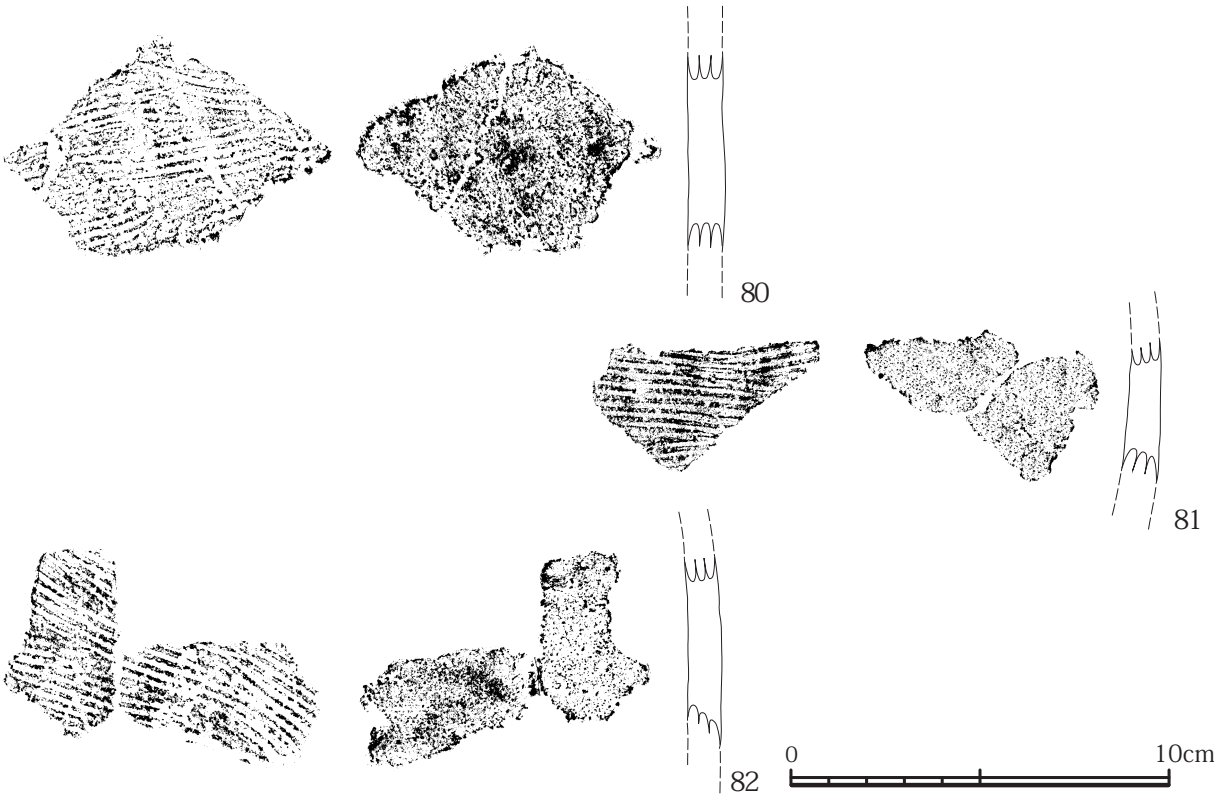


1　黒褐色土（Hue10YR 2/3）固く締まる。粘性なし。

第 28 図　C 区集石遺構実測図 （S = 1/20）



第29図　C区出土石器実測図　（S＝1/1）



第30図　C区出土土器実測図　（S＝1/2）

第６節　まとめ

朝草原遺跡は都農町に位置し、宮崎県では県北にある遺跡である。そのため出土遺物も、南九州から出土する遺物よりも、大分県や福岡県などの東九州や北部九州の遺物と、比較的類似する点が多い。現に、本遺跡からは無文土器とともに、姫島産黒曜石の石鏃はもちろん、姫島産ガラス質安山岩の剥片も出土する。これは、大分県域との活発な往来があったことを示唆していよう。そこで本節では、朝草原遺跡出土の無文土器と北・東九州の無文土器との類似性について考察する。

縄文時代早期の無文土器について

無文土器は、調査区Ａ区とＣ区に出土する。どちらも出土量は少ない。そして、Ａ区とＣ区では、出土する無文土器の形態が異なる。

Ａ区は大きく出土範囲が４箇所に特定でき、主にＭ４グリッド周辺から集中して出土している。しかし、全体的に遺物の密集度は低く、Ｍ４グリッド出土の無文土器でも復元すると２個体程度であった。

Ｃ区は２箇所から出土した。土器片数は少なく、それぞれ１個体ずつと思われる。

１　Ｎ３グリッド周辺出土の無文土器

Ｎ３グリッド周辺の無文土器は、小片で出土数も少ない。ほとんどがⅤ層から出土している。復元が不可能なためその全容は不明だが、厚さは極めて薄手の無文土器で 0.4 ～ 0.5cm 程度である。焼成は赤褐色で、内外面ともに強いナデが施され、堅緻な土器である。断面に繊維痕が見られる。胎土は、１～２㎜の比較的大粒の石英と、１㎜以下の長石を多量に含む。

器形が不明のため、詳しい編年はできないが、他のグリッドから出土した土器よりも、下層から出土している。

２　Ｍ４グリッド周辺出土の無文土器

Ｍ４グリッド周辺の無文土器はそのほとんどがⅣ層から出土している。出土した土器片は、器壁の厚さが 0.5 ～ 0.8㎝程度の薄手のナデ調整無文土器である。胎土は石英、長石、角閃石などを多量に含んでおり、粗製土器ではあるが、焼成は概ね良好である。また、外面にはマメ科と思われる種子圧痕がついている。

底部は２点出土している。器形はいわゆる広角尖底形に分類でき（綿貫 1999）[1]、厚さは 0.9mm 前後と極めて薄手である。

口縁部片は３点確認できる。いずれも直立して立ち上がり、口唇部から内面に緩やかに傾斜する形態である。口縁部から底部まで完全に接合できる資料がない為、推定ではあるが器高は 20cm 程度、直径は 25cm 前後になる。口縁部等に隆帯文などの文様は全く見受けられず、内・外面ともに丁寧なナデを施す無文土器である。

底部形態や器形の属性などから二日市洞穴第５～第４文化層[2]に相当すると思われる。口縁形態は、直口し、口唇部から内側に緩やかに傾斜する器形で、柏原遺跡Ｆ地点Ⅱ層[3]から出土した無文土器形態に類似する。

３　Ｎ６グリッド周辺出土の無文土器

Ｎ６グリッド周辺から出土した無文土器は全て１～２cm の小片である。外面にススが付着しているものが多い。胎土は１㎜以下の石英、長石、角閃石などを少量含む。小片しか出土しないため、器形は不明であるが、わずかながら口縁部が出土している。形態は直口して立ち上がり、口唇部から内側に緩やかに傾斜する器形である。土器片出土に近接してＳＣ２の土坑が第Ⅴ層より検出されている。土坑に伴う無文土器である可能性が高い。

４　Ｏ６グリッド出土の無文土器

Ｏ６グリッドから１点のみ形態の異なった無文土器が出土している。外面はナデで調整され、内面は貝殻条痕が施されている。内面に横方向の貝殻条痕が施された土器は朝草原遺跡全体を通して、この１点だけである。胴部と思われる土器片が１点出土しただけなので、器形の復元は不可能であるが、器厚は 0.7 ～ 0.8cm と、Ｍ４グリッド周辺から出土する

無文土器と差はない。

5　Ｂ３グリッド周辺出土の無文土器

Ｃ区から出土する無文土器は、Ａ区とは異なり、外面に貝殻条痕調整を施し、内面はナデ調整が行われている。貝殻条痕調整は、斜行状に施されている。Ｂ３グリッド周辺から出土した土器片は、全て同一個体と思われる。口縁部や底部は出土せず、胴部のみの出土であるため、器形は不明である。厚さは0.8～1.0㎝で、Ａ区から出土した無文土器に比べ、やや厚みをもつ。

6　Ｂ４グリッド出土の無文土器

Ｂ４グリッド出土の無文土器は、２片しかなく、大きさも３cm程度の小片である。器厚は1.1～1.3cmで、色調は浅黄橙色（Hue 10YR 8/4）と色調も淡く、断面は浅黄橙色（Hue 7.5YR 8/6）と若干赤みを帯びる。表面の磨耗が著しく、無文土器としての正確な評価はできない。

SI 1の集石遺構に近接して出土しており、SI 1に伴う土器と考えられる。

以上が、朝草原遺跡から出土した主な無文土器の概要である。Ａ区Ｍ４グリッドの第Ⅳ層から出土した無文土器とＣ区Ｂ３グリッドの第Ⅳ層から出土した無文土器は、層位からほぼ同時期と捉えていいだろう。

全体的に器厚が薄手なのも、土器の径が小形なことに比例するかもしれないが、内外面ともに丁寧にナデ調整を行っているものが多く、意図的に薄手土器を製作している。

特に、第Ⅴ層から出土しているＮ３グリッド周辺の土器は、器壁厚が0.4cmと極めて薄手の無文土器である。Ｍ４グリッドやＢ３グリッド出土の土器よりも下層から出土し、時期差があるように思う。第Ⅴ層からは、細石刃核などの旧石器時代終末期～縄文時代草創期の遺物が確認されている。よって、極めて薄手で、胎土が堅緻な無文土器は縄文時代草創期に比定されると思われる。

【参考文献】
1　綿貫俊一　1999　「九州の縄紋時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集　九州古文化研究会
2　橘昌信　1980　『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』　別府大学付属博物館
3　山崎純男/編　1983　「柏原遺跡群Ⅰ－縄文時代遺跡Ｆ遺跡の調査－」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第90集　福岡市教育委員会

第2表　朝草原遺跡石器観察表

ﾚｲｱｳﾄ No.	出土 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	B区 T１	確認調査		茶色流紋岩	ナイフ形石器	4.4	1.5	1.1	5.2	国府型。確認調査でＴ１の中心より出土。
2	C区	確認調査		黒色チャート	石鏃	3.1	1.5	0.6	1.1	鍬形。
3	C区	確認調査		尾鈴酸性岩類	敲石	6.6	5.7	4.8	213.8	背面に敲打痕。
4	A区	表採		青色チャート	二次加工剥片	4	3	1.3	11.8	石鏃未製品か。
5	A区	表採		茶色流紋岩	ナイフ形石器	2.5	1.3	1.1	2.2	先端部のみ残存。
6	A区	表採		緑色泥岩	石鏃	2.9	1.4	0.5	1.7	未製品。片側欠損。刃部を作り出す擦痕あり。
7	A区	表採		青色チャート	石核	2.8	3.2	1.6	18.3	
8	M2	Ⅵ	A－57	黒色頁岩	角錐状石器	4.5	1.8	1.3	7.4	横長剥片素材。正面は平坦をなす。
9	M3	Ⅴ	A－70	灰色流紋岩	角錐状石器	3.6	1.4	1.5	5.1	横長剥片素材。表面に黒色の斑点がみえる石材。
10	M2	Ⅴ	A－49	黒色流紋岩	角錐状石器	2.2	1.5	1.7	3.1	先端部のみ残存。遺物No.A-39と同一母岩か。
11	M3	Ⅴ	A－39	黒色流紋岩	角錐状石器	5.2	2.9	2.2	22.3	下半分欠損。左側縁未加工。遺物No.A-49と同一母岩か。
12	M3	Ⅴ	A－35	茶色流紋岩	ナイフ形石器	3.9	1.6	1.4	4.8	国府型。
13	L2	Ⅵ	A－115	ホルンフェルス（流紋岩系）	ナイフ形石器	7.1	3	1.8	24.2	
14	M4	Ⅵ	A－25	白色流紋岩	細石刃核	3.5	2.5	2	22.2	船野型。背面は礫面。
15	M4	Ⅴ	A－21, A－31	白色流紋岩	細石刃核	3.8	3	2.5	33	船野型。ﾚｲｱｳﾄNo.16,17の接合資料。
16	M4	Ⅴ	A－21	白色流紋岩	細石刃核	3.8	2.9	2.5	25	船野型。背面は礫面。
17	M4	Ⅴ	A－31	白色流紋岩	剥片	3.8	2.5	1.4	8	作業面調整剥片。
18	M4	Ⅵ	A－27	白色流紋岩	細石刃核	3.8	2.8	2.3	24	船野型。背面は作業面調整剥離。
19	M4	Ⅴ	A－28	白色流紋岩	細石刃核	3.5	2	2.1	12.4	船野型。
20	N4	Ⅴ	A－13	ホルンフェルス（白色）	細石刃核	5.1	3	2.8	34.4	船野型。
21	M4	Ⅵ	A－26	ホルンフェルス（灰色）	細石刃核	5.5	3.4	3.4	63.8	船野型。片面のみ。
22	M4	Ⅵ	A－23	白色流紋岩	細石刃	1.6	0.8	0.1	0.2	打面調整なし。
23	M3	Ⅴ	A－38	黒色流紋岩	細石刃	1.1	0.4	0.1	＜0.1	右側面に使用による欠けが見られる。
24	M3	Ⅴ	A－44	黒色流紋岩	細石刃	0.7	0.6	0.1	＜0.1	
25	M3	Ⅴ	A－45	白色流紋岩	細石刃	0.9	0.4	0.1	＜0.1	
26	N3	Ⅴ	A－71	黒色流紋岩	細石刃	0.8	0.6	0.1	＜0.1	
27	M4	Ⅵ	A－33	白色流紋岩	剥片	3.3	1.8	0.9	3	作業面調整剥片。
28	N5	Ⅵ	A－101	ホルンフェルス（黄色）	二次加工剥片	8.9	2.3	1.6	23.6	縦長剥片。右側縁の下半部にわずかな加工あり。
29	L4	Ⅵ	A－110	白色流紋岩	剥片	4.7	1.6	1.2	5.4	縦長剥片。
30	M3	Ⅵ	A－36	茶色流紋岩	剥片	6.5	2.3	1.7	19.3	縦長剥片。
31	M4	Ⅵ	A－24	白色流紋岩	剥片	3.9	1.6	1.4	5.4	ナイフ形石器未製品か。
32	M3	Ⅵ	A－47	茶色流紋岩	剥片	4.3	3.3	1.7	16.1	縦長に近い剥片。
33	M6	Ⅴ	A－106	ホルンフェルス	剥片	4.6	4	1.6	19	末広がりの幅広剥片。
34	O5	Ⅴ	A－94	白色流紋岩	剥片	4.7	3.7	1.7	10.8	縦長剥片。端部欠。
35	L4	Ⅵ	A－109	珪質頁岩	石核	3.5	3	2.5	23.4	頭部打面は礫面。
36	M3	Ⅵ	A－69	尾鈴山酸性岩類	剥片	8.9	4.6	2.5	71.7	大形の縦長剥片。
37	N4	Ⅴ	A－16	黒色流紋岩	剥片	3.3	2	0.8	2	調整剥片。
37	M4	Ⅵ	A－18	黒色流紋岩	石核	12.8	6.8	4.5	353	背面は礫面。
37	M4	Ⅴ	A－32	黒色流紋岩	剥片	2.2	1.6	1.5	3	調整剥片。
38	M4	Ⅵ	A－20	尾鈴山酸性岩類	敲石	9.1	6.9	5	410.9	縁辺に敲打痕。背面中央に敲打時のワレ。
39	M4	Ⅵ	A－29	砂岩	敲石	7.1	6.3	5	279.6	縁辺に敲打痕。背面右下に敲打時のワレ。
40	M2	Ⅴ	A－53	尾鈴山酸性岩類	敲石	9	8	6.6	588.4	縁辺に敲打痕。
44	M4	Ⅴ	A－17	ガラス質溶結凝灰岩	打製石鏃	2.9	1.9		2	阿蘇象が鼻産。
45	N3	Ⅴ	A－75	黒色チャート	打製石鏃	3.4	1.5	0.8	1.7	左側脚部欠損。
46	N3	Ⅴ	A－80	灰色チャート	打製石鏃	2.8	1.5	0.7	1.5	左側脚部欠損。先端は白みを帯びる。基部は黒灰色。
47	N6	Ⅳ	A－103	灰色チャート	打製石鏃	2.7	2	0.8	1.5	先端部は欠損。使用による欠けか。
48	L5	Ⅴ	A－108	青色チャート	打製石鏃	1.5	1.1	0.1	0.3	先端部のみ残存。
49	N3	Ⅴ	A－79	黒色チャート	剥片	3.2	1.5	1	3	打製石鏃の未製品か。左半分のみが残る。成形途中で廃棄の可能性。
50	O4	Ⅴ	A－10	青色チャート	剥片	1.8	1	0.9	0.8	横長剥片。

ﾚｲｱｳﾄ No.	出土 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
51	M2	V	A－61	ホルンフェルス（灰色）	剥片	2.5	2	0.9	2.4	横長剥片。
52	N3	V	A－84	砂岩	剥片	9.5	6	2.2	63.5	大形の縦長剥片。下端部に礫面を残す。
53	N3	V	A－83	砂岩	剥片	7.9	5.5	2.1	46.6	大形の幅広剥片。頭部打面は礫面。
67	B区	表採		黒曜石	石鏃	2.9	2	0.5	1.3	大分県姫島産。製品。鍬形。
68	D7	Ⅷ	B-7	白色流紋岩（赤茶色の縞模様）	角錐状石器	5	4.5	3.3	58	遺物 No.B-8 と接合。先端部。未製品。
68	D7	Ⅷ	B-8	白色流紋岩（赤茶色の縞模様）	角錐状石器	5.7	4.9	3.4	64	遺物 No.B-7 と接合。基部。未製品。
69	D3	X	B-18	黒曜石	細石刃核	2	1.5	1.4	2.7	野岳・休場型。熊本県桑ノ木津留産。左側面は礫面。
70	D6	Ⅵ	B-2	黒色流紋岩	細石刃核	3.2	2.3	2.6	15	船野型。底部にわずかに礫面残る。
71	D4	X	B-12	灰色チャート	打製石鏃	2.7	1.5	0.6	1.1	製品。先端部わずかに欠。緻密な製作。
72	D3	X	B-17	黒色流紋岩	剥片	7.5	3.5	1.5	20.5	先細りの縦長剥片。
73	D6	Ⅷ	B-6	黒色流紋岩	剥片	4.5	3.4	1.2	7.6	左側縁に礫面を残す。
74	D7	Ⅷ	B-23	黒色流紋岩	剥片	3.3	1.5	1.4	3.5	右半分が欠損。
75	D3	X	B-20	灰色流紋岩	剥片	2	3.2	1.1	3.1	不定形剥片。
76	D5	X	B-16	黒色流紋岩	剥片	6.3	3.7	1.9	29	縦長剥片。右側縁にわずかな加工あり。
77	D7	Ⅵ	B-10	白色流紋岩	石核	5.5	5.2	2.6	51	頭部打面と背面に礫面を残す。
78	B4	Ⅳ	C-5	黒曜石	打製石鏃	2.8	1.8	0.9	1.2	大分県姫島産。製品。使用による先端の欠けが見られる。両側縁共に顕著な屈曲を施す。
79	B3	Ⅳ	C-6	砂岩	剥片	5	5.8	1.9	41.4	幅広剥片。
	O4	V	A－1	青色チャート	剥片	1.7	1	0.1	0.2	調整剥片。
	O4	V	A－2	青色チャート	剥片	2.5	1.7	0.8	1.1	調整剥片。A区表採資料と接合。
	O4	V	A－3	青色チャート	剥片	1	1	0.1	＜0.1	調整剥片。
	O4	V	A－4	黒曜石	剥片	1.7	1.6	0.9	1.1	鹿児島県日東産
	O4	V	A－5	ホルンフェルス（灰色）	剥片	7.7	4.5	2.5	50.2	
	O4	V	A－6	青色チャート	剥片	0.7	0.3	0.1	＜0.1	小剥片。
	O4	V	A－7	青色チャート	剥片	0.8	0.7	0.2	＜0.1	調整剥片。
	O4	V	A－8	青色チャート	剥片	1.1	0.7	0.1	0.1	調整剥片。
	O4	V	A－9	青色チャート	剥片	1.3	0.8	0.2	0.2	調整剥片。
	O4	V	A－11	青色チャート	剥片	0.7	0.5	0.1	＜0.1	小剥片。
	N4	V	A－12	黒色チャート	剥片	3	2.8	1.5	4.2	背面は礫面。
	N4	V	A－14	白色流紋岩	剥片	1.4	0.8	0.3	0.4	
	N4	V	A－15	砂岩	剥片	3.8	2.9	2	14.8	
	M4	Ⅵ	A－19	黒色流紋岩	剥片	2.3	1.1	1.1	1.6	小剥片。
	M4	V	A－22	白色流紋岩	剥片	2.5	2.1	0.9	2.9	
	M5	Ⅳ	A－30	白色流紋岩	剥片	2.2	1.2	1.4	2.1	
	M4	Ⅵ	A－34	茶色流紋岩	石核	4.7	4.3	2.6	29.2	背面は礫面。
	M3	Ⅵ	A－37	白色流紋岩	剥片	2.3	3.4	1.6	7.7	横長剥片。
	M3	V	A－40	灰色頁岩	細石刃か	0.9	0.5	0.2	＜0.1	調整剥離。
	M3	Ⅵ	A－41	ホルンフェルス（黄色）	剥片	2.8	2	1.1	3.2	
	M3	Ⅵ	A－42	白色流紋岩	剥片	0.9	0.8	0.3	0.2	小剥片。
	M3	V	A－43	黒曜石	細石刃か	0.9	0.6	0.1	＜0.1	透明度高い。
	M3	Ⅵ	A－46	白色流紋岩	剥片	2.5	1.7	0.4	1.5	被熱していない。
	M2	V	A－48	青色チャート	剥片	1.8	1.2	1	1.1	
	M2	Ⅵ	A－50	黒色流紋岩	剥片	1.5	1.2	1	0.8	小剥片。
	M2	V	A－51	黒色流紋岩	剥片	2.5	1.4	0.9	1.5	横長剥片。
	M2	Ⅵ	A－52	黒色流紋岩	剥片	2.4	1.6	1.2	2.2	横長剥片。
	M2	V	A－54	黒曜石	細石刃か	1.3	0.6	0.2	0.2	漆黒の黒。不純物なし。透過しない。
	M2	V	A－55	黒曜石	剥片	0.6	0.4	0.2	＜0.1	小剥片。透明度高い。
	M2	V	A－56	黒曜石	剥片	0.7	0.5	0.2	＜0.1	小剥片。不純物なし。透過しない。
	M2	Ⅵ	A－58	黒曜石	剥片	1.4	1.4	0.3	0.5	鹿児島県日東産。
	M2	V	A－59	黒色流紋岩	剥片	1.3	0.6	0.1	0.2	調整剥離。
	M2	Ⅵ	A－60	黒色流紋岩	剥片	2.9	2.1	1.2	4.8	
	M2	Ⅵ	A－62	黒曜石	剥片	11	1.9	1.3	1.2	鹿児島県日東産。
	M2	Ⅵ	A－63	黒色流紋岩	剥片	1.3	0.8	0.2	0.2	

ﾚｲｱｳﾄ No.	出土 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
	M2	V	A－64	黒曜石	剥片	0.7	0.5	0.1	＜0.1	小剥片。透明度高い。
	M2	VI	A－65	黒曜石	剥片	1.7	1.5	1	1.2	鹿児島県日東産。
	M2	V	A－66	黒色流紋岩	剥片	2.4	1.7	1	2.1	背面は礫面。
	M2	V	A－67	茶色流紋岩	細石刃か	1.7	0.7	0.1	0.2	縦長剥片。
	M3	VI	A－68	尾鈴山酸性岩類	台石	25.6	15.2	6.5	4000	底面は安定しない。
	N3	V	A－72	砂岩	剥片	3.8	2.3	1.2	7.1	
	N3	V	A－73		土器					ナデ調整
	N3	V	A－74	砂岩	剥片	6.7	3.3	2	24.4	縦長剥片。上部打面は礫面。
	N3	V	A－76	青色チャート	剥片	0.7	0.7	0.2	＜0.1	小剥片。
	N3	V	A－77	黒色チャート	剥片	0.9	0.6	0.1	0.1	小剥片。
	N3	V	A－78	ガラス質安山岩	剥片	1.7	0.6	0.1	0.2	大分県姫島産。縦長剥片。
	N3	V	A－81	黒色チャート	剥片	0.9	0.9	0.1	0.1	小剥片。
	N3	V	A－82	ガラス質安山岩	剥片	0.8	0.3	0.1	＜0.1	調整剥離。大分県姫島産。
	N3	V	A－85	ガラス質安山岩	剥片	2.9	1.7	1	2.2	大分県姫島産。
	N3	V	A－86	ガラス質安山岩	剥片	1.8	1.7	1	1.1	大分県姫島産。
	N3	V	A－87	ガラス質安山岩	剥片	1.5	2	0.8	0.9	大分県姫島産。
	N3	V	A－88	ガラス質安山岩	剥片	1.3	1.1	0.3	0.3	大分県姫島産。
	N3	V	A－89	ガラス質安山岩	剥片	2	2.2	1	1.9	大分県姫島産。
	N3	V	A－90	白色チャート	打製石鏃か	1.7	0.7	0.2	0.4	片側半分欠失。
	N3	V	A－91	ホルンフェルス（灰色）	剥片	5.5	4.2	1.9	28.8	
	N3	V	A－92	黒色流紋岩	剥片	2	3.9	0.9	2.7	
	O5	V	A－93	茶色流紋岩	剥片	3.9	2.8	1.2	6.7	縦長剥片。
	N5	V	A－95	尾鈴山酸性岩類	剥片	10.2	6	2.2	95	縦長剥片。上部打面は礫面。
	N5	V	A－96	尾鈴山酸性岩類	石核	10.2	9.2	5.2	494	背面は礫面。遺物 No.A-98 と接合。
	N5	V	A－97	尾鈴山酸性岩類	剥片	7.5	5.6	2.5	91.7	縦長剥片。背面は礫面。
	N5	V	A－98	尾鈴山酸性岩類	剥片	6.3	5.2	1.7	57.7	背面は礫面。遺物 No.A-96 と接合。
	N5	V	A－99	尾鈴山酸性岩類	剥片	4.8	4.5	2.3	33.6	礫面。
	N5	V	A－100	砂岩	剥片	5.1	4.4	2.1	25.8	上部打面は礫面。
	N6	V	A－102	白色流紋岩	剥片	2.7	2	1.3	3.6	遺物 No.A-105 と接合。
	N6	V	A－104	黒曜石	剥片	0.8	0.8	0.2	0.1	不純物なし。
	N6	V	A－105	白色流紋岩	剥片	3.7	3.3	1.5	10.4	上部打面は礫面。遺物 No.A-102 と接合。
	M6	VI	A－107	砂岩	剥片	3.1	1.9	1.1	3.6	上半分欠損の縦長剥片。
	L4	VI	A－111	黒色流紋岩	剥片	2.1	3.6	1.1	4.3	
	L3	VI	A－112	白色流紋岩	剥片	3.9	2.5	1.5	8.8	背面は礫面。
	L3	VI	A－113	白色流紋岩	剥片	3.7	3.2	0.9	6.5	被熱していない。
	L2	VI	A－114	ホルンフェルス（灰色）	剥片	5.1	5.1	2.4	50	
	L2	VI	A－116	緑色チャート	剥片	1.6	1.2	0.2	0.5	
	N2	V	A－117	青色チャート	剥片	3	1.9	1.5	6.5	背面は礫面。
	N3	V	A－118	青色チャート	剥片	2.5	1.6	1.5	4.9	
	D6	VI	B-1	灰色流紋岩	剥片	3.9	6	2.4	33.9	背面は礫面。
	D6	VI	B-3	砂岩	剥片	2.7	2.3	1.3	4.5	上部打面は礫面。
	D6	VI	B-4	ホルンフェルス（砂岩系）	剥片	2.5	3.2	1.2	5.6	
	D6	VIII	B-5	ホルンフェルス（灰色）	剥片	2.5	2	1.2	3.2	
	D7	IV	B-9	黒色流紋岩	剥片	3.5	3.3	1.5	11.3	
	D7	IX	B-11	白色流紋岩	剥片	2.2	3.3	1.2	5.7	正面は礫面。
	D4	X	B-13	尾鈴山酸性岩類	剥片	4.8	5.6	1.7	30.2	幅広剥片。
	D4	X	B-14	砂岩	剥片	3	3.1	1.1	6	
	D4	X	B-15	ホルンフェルス（流紋岩系）	剥片	3.3	4.8	1.4	17.7	側面は礫面。
	D3	X	B-19	ホルンフェルス（流紋岩系）	剥片	4.9	3.2	1.4	14.6	縦長剥片。
	D3	X	B-21	ホルンフェルス（灰色）	剥片	7.6	5.4	2	71	背面は礫面。底面からの加工が見られる。表面に橙色の斑点が見える石材。
	D7	VIII	B-22	黒色流紋岩	剥片	0.8	0.8	0.1	＜0.1	小剥片。側面に微細な調整が見える。
	D7	VIII	B-24	黒色流紋岩	剥片	2.4	3.3	1.3	7.2	
	B3	IV	C-1		土器					貝殻条痕調整
	B3	V	C-2		土器					貝殻条痕調整
	B3	IV	C-3		土器					貝殻条痕調整
	B3	V	C-4		土器					貝殻条痕調整
	B4	V	C-7		土器					ナデ調整
	B4	V	C-8		土器					ナデ調整

第Ⅲ章　尾立第３遺跡の調査

第１節　調査の経過と方法

１　確認調査の概要

尾立第３遺跡の本調査に先立ち、調査対象総面積3,000㎡を平成17年６月１日から７月27日まで確認調査を行った（第31図）。

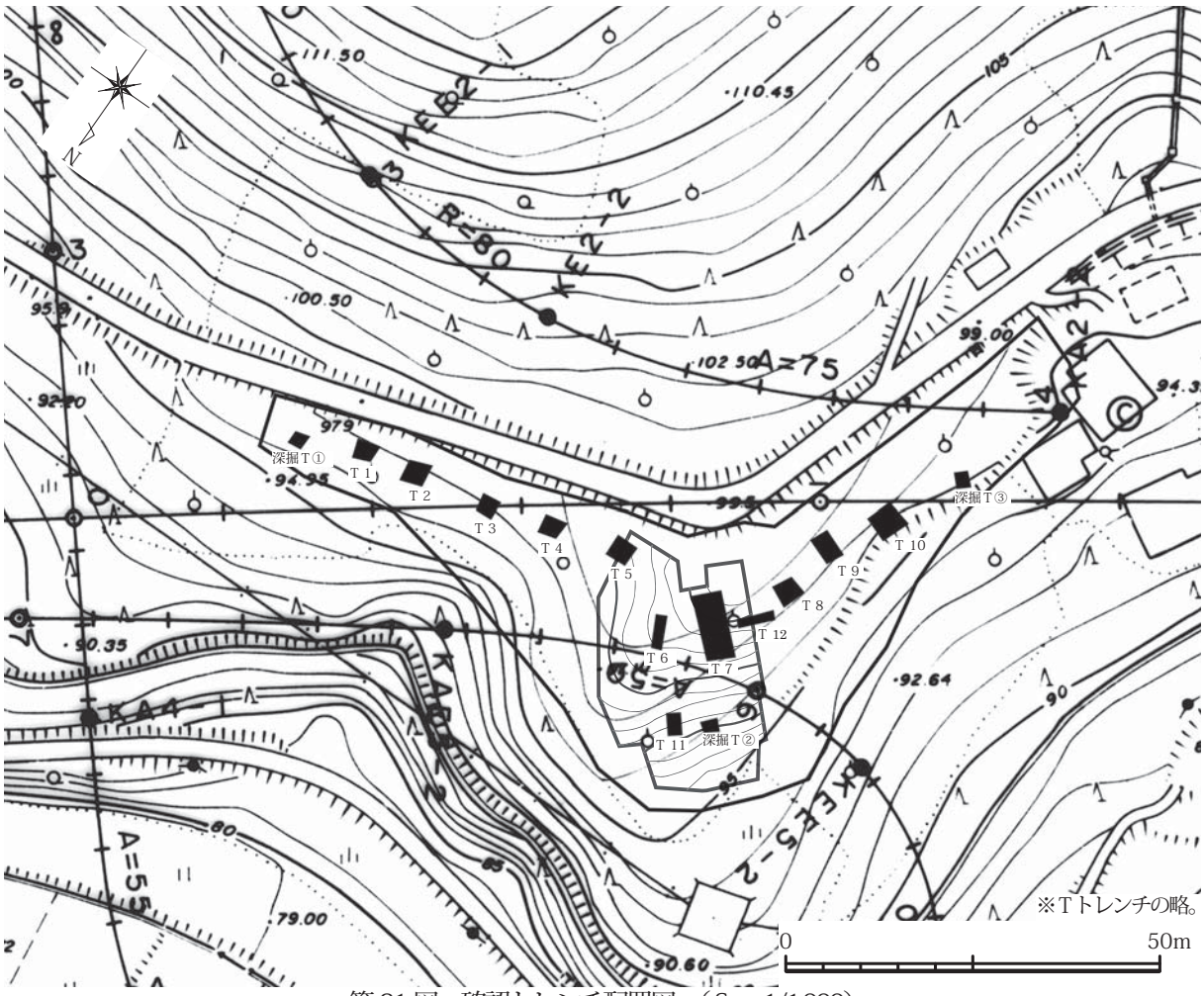
3,000㎡に対して15箇所のトレンチ（160㎡）を設定し調査を行った。本遺跡は、舌状に広がる斜面地で、山の中腹に立地する。遺跡の中央が最も標高が高く、東西に緩やかに傾斜する。

重機で草木の除去を行った時点で、遺跡の西側半分からは巨礫が出現し始めていた。人力で掘削を始めたが、やはり調査対象区西側からはアカホヤ火山灰層や遺物包含層などは見受けられず60cmほどで礫層を確認した。

調査対象区東側は比較的、土層の残存状況も良好で厚い堆積が見られたため、遺構・遺物の発見に期待が持たれたが、結局確認されなかった。確認トレンチ掘削の結果、東から５つ目のトレンチ（Ｔ４）は、他のトレンチよりもアカホヤ火山灰層面の検出レベルが低く、谷に向かって急激に落ち込んでいた。よって、以前は４トレンチあたりを境に、調査対象区東側と西側は別の尾根であったと判断される。

遺物が出土したのは、調査対象区中央に位置する舌状に広がる高まりである。後世による削平のために、アカホヤ火山灰層も残存していなく、表土を除去するとすぐにAT直上の褐色土層となった。この褐色土層より、旧石器時代の剥片と思われる遺物が多数出土した。しかし、遺構は検出されなかった。

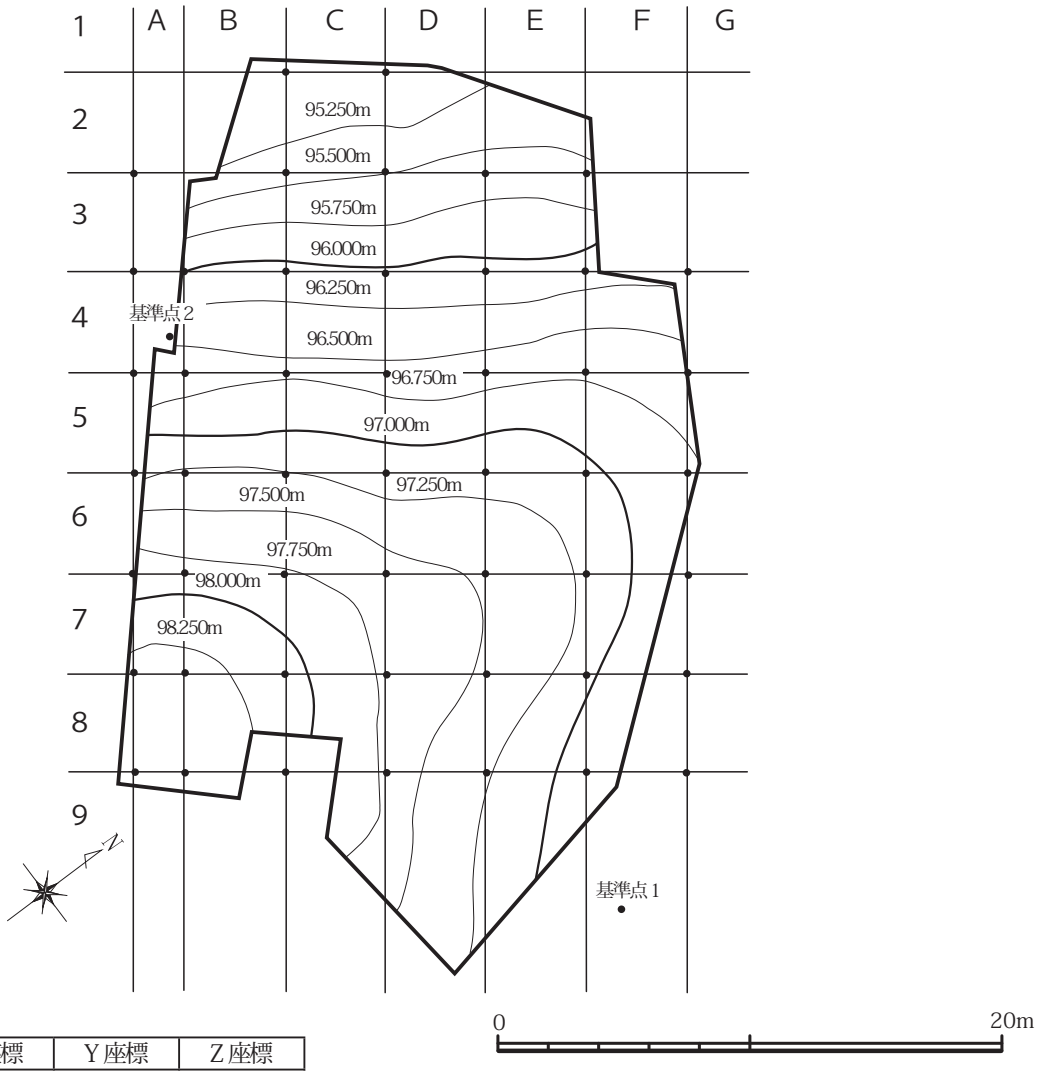
以上の結果をもとに、調査区の東西を本調査対象区から除外し、調査区中央の高まり1,000㎡の面積の本調査を行った。



第31図　確認トレンチ配置図　（Ｓ＝1/1,000）

調査日誌抄（平成 17 年）

9.15（木）　重機による表土剥ぎ。
9.16（金）　器材コンテナ等の設営。
9.20（火）　調査区に十字のベルトを設定し、４m × 4m の任意グリッドを設定。
9.21（水）　礫群５基検出。そのほか、礫群の可能性のあるもの３基検出。剥片多数出土。
9.22（木）　調査区北側に散礫を検出。
9.26（月）　基準点測量。
9.27（火）　礫群の写真撮影、実測。
9.28（水）　調査区東側の掘削終了。西側の掘削開始。調査区全面に剥片出土。
10.6（木）　集石遺構検出。確認調査で検出されなかった遺構が、多数検出されたため、調査期間の延長決定。
10.14（金）　調査指導委員による調査指導。
トータルステーションによる遺物取り上げ。
10.18（火）　散礫の写真撮影。
10.19（水）　AT 面までの掘削終了。
10.20（木）　調査区に散礫状に広がる礫を、グリッドごとに取り上げ。
集石遺構・礫群の写真撮影、実測。
10.21（金）　土層断面作成。
10.24（月）　土層断面作成。記録の終わったベルトから順に掘削。
10.25（火）　遺物取り上げ。
作業員調査終了。順次、朝草原遺跡へ…。
10.26（水）　現地調査終了。撤収。



測点	X 座標	Y 座標	Z 座標
基準点 1	－83223.570	49666.492	99.422
基準点 2	－83216.201	49640.074	96.938

第 32 図　尾立第３遺跡グリッド配置図 （S = 1/300）

2　発掘調査の方法

尾立第３遺跡は、大師山の西側中腹に立地する遺跡である。確認調査の結果、遺跡中央の舌状に広がる 1,000㎡の調査が必要となった。

本調査対象面積が小規模で、また確認調査時に遺構が検出されなかったため、２点の基準点のみの測量で、国土座標を基準としたグリッド杭の設置を行わない調査方法をとった。

調査区を１つの大きなトレンチと見立て、中央に十字に１m幅のベルトを残して掘削していったところ、予想に反して礫群の検出が見られた。そこで急遽、測量委託で得た２点の基準点から４m×４mのグリッドを任意に設置し、調査を行った。

グリッドは任意のため、方位は座標北（G.N.）を基準としていない。また、グリッドも小分けに設定したので、25%調査は行わず、最初から 100%調査で掘り進めた。

遺物はトータルステーションによって取り上げ、遺構は１／10、土層断面は１／20 で図化した。

3　整理作業及び報告書作成

整理作業は平成 17 年 12 月から開始し、平成 18 年 10 月に終了している。遺物の整理については本センターにて、礫の整理については川南整理作業棟にて行った。礫は計測と接合を行った。

整理作業に時間的余裕を見つけられたので、朝草原遺跡と尾立第３遺跡から出土した石器類の遺跡間接合を試みた。期待した結果を得ることはできなかったが、朝草原遺跡から表採した剥片と尾立第３遺跡の遺物包含層から出土した剥片が接合するというものが３個体得られた。これについては、第Ⅳ章で若干述べる。

報告書作成にあたっては、本年度より本センターで取り組むデジタル入稿の方式をとった。使用 OS は Windows2000professional である。遺物・遺構平面図等のトレースについては株式会社アイシン精機の『遺構くん』と、Adobe 社の Illustrator を使用し、eps 形式で保存、レイアウトを行うという形をとっている。拓本等の画像の編集には Adobe 社の Photoshop を用いた。編集・レイアウトについては Adobe 社の InDesign を用いた。入稿に際しては InDesign 形式での入稿を行っている。

写真については従来どおりフィルムで撮影を行い、版下による入稿を行った。

第２節　層序

尾立第３遺跡は、山の中腹から裾に向かって緩やかに傾斜する斜面地に立地している。そのため、土層の堆積も非常に薄く、安定していない。指標となる AT 層はプライマリィな層ではなく、上層の褐色土層が混在するような状況であった。また、表土を除去するとすぐに褐色土層となる。これは、調査区のすぐ隣に道が作られており、この道を作るために大幅な削平をしたためと思われる。

遺構・遺物包含層は第Ⅱ層の褐色土層である。

①第Ⅰ層　表土（耕作土）

②第Ⅱ層　褐色土（Hue10YR 4/4）
　やや粘性がある。しまらない。

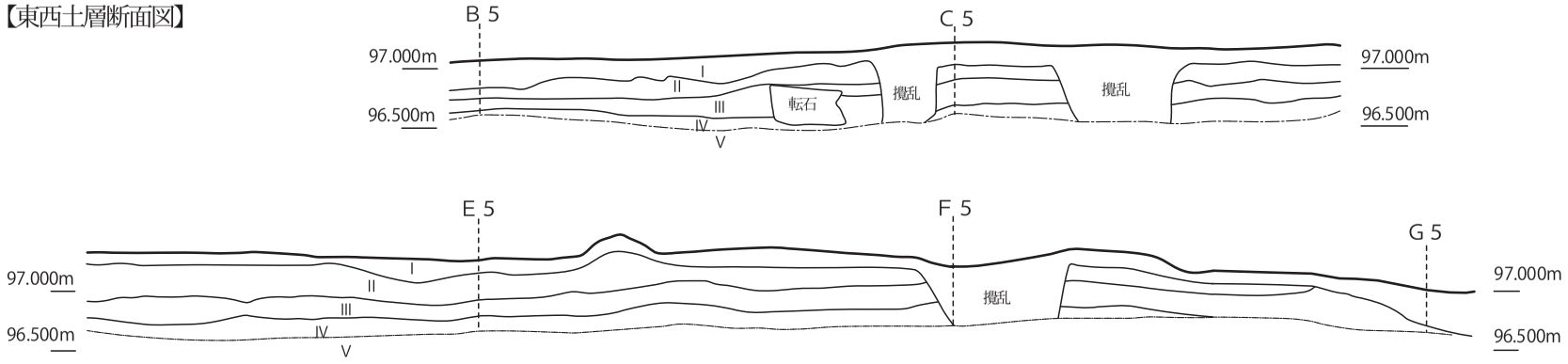
③第Ⅲ層　姶良 Tn（AT）火山灰（Hue10YR 黄褐色 5/6）
　第Ⅱ層と混在する。

④第Ⅳ層　暗褐色土（Hue10YR 3/3）
　粘性が強い。固くしまり、所々クラックが発達している箇所がある。

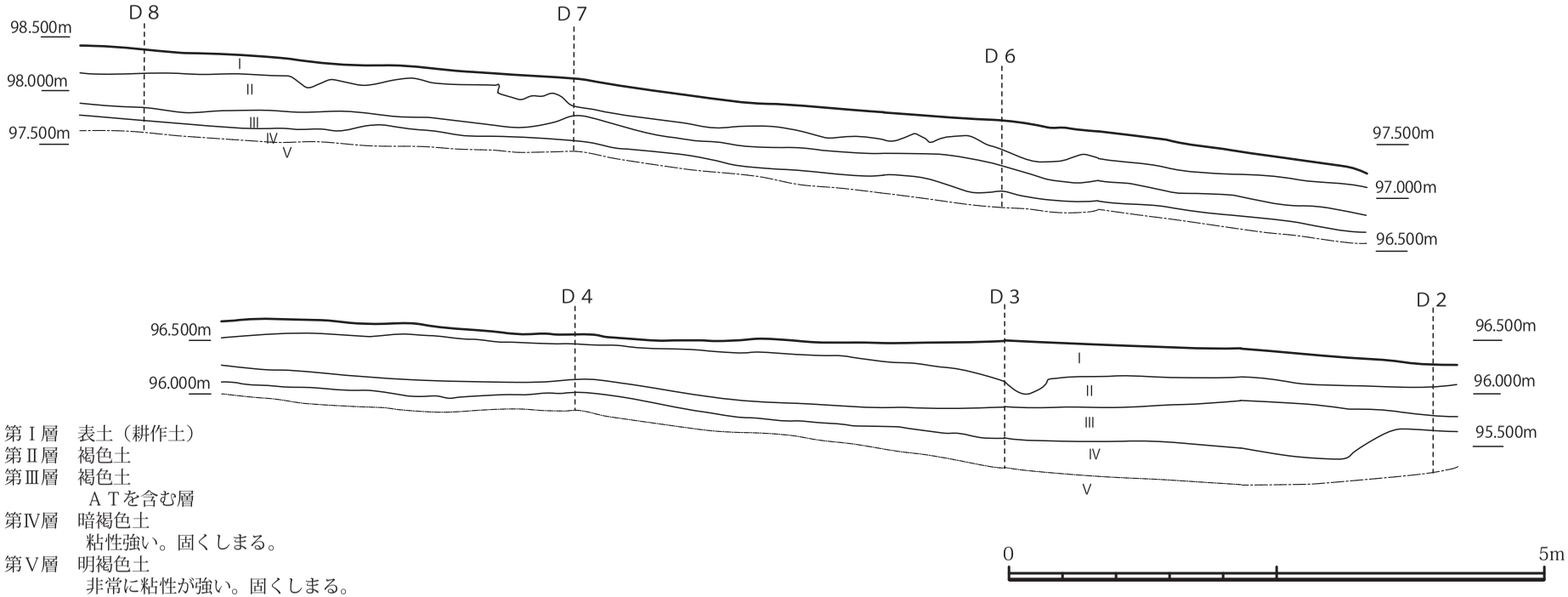
⑤第Ⅴ層　明褐色土（Hue7.5YR 5/6）
　粘性が非常に強い。固くしまる。小石、赤褐色の礫を含む。

	層序	土色	略称
①	Ⅰ	表土・耕作土	
②	Ⅱ	褐色土	ML1
③	Ⅲ	黄褐色土	AT
④	Ⅳ	暗褐色土	MB2,MB3
⑤	Ⅴ	明褐色土	

【東西土層断面図】



【南北土層断面図】



第Ⅰ層　表土（耕作土）
第Ⅱ層　褐色土
第Ⅲ層　褐色土
　ＡＴを含む層
第Ⅳ層　暗褐色土
　粘性強い。固くしまる。
第Ⅴ層　明褐色土
　非常に粘性が強い。固くしまる。
　小石、赤褐色の礫を含む。

第 33 図　土層断面図　（S＝1/60）

第３節　尾立第３遺跡の調査記録

１　概要

尾立第３遺跡は山の中腹の斜面地に立地し、土層の堆積は非常に薄い。加えて、整備された山道が遺跡のすぐ横を通っている。この山道を造成したときに大幅に削平されたのか、表土を除去するとAT直上の褐色土層から始まる。確認調査で除外となった調査区からは、アカホヤ火山灰層の良好な堆積も認められ、本来は本調査区内にも土層は堆積していたと思われる。（この大量に削平された土がどこへ運ばれたであろうかは第Ⅳ章で推察する。）

指標となるAT層もプライマリィな堆積はなく、上層と混在する層であった。土層断面図は、東西をＢ５グリッドからＧ５グリッドの南壁、南北はＤ８グリッドからＤ２グリッドの西壁を記録した。東側斜面に向かうに連れ、礫層検出のレベルが高くなる。本調査区は、カルスト台地のような地形になっており、礫層検出面に差が見られるのも礫層の起伏による可能性が高い（本センター主任主事藤木聡より教示）。

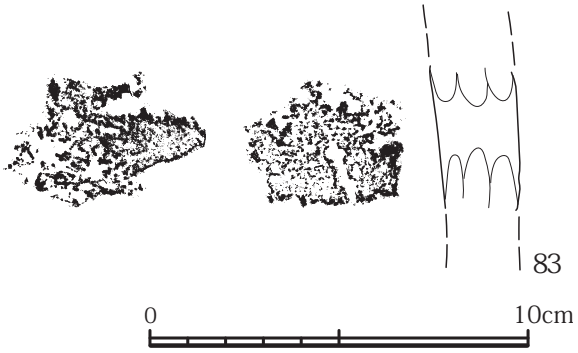
文化層はＡＴ上位のⅡ層である。土器の出土は、表土から５㎝程度の土器片が１点出土したのみで（第34図83）、その詳細は不明だが縄文時代早期の無文土器と思われる。

２　旧石器時代終末期～縄文時代早期の遺構

尾立第３遺跡では、礫群が10基確認されている（第35図SI １～SI10）。礫群は調査区の北東側に集中し、その周辺には、北側傾斜面に沿うように散礫状に礫が点在している（図版８：尾立第３遺跡北側散礫参照）。散礫状に散在している礫は、グリッドごとに取り上げ、その総重量を図示した（第39図）。

本遺跡が傾斜地であるため、必然的に総重量は標高が下がるごとに重くなっていく。このことから散礫状に広がった礫も、本来は礫群の構成礫であった可能性も想定できる。

集石遺構は２基検出した。礫群とは離れて、調査区南側の標高の高い位置から検出された。礫群と同層からの検出で、判断が難しかったが、これら２基



第34図　表採土器　（S＝1/2）

の集石遺構（SI11,SI12）は、掘り込みを持つ遺構と掘り込みはないが礫の配置が整然としている遺構で、また他の礫群とは群を共にしない点なども考慮して集石遺構として報告する。

礫群・集石遺構・散礫の３者ともに遺構内と遺構間、グリッド間の接合状況を観察した。

１）礫群

SI １（第36図）

調査区東側のＤ７グリッドとＥ７グリッドの境から検出された。掘り込みは見受けられない。径1.0mの範囲内に収まり、構成礫は個体数として101個となり概ね長さ８㎝、幅６㎝前後の礫が多い。ほとんどが尾鈴山酸性岩類であるが、赤色チャートの礫も13点確認された。

接合状況を見ると、SI １はSI ７やSI ８と接合するものが３点ある。３点中２点の接合が赤色チャートで、接合点数も５点ずつと尾鈴山酸性岩類の接合よりも１個体が接合する点数が多い。

SI ２（第36図）

調査区中央の東端のＦ５グリッドから検出された。掘り込みは見受けられない。本遺跡の中では、範囲はもっとも広く、径1.7ｍ×1.6ｍとなる。構成礫は101個体あり、その内９点が赤色チャートである。概ね長さ８㎝、幅６㎝前後の礫が多い。

接合する礫が19個体分となる。赤色チャートの接合が１点あり、やはりSI １と同様に、接合点数が８点と尾鈴山酸性岩類の接合よりも点数が多い。遺構内や、周辺のグリッドとの接合のみで、他の礫群と接合する礫はない。

SI ３（第37図）

SI ２の南側のＦ６グリッドより検出された。掘り

第35図　遺構分布図　（S＝1/200）

（コンタはAT直上で計測。トーン部分は撹乱。）

込みは見受けられない。遺構範囲は小さく、0.6ｍ×0.6ｍ程度である。構成礫数も多くなく36個体で、全て尾鈴山酸性岩類である。その長さは8㎝、幅6㎝前後の礫が多い。

5個体分接合したが、全て尾鈴山酸性岩類で、遺構内での接合である。

SI 4（第37図）

最も東北端のＥ３グリッドより検出された。掘り

込みは見受けられない。遺構の範囲は小さく、0.6 m × 0.5 m程度である。構成礫も少なく 24 個体で全て尾鈴山酸性岩類である。礫の平均寸法は長さ 9 cm、幅 7 cm 前後と、SI 1 から SI 3 までの構成礫よりもやや大きく感じられるが構成礫の個体数も少なく、あくまでも平均値のため礫群の形態にさほど変わりはない。

接合資料は 5 点あり、1 点のみ SI 5 と接合する。

SI 5（第 37 図）

SI 4 の真南の D 3 グリッドと D 4 グリッドの境から検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は 1.1 m× 0.8 m である。構成礫数は 41 個体で全て尾鈴山酸性岩類である。平均寸法は長さ 9 cm、幅 7 cm 前後と SI 4 とほぼ同じ構成である。

接合資料は 8 点あり、前述した SI 4 との接合の他に、周辺グリッドとの接合が見られる。

SI 6（第 37 図）

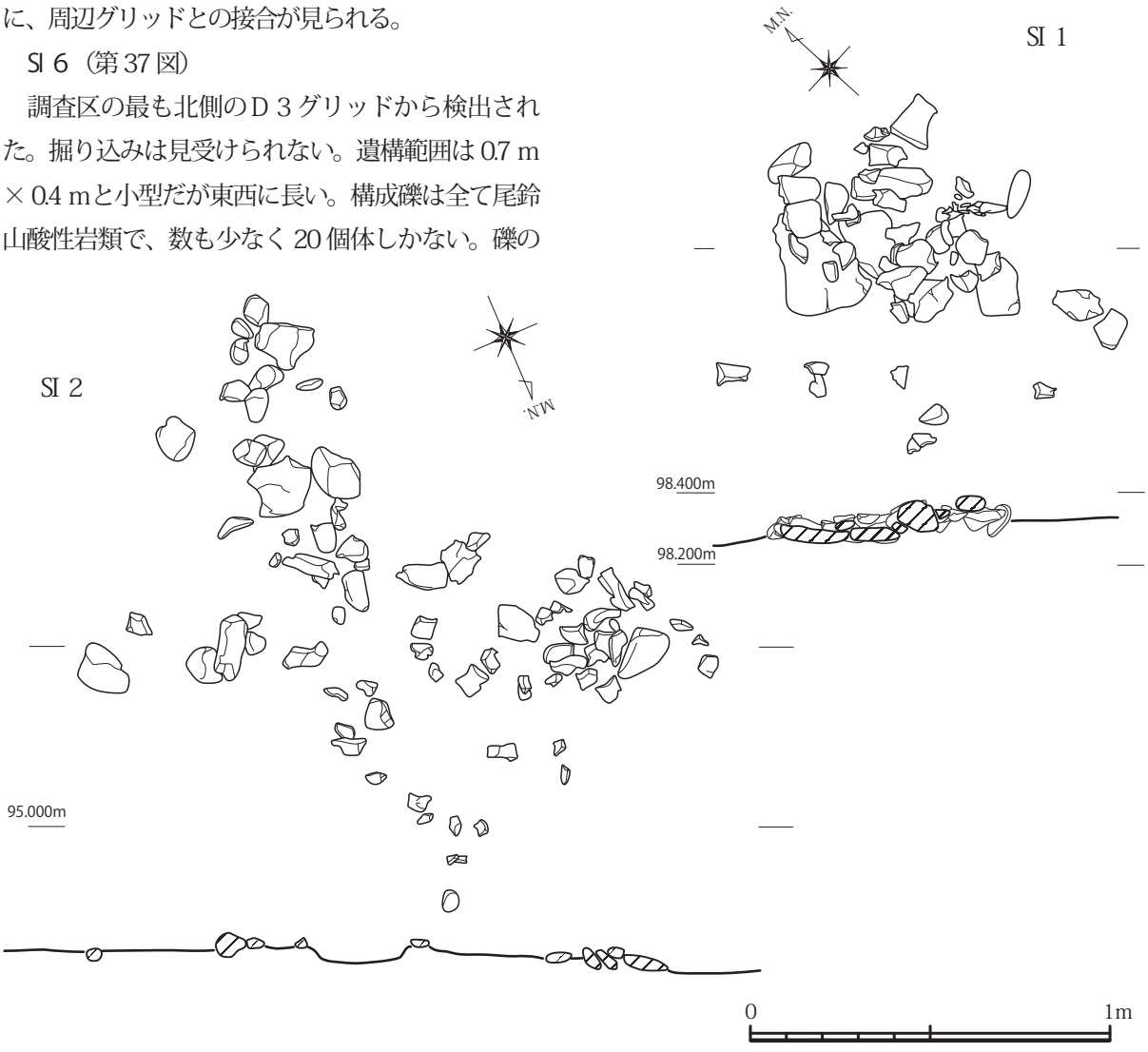
調査区の最も北側の D 3 グリッドから検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は 0.7 m × 0.4 m と小型だが東西に長い。構成礫は全て尾鈴山酸性岩類で、数も少なく 20 個体しかない。礫の平均寸法は、長さ 7 cm、幅 5 cm 前後で本遺跡では最も平均値は小さいが、他の礫群の礫の大きさと比較して極めて小さいわけでもなく、礫群の形態にも変わりはない。

接合資料は、4 点あるが遺構内での接合のみである。

SI 7（第 38 図）

調査区の中央からやや東側寄りの D 4 グリッドから検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は 1.0 m× 1.3 m と本遺跡内では大型の礫群である。

接合状況は、近接する SI 8 と多く接合する。また、礫群間では、赤色チャートの砕片が SI 1 と接合し、SI 7、SI 9、SI10 の 3 つの礫群から出土した礫同士



第 36 図　礫群実測図（1）（S = 1/20）

が接合する資料も見られる。

SI 8（第 38 図）

SI 7の北側のＥ 4グリッドより検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は 0.9 m× 0.5 mである。

前述のとおり、SI 7との接合が多く、他に SI 1とも接合する。

SI 9（第 38 図）

SI 1より北側のＤ 7グリッドとＥ 7グリッドの間より検出された。掘り込みは見受けられない。大幅に攪乱を受けているため、推定ではあるが遺構範囲は 1.2 m× 0.4 mとなる。現存する構成礫数も 11 個体と少ない。その中に 1点のみ砂岩が含まれる。重量が 1200 g と礫群内で最も大きく、重い。1個体ごとの平均寸法は長さ 8cm、幅 6cm 前後と平均的な数値である。

前述した接合のほかに、Ｄ 9グリッドの 1点と SI 9の 3点が接合する。

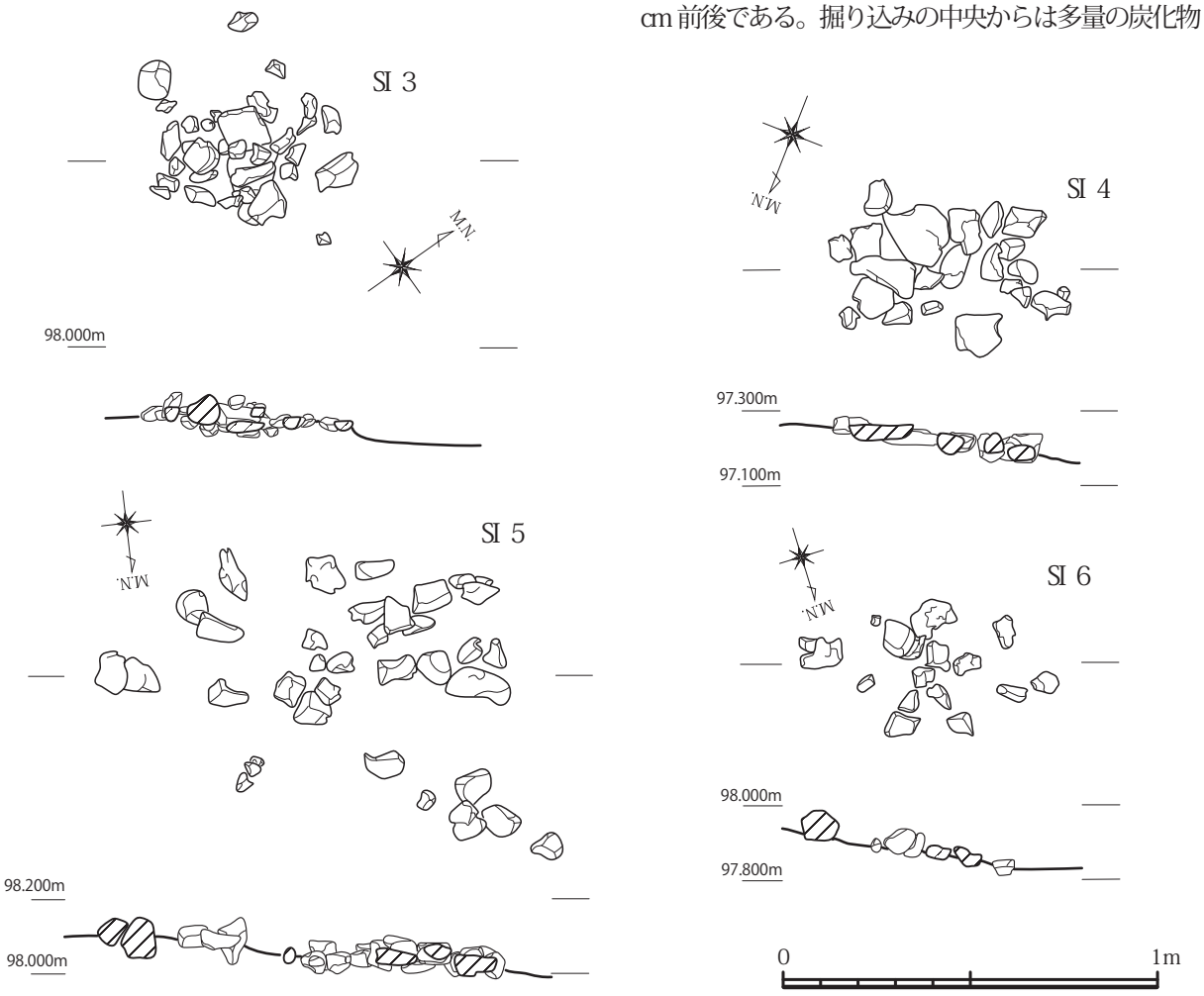
SI10（第 38 図）

SI 1と SI 9の中間に位置するのＤ 7グリッドとＥ 7グリッドの間から検出された。掘り込みは見受けられない。遺構範囲は 0.5 m× 0.6 mである。構成礫数は 23 個体で、尾鈴山酸性岩類の中に 3点の赤色チャートが含まれる。平均寸法は長さ 10cm、幅 8cm 前後である。SI 9との間に攪乱があるが、極めて近接し、SI 9と接合する個体もあるため、本来は 1つの礫群であった可能性も想定できる。

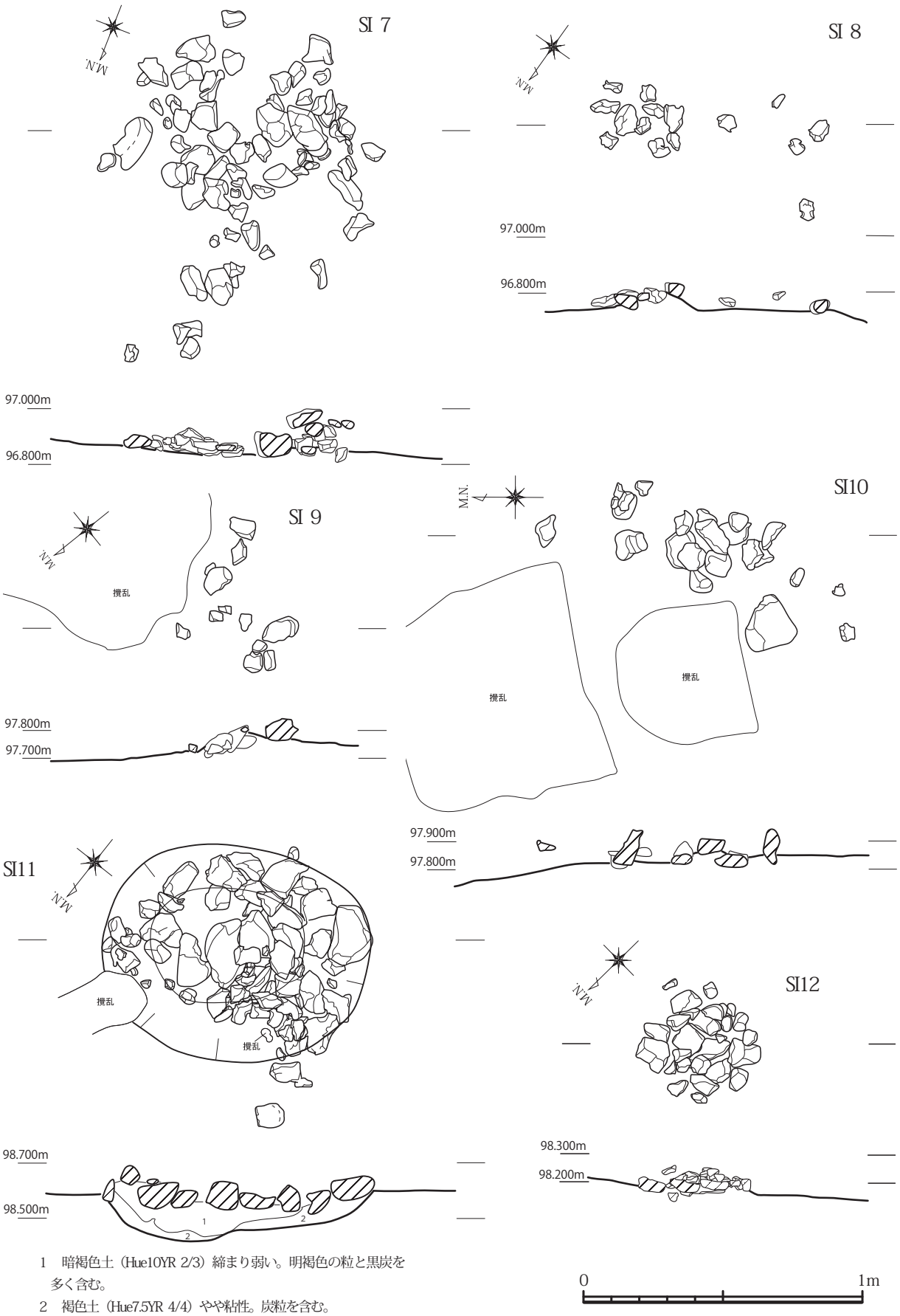
2）集石遺構

SI11（第 38 図）

調査区の最も標高の高い南端のＡ 8グリッドから検出された。本遺跡内で唯一掘り込みを持つ集石遺構である。遺構範囲は 1.0 m× 1.0 m、掘り込みの深さは 0.2 mである。構成礫数は 153 個体で、全て尾鈴山酸性岩類である。平均寸法は長さ 8cm、幅 6cm 前後である。掘り込みの中央からは多量の炭化物



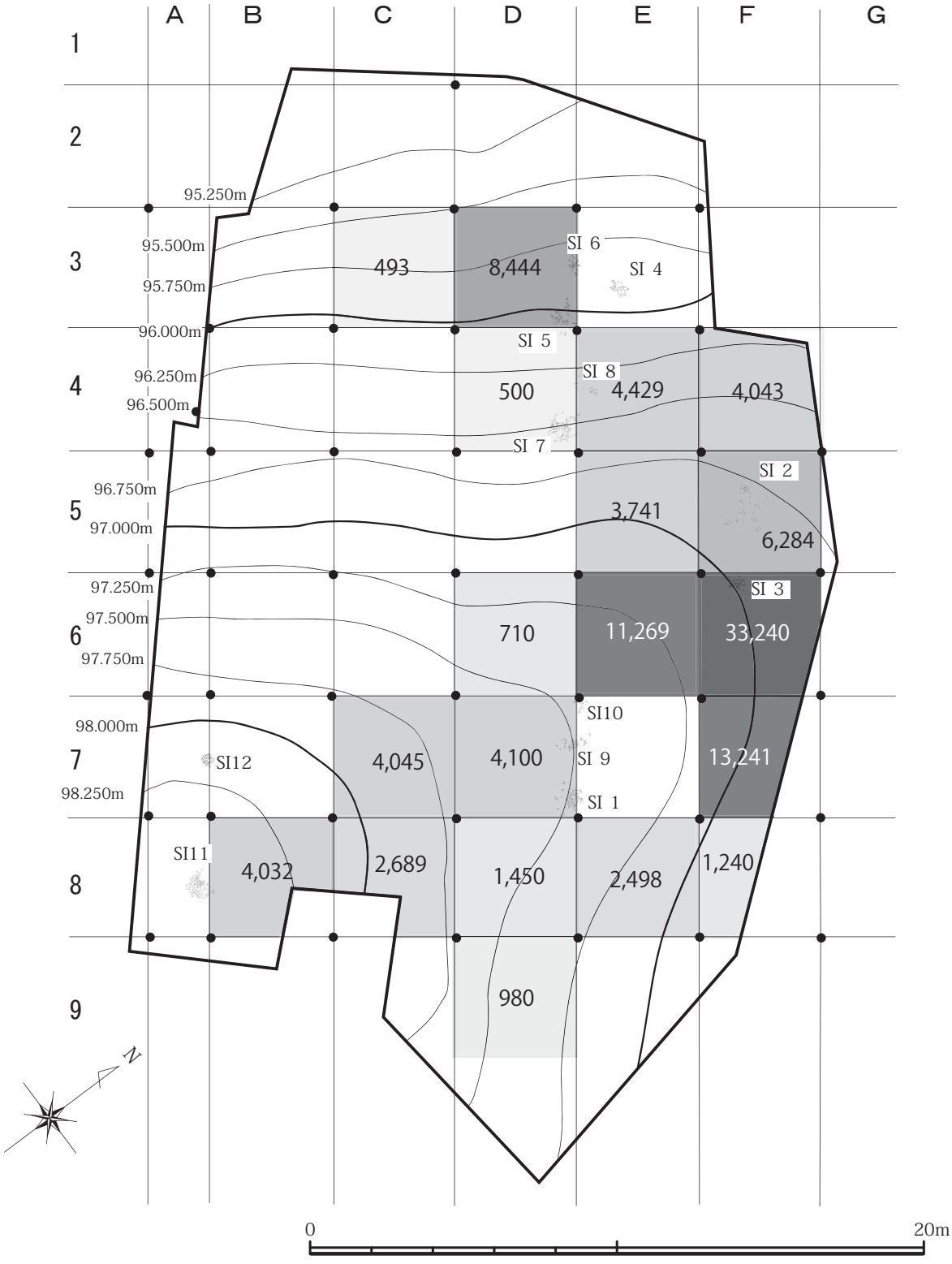
第 37 図　礫群実測図（2）（S = 1/20）



1　暗褐色土（Hue10YR 2/3）締まり弱い。明褐色の粒と黒炭を多く含む。

2　褐色土（Hue7.5YR 4/4）やや粘性。炭粒を含む。

第 38 図　礫群実測図（3）及び集石遺構実測図　（S = 1/20）



第 39 図　散礫のグリッドごとの総重量模式図（単位はｇ）（S＝1/200）

が検出された。２試料を自然科学分析にかけたところ、どちらもコナラ属コナラ節という樹種同定結果を得た。

また、これらの炭化物は放射性炭素年代測定（AMS法）から、9,210 ± 60 年 BP（BC8,530 ～ 8,300 年）と 9,120 ± 60 年 BP（BC8,310 ～ 8,270 年）の年代値が算出されている。

構成礫数も多量のため、接合点数も必然的に多くなった。しかし、他の遺構との接合はなく、グリッドで取り上げた礫との接合も１点しかなかった。

SI12（第 38 図）

SI11 の西北から検出された。掘り込みは持たないが、円形に整えられた形態で検出された。遺構範囲は 0.5 m× 0.4 mである。構成礫数は 40 個体で、全て尾鈴山酸性岩類である。平均寸法は長さ 8 cm、幅 6 cm 前後と SI11 と類似する。礫群の中央より炭化物が検出された。自然科学分析の結果によると、炭化材はコナラ属コナラ節という樹種同定結果を得ている。また、放射性炭素年代測定（AMS 法）から、年代値は 9,060 ± 60 年 BP（BC8,290 ～ 8,240 年）と算出されている。

SI12 は、第Ⅱ層検出の中でも最も AT 直上から検出された。そのため、調査中は礫群と認定していた。しかし、自然科学分析により約 9,000 年前と算出され、さらに、他の礫群とは離れ、SI11 に近接して検出されたこと、礫群と認定するには遺構自体が整っており、礫に配列性が見られるため、本報告では集石遺構と修正した。

遺構内での接合は９点と、遺構の規模にしては多いほうであった。しかし、他の遺構やグリッドで取り上げた礫との接合はない。

３）散礫（第 39 図）

４m× 4 mのグリッドごとに取り上げ、計測した。第 39 図はグリッドごとの総重量である。

主に、散礫が検出したのは、Ｄ３グリッドとＥ４～６グリッド、Ｆ４～７グリッドの緩やかに傾斜する東側半分である。これらグリッドの礫は整理の結果、前述した礫群と接合するものが多く、旧石器時代の礫群に伴う遺構と思われる。

Ｄ３グリッドには 29 個体の礫があり、そのうち２点が赤色チャートであった。残りは全て尾鈴山酸性岩類で、平均すると長さ 8.5cm、幅 6.1cm である。接合関係を見ると、Ｅ４グリッド１点、Ｆ４グリッド２点の礫と接合する。

Ｅ４グリッドは、109 個体の礫が出土した。そのほとんどが尾鈴山酸性岩類の礫であるが、７点だけ赤色チャートが含まれる。礫の大きさは平均すると長さ 7.9cm、幅 5.7cm である。Ｅ４グリッドは、出土した礫が小礫のため重量は軽いが、数多くの礫が出土し、接合状況も様々なケースが見られた。グリッド間接合で最も多かったのが、Ｆ４グリッドとの接合であり、元は１つの集合体であった可能性がある。

また、Ｅ４グリッドは、礫群との接合も多く見られた。SI ５とＥ４グリッド、Ｆ４グリッドから出土した 14 個体が１つに接合した。他にも SI ２、SI ６、SI ７、SI ８とそれぞれ接合したり、SI ７、SI ８とＥ４グリッドから出土した９個体や SI ８とＤ４・Ｅ４・Ｆ４グリッドから出土した６個体が１つに接合した。

Ｆ４グリッドは、個体数として最も多い 109 個の礫が出土した。平均して長さ 8.3cm、幅 6.1cm の大きさの礫が出土し、ほとんどが尾鈴山酸性岩類だが、赤色チャートが４点、砂岩とホルンフェルスが１点ずつ含まれる。個体数が多いため接合する数は最も多いが、接合できる礫の範囲はほとんどが同グリッド内に収まる。Ｅ４グリッドで前述した個体以外にグリッド間で接合する礫はない。礫群と単独で接合するものも、SI ８と接合するたった１点のみである。破砕した礫が最も多く出土したにしては、礫の大きな移動が見られないグリッドである。

Ｅ５グリッドからは、13 個体の尾鈴山酸性岩類が出土した。大きさは長さ 7.8cm、幅 6.3cm で、接合は見られない。

Ｆ５グリッドは、中央から SI ２が検出されたグリッドである。総重量は重いが、個体数は 12 個と少数である。長さ 9.3cm、6.3cm と比較的大きな尾鈴山酸性岩類である。たった 12 点しか出土していないが、グリッド内で接合する礫や、SI ２や SI ７と接合する礫などがある。

Ｅ６グリッドは、24 個体の礫が出土した。尾鈴山酸性岩類の中に５点のみ赤色チャートが含まれる。

平均の長さ 8.6cm、幅 6.5cm で、総重量も重いほうである。グリッドの位置も礫群が検出される範囲の中心にあり、多くの礫群間やグリッド間の接合が期待されたが結局Ｅ６グリッドの礫２点とＦ６グリッドの礫１点の３点が接合したのみである。

Ｆ６グリッドは、最も出土した礫の総重量が重い。しかし、個体数は、62 個とＦ４グリッドの 1/3 も出土しなかった。大きさは平均して、長さ 9.0cm、幅 6.4cm と大きいほうである。同グリッド内で２点ずつの接合が目立つ。礫群と接合するものはなく、Ｆ６とグリッド間で接合する礫は、Ｆ７やＦ８グリッドなどの全てＦ６グリッドよりも高いレベルから出土した礫である。

Ｃ７グリッドからは、22 個体出土した。全て尾鈴山酸性岩類である。平均の長さ 6.6cm、幅 4.8cm と最も小型の礫になる。Ｃ７グリッド内での接合は３点ほどあり、SI ２の礫３点と接合する礫が１点だけ見られる。その他の接合はない。

Ｄ７グリッドは、平均の長さ 9.6cm、幅 6.4cm と比較的大きな礫が出土する。総個体数は 17 点で全て尾鈴山酸性岩類である。グリッド付近には SI １・SI ９・SI10 が存在する。そのため、SI ９の３点とＤ７グリッドの１点が、SI10 とＤ７グリッドの１点ずつがそれぞれ接合した。グリッド間ではＦ７グリッドと接合している。Ｄ７グリッドより東側に存在する礫群やグリッドと接合する傾向にある。

Ｆ７グリッドは、総個体数 36 点中２点が赤色チャートで、残りは尾鈴山酸性岩類である。グリッド内での接合はいくつかあるものの、礫群や他のグリッド間との接合は、前述したＦ６グリッドとＤ７グリッドのみである。

Ｂ８グリッドは西側に集石遺構が存在する。個体数 48 個と数は比較的多いが、総重量も軽く、礫の大きさも平均して、長さ 7.6cm、幅 5.7cm と小型な方に分類される。当然、SI11 との接合は見られる。他に、SI １とも接合する。グリッド間接合では、Ｄ８、Ｅ８グリッドのＢ８グリッドよりも東側に位置するグリッドとの接合が見られるが、すぐ隣のＣ８グリッドの礫とは接合しなかった。

Ｃ８グリッドは７点しか出土しなかったが、総重量が重く、平均の長さ 9.6cm、幅 6.5cm と１点１点が大きな礫である。１点のみ赤色チャートで他は尾鈴山酸性岩類である。個体数が少ないため接合も SI11 の３点とＣ８グリッドの１点が接合したのみである。

Ｄ８グリッドは尾鈴山酸性岩類４点の出土である。大きさの平均は、長さ 7.9cm、幅 6.9cm である。前述したＣ８グリッドとの接合のほかに、Ｄ９グリッドとも接合する。

Ｅ８グリッドは、出土した９点の礫のうち、４点が赤色チャートの石材である。平均した大きさは、長さ 7.8cm と幅 6.2cm である。接合は前述したＢ８グリッドのみである。

Ｆ８グリッドの面積は他のグリッドの半分しかない。そのため総重量も軽く、４点しか出土していない。しかし、平均した長さ 9.0cm、幅 6.6cm と１点１点の礫は大型である。礫群やグリッド間の接合はない。

３　旧石器時代終末期～縄文時代早期の遺物

Ⅱ層から計 246 点の石器が出土している（第 40 図）。尾立第３遺跡は製品の数が少なく、22 点のみ確認される。そのうち、旧石器時代終末期～縄文時代草創期の製品と思われるものは、19 点である。内訳は、細石刃石核が４点、掻器が１点、ナイフ形石器が９点、角錐状石器が３点、台形石器が２点、石鏃が２点、敲石が１点、石核が 20 点、二次加工有る剥片が２点、剥片が 179 点である。そのうち、41 点を図示した。

前述のように本遺跡は堆積層が薄く、また土器も伴わないため遺物自身では所属時期の特定が困難である。以下、所属時期を問わず個別に説明を加える。

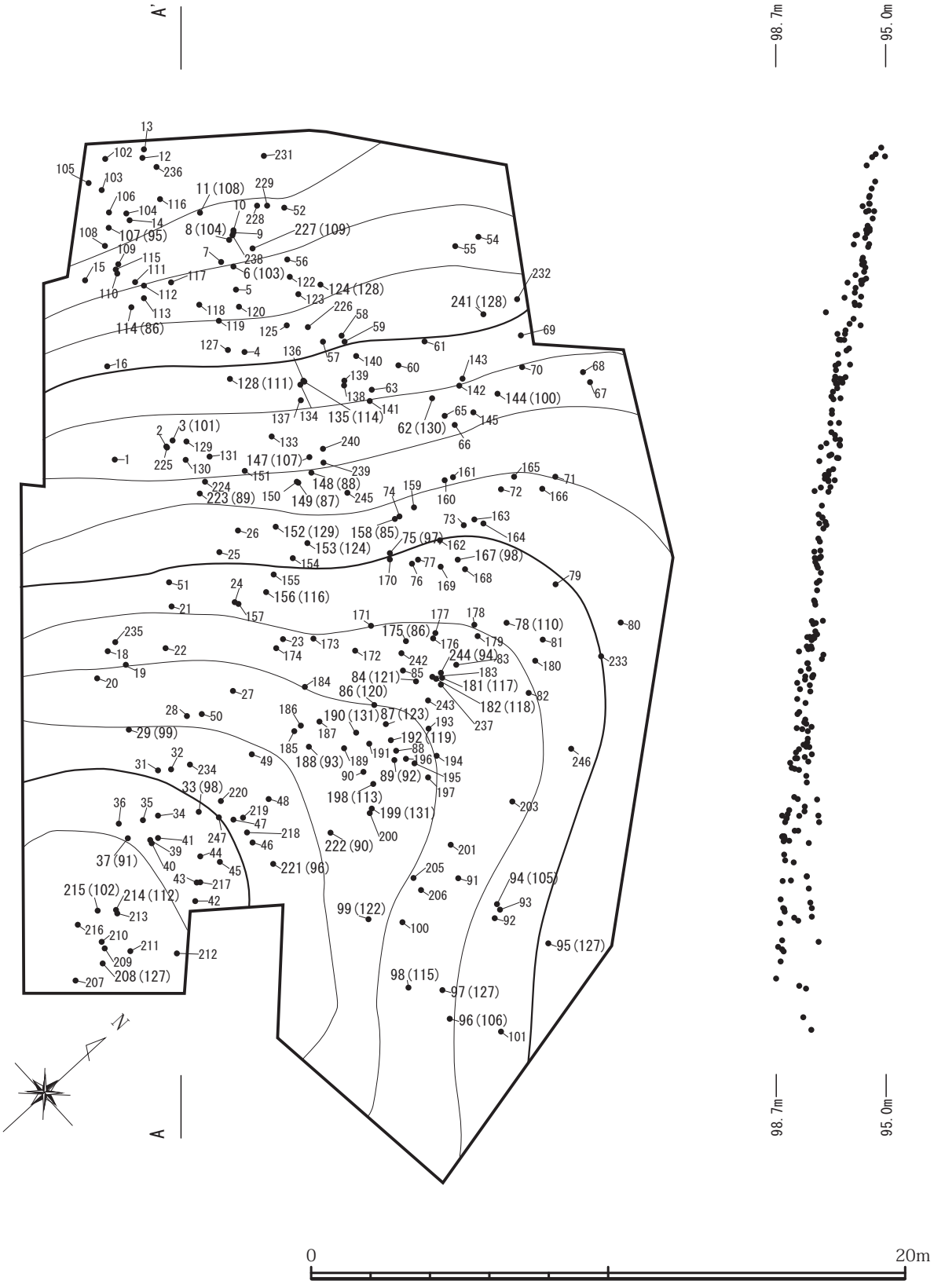
角錐状石器（第 41 図 84 ～ 86）

全部で３点出土しているが、製品は 84 だけである。白色流紋岩を用い、瀬戸内技法によって剥離された横長剥片素材から製作している。

86 は先端部のみの出土である。緑色チャートの石材を利用して製作されている。

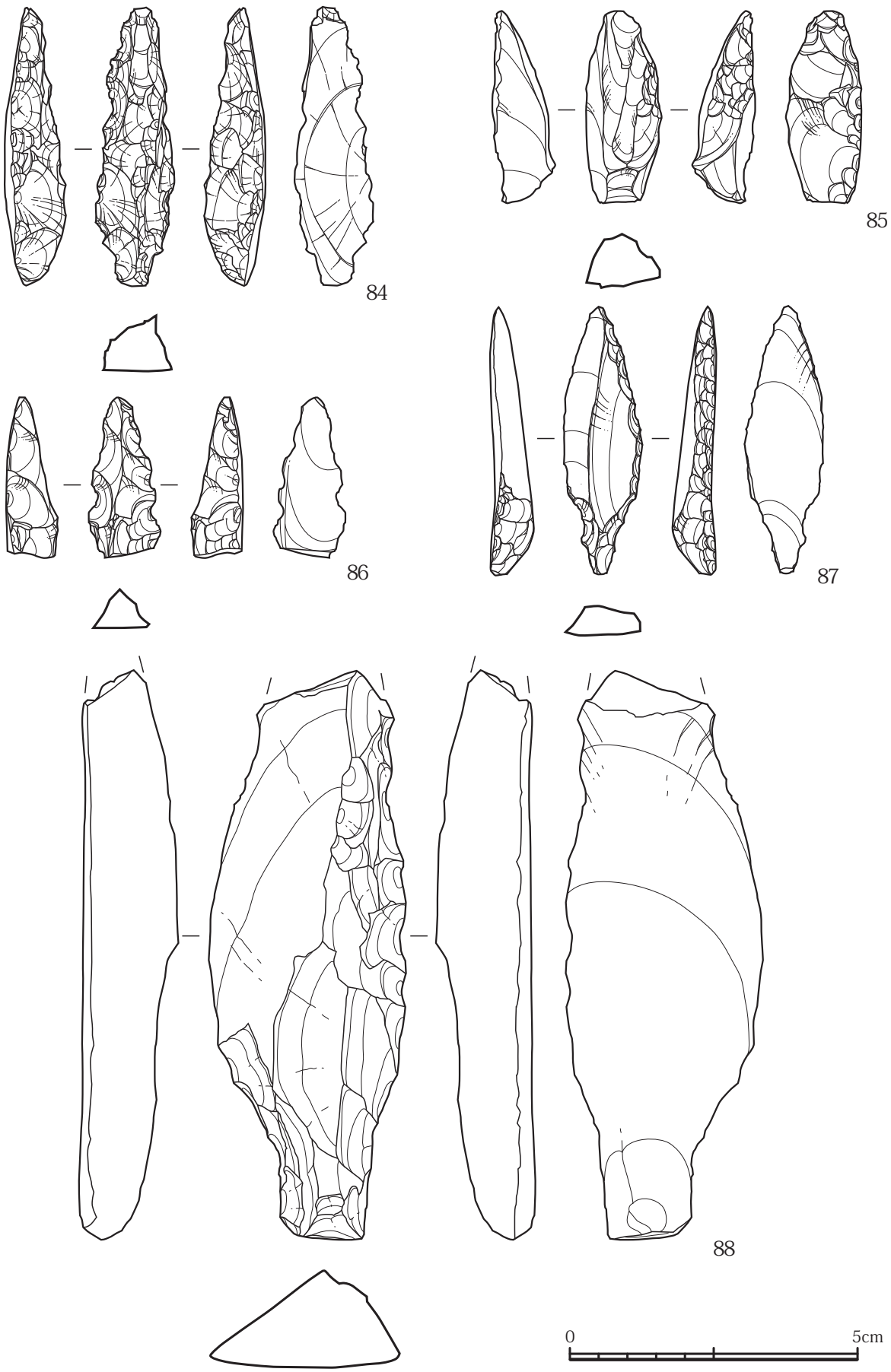
ナイフ形石器（第 41 図 87・88、第 42 図 89 ～ 95）

先端部もしくは末端部のみの出土、未製品を含め

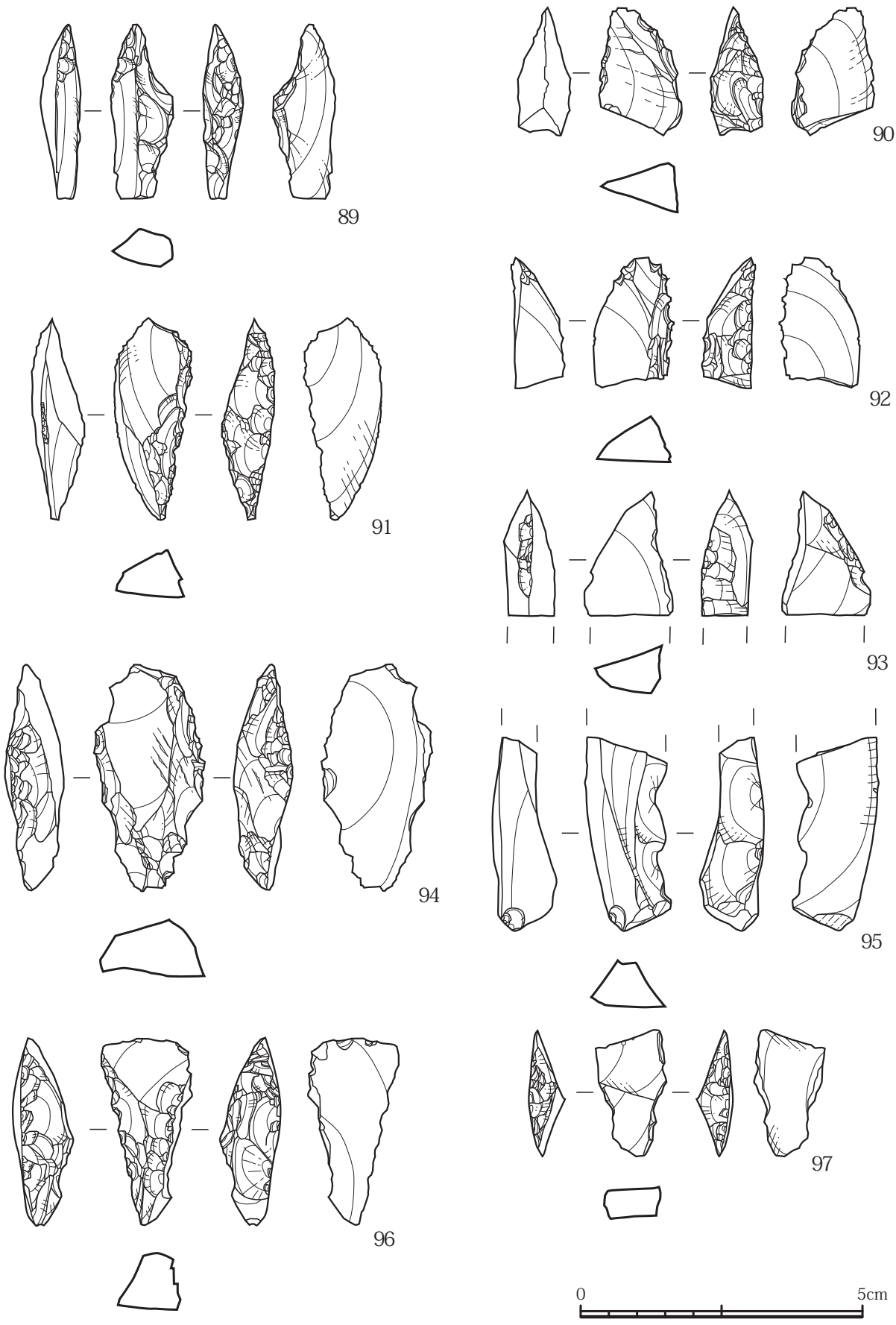


第 40 図　石器出土分布図 （S = 1/200）

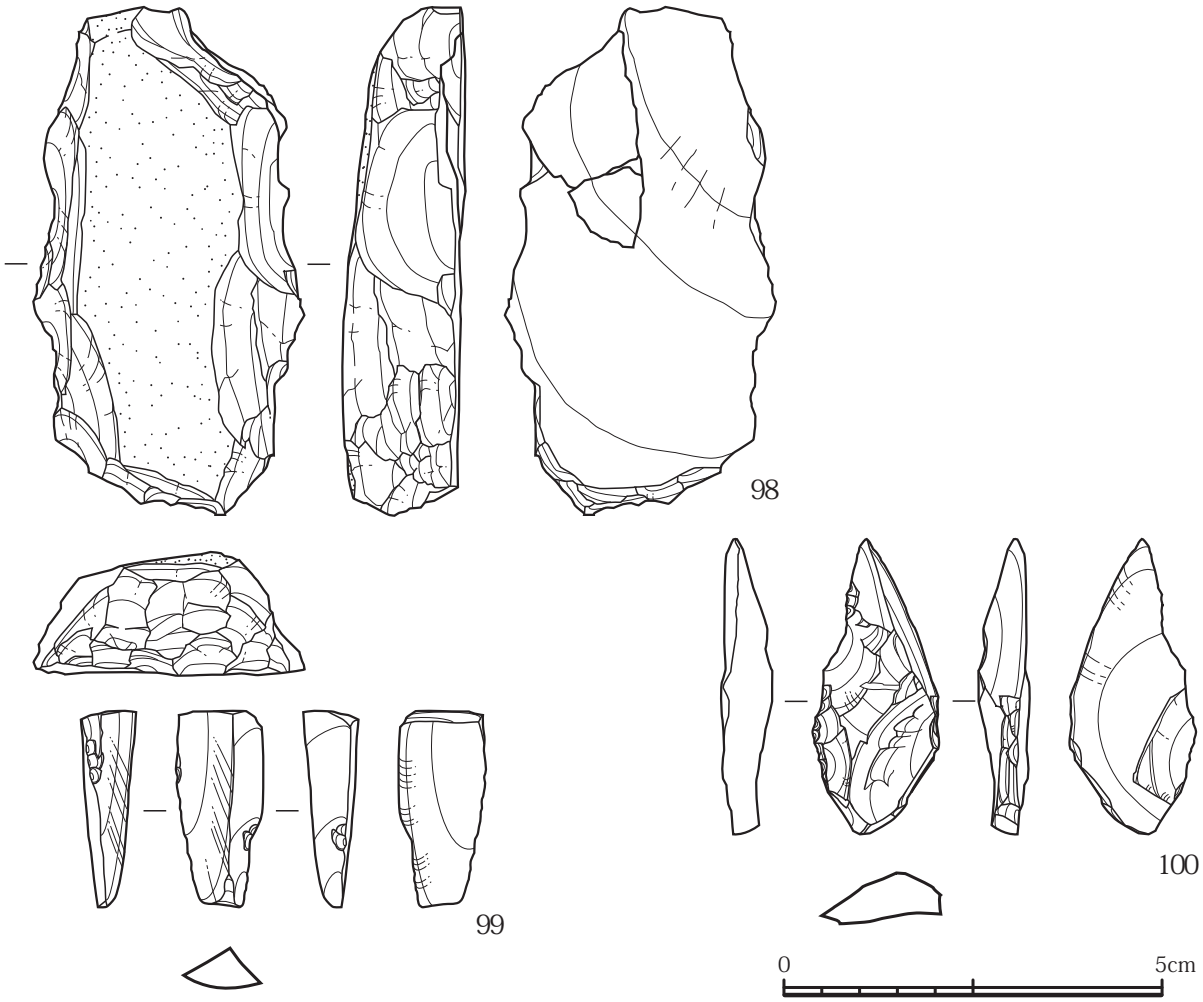
（遺物番号は調査時の取り上げ順。石器観察表の「遺物 NO.」に対応する。括弧はﾚｲｱｳﾄ No.。）



第 41 図　出土石器実測図（1）（S＝1/1）



第 42 図　出土石器実測図（2）（S = 1/1）



第 43 図　出土石器実測図（3）（S ＝ 1/1）

て 9 点出土している。製品は 87 のみである。径の最も大きい 88 のナイフ形石器のみ縦長剥片素材を利用したホルンフェルス製のナイフ形石器で、他の 8 点はすべて瀬戸内技法よるいわゆる国府型ナイフである。

台形石器（第 41 図 96・97）

2 点出土している。いずれも瀬戸内技法によって剥離された横長剥片素材から製作している。

掻器（第 43 図 98）

1 点のみ出土している。ホルンフェルス製の縦長で厚手の剥片を素材とし、正面と頭部に礫面を残す。主に末端部にスクレイパーエッジを配置しているが、両側面にも背面から二次加工が加えられている。

二次加工剥片（第 43 図 99・100）

明確な二次加工の有る剥片のみ選定した。2 点出土しているが、いずれもナイフ形石器の製作途上または失敗品である可能性が高い。

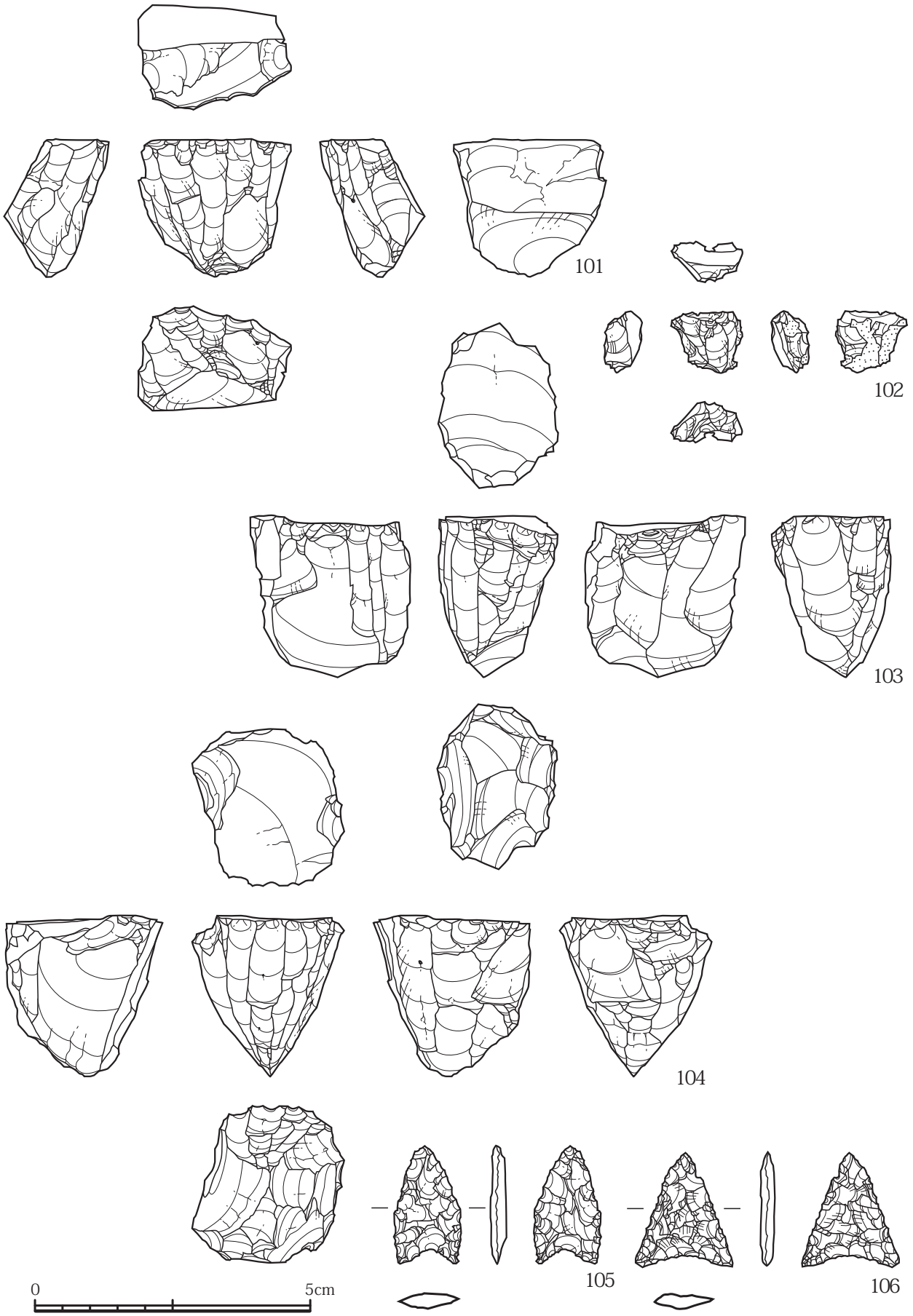
細石刃核（第 44 図 101 ～ 104）

4 点出土している。うち 1 点は黒曜石利用の細石刃石核（102）で極小片になるまで利用されている。他の 3 点はいずれも黒色チャート石材を利用した細石刃核（101、103、104）である。しかし、101 は背面に礫面を残し、正面から側面にかけて細石刃剥離作業面を設定している。

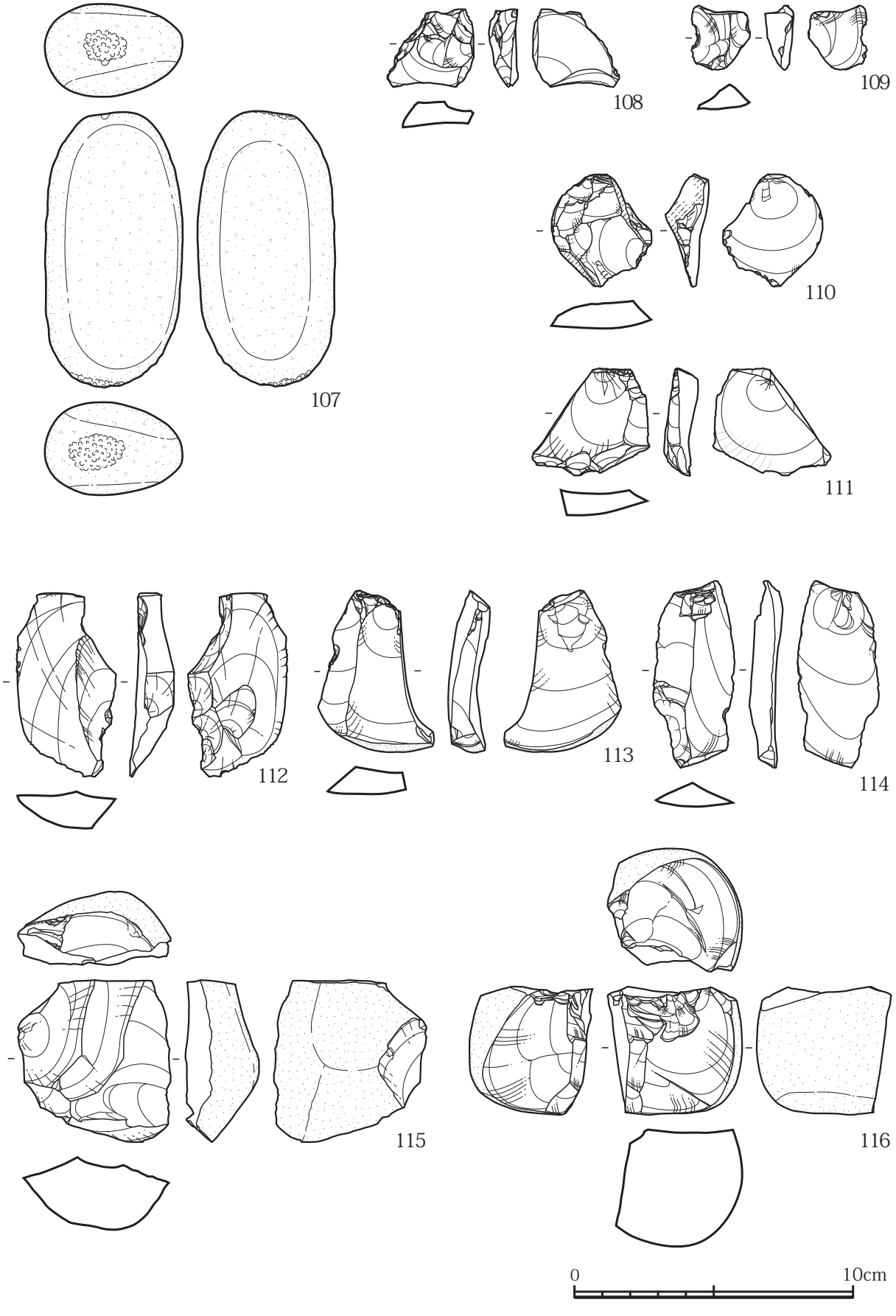
一方、103・104 の 2 点は主要剥離作業面を側面とし、形態が逆円錐状を呈する船野型の細石刃石核といえる。104 の黒色チャートの透過度は低い。

石鏃（第 44 図 105・106）

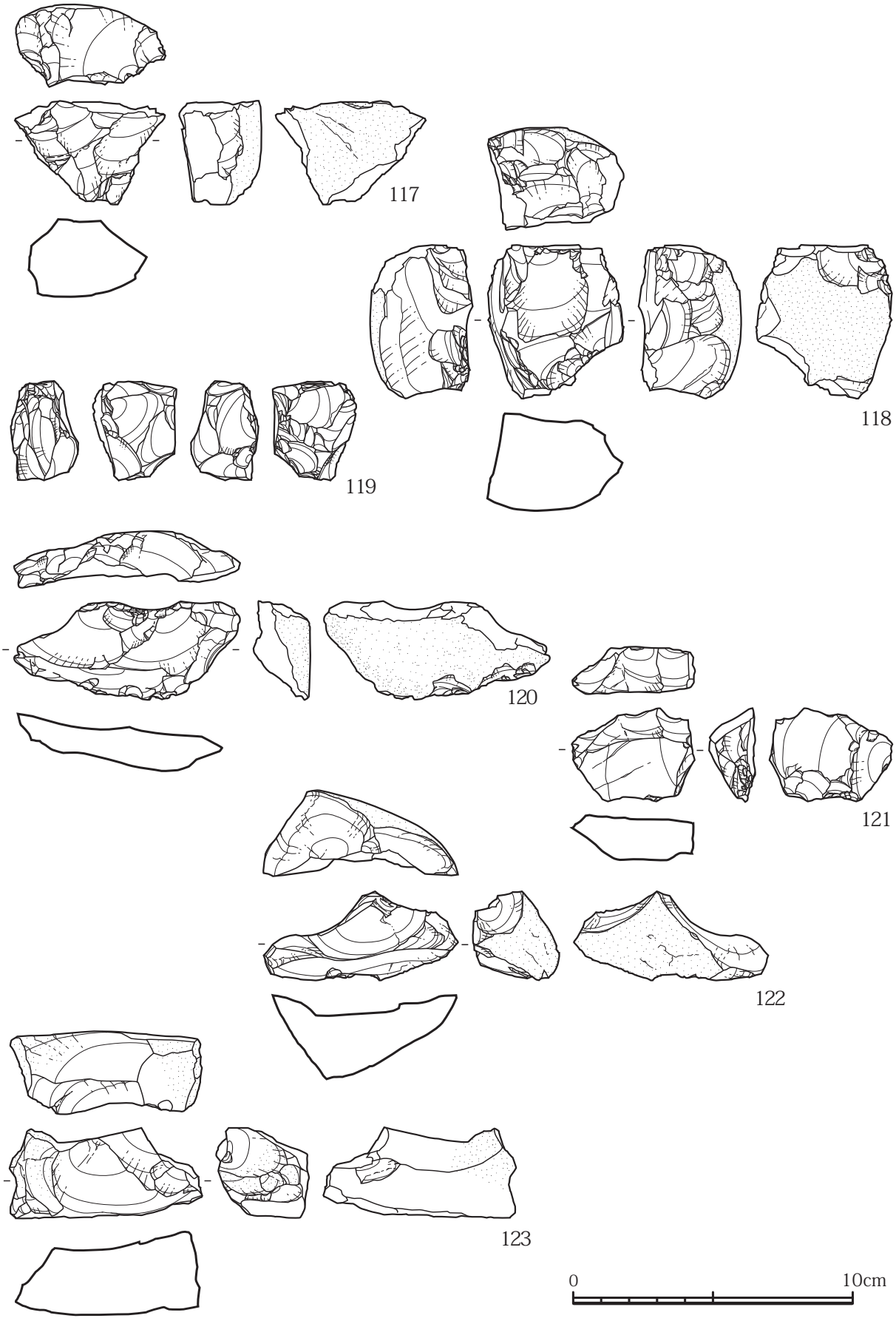
2 点出土しているが、いずれも打製石鏃である。石材は玉髄（105）と淡い緑色チャート（106）を用いている。105 は平面形が二等辺三角形に近似し、浅い抉りを有する。宮崎県阿蘇原上遺跡の石鏃Ⅲ類



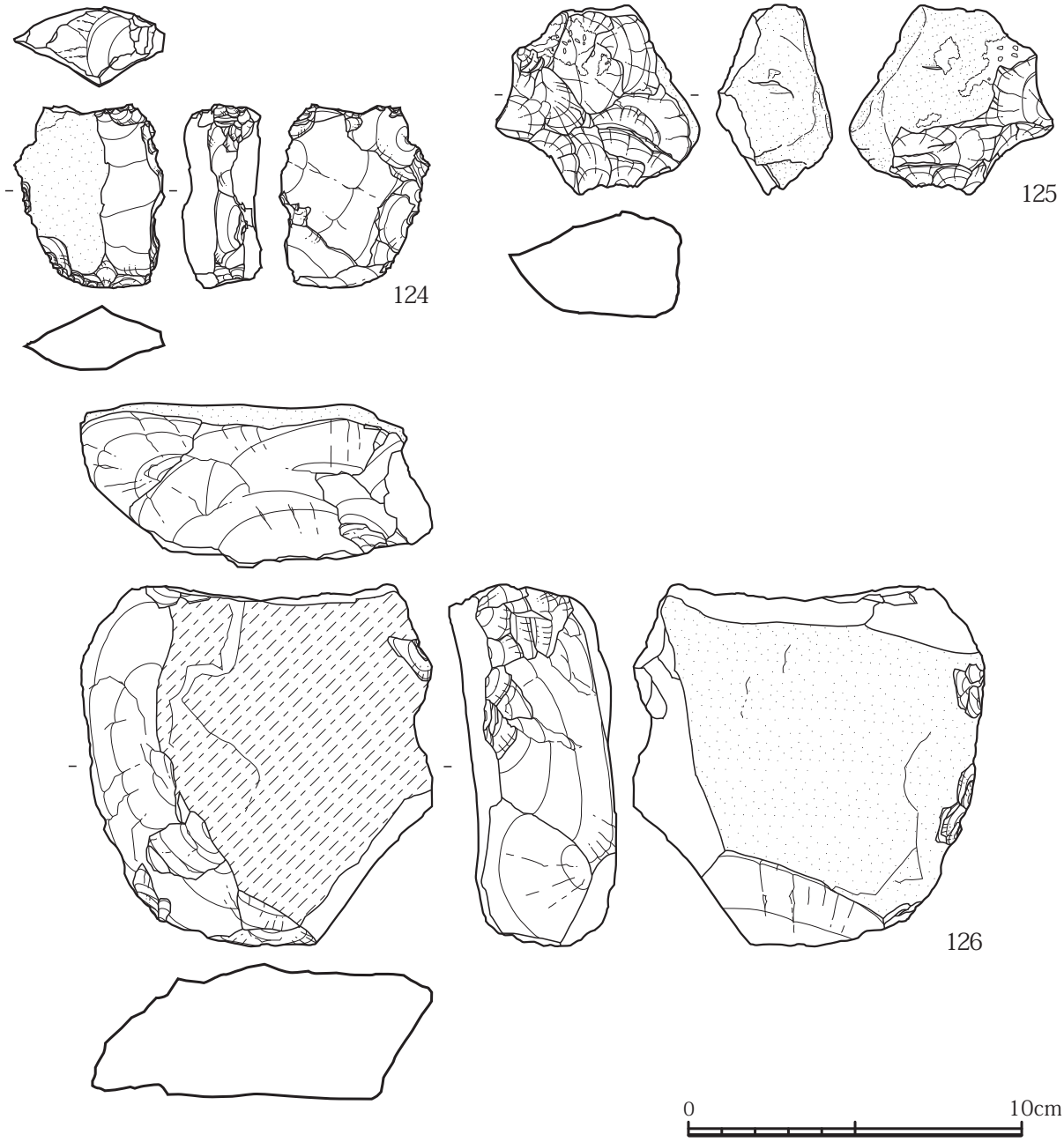
第 44 図　出土石器実測図（4）（S = 1/1）



第 45 図　出土石器実測図（5）（S = 1/2）



第 46 図　出土石器実測図（6）（S ＝ 1/2）



第 47 図　出土石器実測図（7）（S＝ 1/2）

に属する。106 は平面形が略正三角形を呈し、浅い抉りを有する。阿蘇原上遺跡の石鏃 I 類に属する。

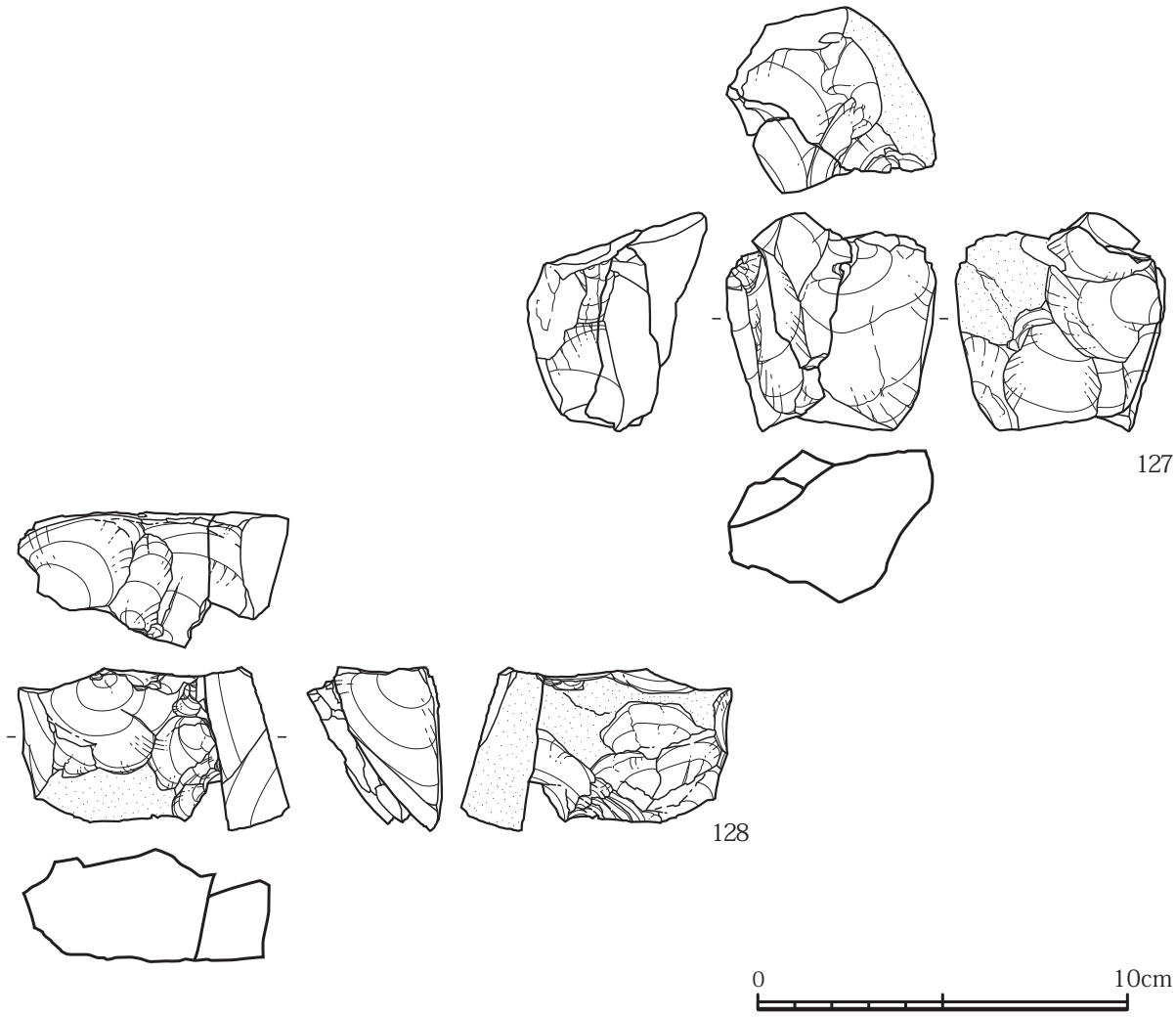
本遺跡から出土した 2 点は平面形態は若干異なるが、大きさは長さ、厚さともに類似する。出土地は近接し、遺跡内の頂上部南東側より出土した。ほぼ同時期に製作されたものと捉えられる。その形態から、縄文時代草創期に近い時期に帰属する可能性が高い。

敲石（第 45 図 107）

尾鈴山酸性岩類製の細長形の棒状に成形された敲石が 1 点出土した。頭部と底部に敲打痕が見られる。SI 7 付近から出土した。

その他の石器（第 45 図 108 ～ 116、第 46 図 117 ～ 123、第 47 図 124 ～ 126）

石核、剥片などが出土した。109 は緑色チャートを利用した剥片素材である。112 は茶色流紋岩を利用し、瀬戸内技法によって加工された翼状剥片である。図化した上面は礫面を残す。ナイフ形石器の素材剥片と思われるが、加工を施した痕跡は見受けられない。113（黒色流紋岩）、114（茶色流紋岩）は



第 48 図　出土接合石器実測図 （S ＝ 1/2）

共にに縦長剥片で流紋岩を利用している。113 は底面が礫面である。114 は基部を作り出そうとする加工が見られる。

本遺跡は、剥片よりも石核と判断される石器が多く出土している。115 から 118 までは、黒色もしくは茶色流紋岩を利用した石核である。これらの石核は、頭部を打面調整しており、上面からの剥離が多い。また、背面や底面に礫面が残される。120、122、123 は、瀬戸内技法を変化させたような技法を用いて加工された翼状剥片の石核である。120 と 121 は緑色チャートを利用した石核で、この 2 点は近接して出土しており、同一母岩の石核と思われる。

124 は珪質頁岩系のチャートを利用した石核である。また、本遺跡からは 123、125、126 などの尾鈴山酸性岩類を用いた石核や大形の剥片も多く出土する。126 は側縁を剥離した石核で、SI 2 を構成する礫の 1 つとして SI 2 の端から出土した。

接合石器（第 48 図 127・128）

ほとんど接合する資料が見られなかった。その中で図化したものは 2 点である。127 は、3 点が接合する、尾鈴山酸性岩類製の接合資料である。背面に礫面を残す石核から、上下面から剥片を剥離している。128 は頁岩石材の接合資料である。2 点接合した。背面に礫面を残している。石核となる方は、頭部を打面調整し、上面から正面、左右側面の三側面に剥離が行われている。背面は礫面である。

第４節　まとめ

１　散礫の検出状況と復元

地形に沿って北側に下降していくにつれ、礫の総重量も増えている。これは、検出された礫群が、山の傾斜により本来の原位置から多少移動している可能性をも予見している。また、注目できる結果として、Ｆ４グリッドは総重量は少なかったが、個体数は191個と最も多い数の礫が検出された。Ｆ４グリッドは調査区で最も北に位置し、尾根全体を見てもＦ４グリッドに向かって傾斜する地形になっている。そのため、重量は軽くとも数多くの礫が検出されたものと思われる。

斜面地において、礫の流動は重量の軽いものよりも、砂粒との摩擦が激しくなる重量の重い礫のほうが大きく移動するという（明治大学校地内遺跡調査団野口淳氏教示による）。

それぞれのグリッドを見てみると、Ｅグリッドから出土した礫の平均の法量よりも、地形が下降するＦグリッドの方が平均して法量が１cm程大きい。集石遺構が検出した周辺も同様にＢ８グリッドよりもＣ８グリッドから出土した礫の方が平均して２cm大きいとの結果が出た。Ｆ４グリッドは数は多いが、他のＦグリッドに比べて小礫ばかりが出土したので、調査区外となっているＦ４グリッドよりもさらに北側の土地に、礫群から移動した巨礫が留まっていると予想できる。小礫とは言え、隣のＥ４グリッドよりは平均して大きな礫が出土しており、他のグリッドと検出した様相に変わりはない。

また、Ｅ４グリッドのある標高96.500m付近からは、北西側に向かっても下降している。Ｄ３グリッドから出土する礫は、Ｅ４グリッドよりも平均して大きな礫が検出される。接合状況もＥ４グリッドとＦ４グリッド、Ｄ３グリッドの礫が接合する場合が多く、元々これらのグリッドの礫は１箇所に集中していたものと思われる。よって、Ｄ３やＦ４から出土する礫は、本来この場所にはなく、Ｅ４よりももっと山頂寄りから移動してきたものではないかと推察する。

２　礫群と立地環境

尾立第３遺跡から検出された礫群、集石遺構は、遺構範囲が１m前後の小規模な遺構ばかりである。遺跡の地形も山の中腹の傾斜地で人間の生活空間としては、適さないように思う。

しかし、わずか1,000㎡の調査面積の中に、12基もの遺構が確認された。石器も約250点ほど出土し、短期間であるかもしれないが、そこには人が存在していた痕跡が見える。遺跡のいたる所に巨礫が点在しており、調査に入る前からそれらの巨礫は、表土に露出していた。AT層まで掘削してもそれらの巨礫はしっかりと土層に填っており、全く動かなかった。おそらく旧石器時代からこれらの巨礫は存在し、旧石器時代の人々は、この巨礫に腰をかけながら石器製作に講じていたのではないだろうか。

わずか、数百メートル離れたところの、大師山の山裾から延びる台地に朝倉遺跡が所在する。朝倉遺跡は、主に旧石器時代から縄文時代早期までの遺構・遺物が確認された大規模な遺跡である。礫群や集石遺構の規模も、尾立第３遺跡の比ではなく、範囲が３m前後に広がる礫群も検出される。石器もチップが集中して出土した地点などがあり、石器製作場所として拠点的な空間であったことが窺える。

一方、尾立第３遺跡は、ある短い時期に朝倉遺跡の副次的空間として活用されたことが想定される。しかし、これを証明するためには、今後、朝倉遺跡との遺跡間接合を試みる必要があるだろう。

本遺跡は、地形は傾斜しているが、大師山の北側に舌状に延び、日当たりはかなり良好である。これまで、旧石器時代の人々は、台地に好んで生活していたと考えられてきた。だが、今回の調査で、地形が平坦であるか否かはそれほど拠点条件として優位ではないように思われた。むしろ、礫群・集石遺構を構築する上でも重要な、日照時間などの他の条件によって選択されていたのではないだろうか。

第Ⅳ章　おわりに

石器の遺跡間接合～おわりに代えて～

朝草原遺跡と尾立第３遺跡は、ほぼ同時に現地調査を開始し、整理作業も同時に進められた。それによって、より広い視野で遺跡の立地環境を捉えることができたように思う。

本遺跡では、整理作業として２遺跡から出土した石器の遺跡間接合を試みた。当初、遺跡の活動時期に若干の差異が見られたため、半信半疑のまま作業を進めた。予想通り、共に包含層から出土した石器の接合は見られなかった。しかし、朝草原遺跡Ａ区の表採剥片と尾立第３遺跡の包含層から出土した剥片が、数点接合した（第 49 図 128 ～ 130）。

次ページに掲載した図面が、遺跡間で接合した石器の全てである。３点接合し、石材は全て白色の流紋岩である。意識された剥離は３点ともに見られないため、接合資料としては決して重要視されるものではない。しかし、山の反対側という、一定の空間を隔てた別の場所から出土したことに関して言えば、その歴史的背景を推察するのに十分な資料となるだろう。

129 と 130 は３点の剥片が接合している。どちらも核となるような比較的大きい剥片が尾立第３遺跡から出土し、その剥片から剥離した小剥片が朝草原遺跡から出土した。

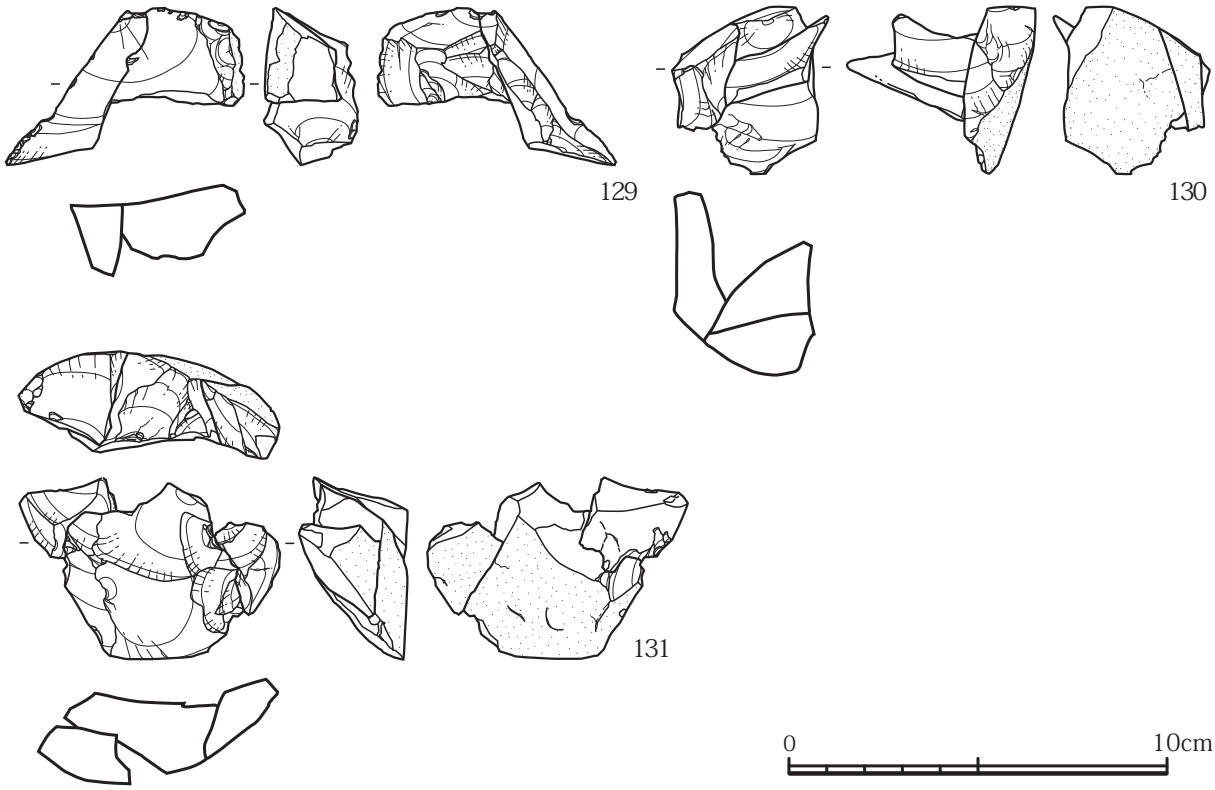
３点に共通して見られる特徴は、尾立第３遺跡から出土した剥片よりも朝草原遺跡Ａ区から出土した剥片の方が、全ての剥片において白色流紋岩の表面の色が黄色みかかっていた。これは、耕作土から出土したがために黒褐色土の色素が沈着し、変色したためと思われる。この他に、同じく朝草原遺跡Ａ区の耕作土から黄色みかかった白色流紋岩の剥片が表採されており、おそらく同一母岩の剥片である。

では、なぜ耕作土から出土するのだろうか。これがもし１点でも朝草原遺跡の包含層から出土していれば、石器製作時期における人間の行動と生活環境について述べることができたのかもしれないが、尾立第３遺跡は包含層から出土し、朝草原遺跡は耕作土から出土するというはっきりとした事実がある。また、接合したこれらの資料は、前述したとおり、意図的な剥離は見られない。そのため、わざわざ製作場所を移動して剥離作業を行っているとは考えづらい。このことから、朝草原遺跡の耕作土から出土した剥片も、本来は尾立第３遺跡内で剥離され、放置されていたものと思われる。

ここで思い出されるのが、尾立第３遺跡の堆積層の薄さである。表土を除去するとすぐに AT 上層の褐色土層が出現する。K-Ah も見られない。本調査除外区となった場所からは良好な K-Ah の堆積も見られたので、元は今回の調査区にも褐色土層よりも上層が堆積していたはずである。

ここからは全く推察の域だが、もしかしたら尾立第３遺跡の褐色土よりも上層の部分は、朝草原遺跡に運ばれたのではないだろうか。朝草原遺跡は、現在は耕作地であったため平坦に整地されている。しかし、調査を進めていくと、本調査除外区となった遺跡の中心地に向かって緩やかに傾斜することがわかった。この傾斜をなくし、耕作地として整地する時に、大師山の中腹に位置する尾立第３遺跡の土が使われたのではないだろうか。

朝草原遺跡がいつ頃耕作地として整地されたのか、詳しいことは不明である。今後、聞き取り調査などを行うことによって、より詳しい情報が得られるであろう。今回、旧石器時代の人間行動を知ることはできなかったが、考古学を通じて、近・現代の人々と、都農町の歴史と発展が垣間見えた。



第 49 図　遺跡間接合石器実測図　（S = 1/2）

第3表　尾立第3遺跡石器観察表

ﾚｲｱｳﾄ No.	出土 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
84	D6	II	175	白色流紋岩	角錐状石器	4.9	1.4	1.2	5.7	横長剥片素材。
85	D5	II	158	黒色流紋岩	角錐状石器	3.2	1.4	1.1	4.4	縦長に調整。背面は不整形。
86	B3	II	114	青色チャート	角錐状石器	2.7	1.4	1.1	2.1	先端部のみ。
87	D5	II	149	茶色流紋岩	ナイフ形石器	4.6	1.5	1	3.5	左側面は基部のみ加工。
88	D4	II	148	ホルンフェルス（砂岩系）	ナイフ形石器	9.7	4	1.9	58.1	左側面は基部のみ加工。先端部欠損。
89	C5	II	223	白色流紋岩	ナイフ形石器	3	1.2	0.8	1.8	横長剥片素材。
90	D8	II	222	茶色流紋岩	ナイフ形石器	2.1	1.6	1.2	2.1	横長剥片素材。先端部のみ。
91	B7	II	37	黒色流紋岩	ナイフ形石器	3.5	1.5	1	3.7	国府型。先端部欠損。
92	D7	II	89	黒色流紋岩	ナイフ形石器	2.8	1.5	1.1	2.4	先端部のみ。
93	C7	II	188	黒色流紋岩	ナイフ形石器	2.1	1.6	1.1	2.1	先端部のみ。
94	E6	II	244	白色流紋岩	ナイフ形石器	3.9	2.2	1.2	6.7	横長剥片素材。先端部欠損。
95	B2	II	107	白色流紋岩	ナイフ形石器	3.5	1.6	1.3	4.7	横長剥片素材。先端部欠損。
96	C8	II	221	黒色流紋岩	台形石器	3.2	1.6	1.2	4.2	
97	D5	II	75	黒色流紋岩	台形石器	2.2	1.5	0.8	1.4	
98	B7	II	33	ホルンフェルス（砂岩系）	スクレイパー	6.7	3.6	1.8	46.9	
98	E5	II	167	ホルンフェルス（砂岩系）	剥片	1.3	2.5	0.5	0.8	遺物 No.33 に接合。
99	B6	II	29	尾鈴山酸性岩類	二次加工剥片	2.1	1.3	0.8	1.9	左側面に微細な剥離。上部欠損か。
100	E4	II	144	尾鈴山酸性岩類	二次加工剥片	3.5	1.8	0.8	3.1	横長剥片素材。
101	C4	II	3	黒色チャート	細石刃核	2.7	2.9	1.7	13.2	船野型。背面は礫面。
102	B8	II	215	黒曜石	細石刃核	1	1.4	0.9	0.7	野岳・休場型。
103	C3	II	6	黒色チャート	細石刃核	2.9	2.4	3	20.1	船野型。背面は礫面。
104	C2	II	8	黒色チャート	細石刃核	2.9	2.6	3.1	21.5	船野型。
105	E8	II	94	玉髄	打製石鏃	2	1.4	0.5	0.7	抉りは浅く、二等辺三角形を呈する。
106	D9	II	96	緑色チャート	打製石鏃	2	1.9	0.5	0.7	抉りは浅く、正三角形を呈する。
107	D4	II	147	尾鈴山酸性岩類	敲石	10	5.2	3.4	230.7	頭部と底部に敲打痕が見られる。
108	C2	II	11	灰色流紋岩	剥片	2.8	3.3	1.2	7.9	横長剥片。
109	C3	II	227	青色チャート	剥片	2.1	2.2	1.2	3.8	横長剥片素材。
110	E6	II	78	茶色流紋岩	剥片	4	3.8	1.6	13.9	横長剥片。
111	C4	II	128	白色流紋岩	剥片	3.8	4.3	0.8	16.2	横長剥片。底部からの微細な調整あり。
112	B8	II	214	茶色流紋岩	剥片	6.5	3.7	1.1	28.4	翼状剥片。側面は礫面。
113	D7	II	198	黒色流紋岩	剥片	5.6	4.4	1.5	28.8	縦長剥片。底面は礫面。
114	D4	II	135	茶色流紋岩	剥片	6.6	3.1	1.2	17.1	縦長剥片。
115	D9	II	98	黒色流紋岩	石核	5.6	5.5	2.6	85.6	頭部調整あり。縦長剥片の剥離痕。背面は礫面。
116	C5	II	156	黒色流紋岩	石核	4.6	5.6	4.7	146.6	頭部調整あり。背面と底面は礫面。
117	E6	II	181	灰色流紋岩	石核	3.6	5.5	3.3	54.9	頭部調整あり。背面は礫面。
118	E6	II	182	茶色流紋岩	石核	3.6	5.6	4.8	124.1	頭部調整あり。四側面から剥離。底面は礫面。
119	D7	II	192	白色流紋岩	石核	3.4	3.2	2.5	24	
120	D6	II	86	青色チャート	石核	3.4	8.2	2.1	44.9	瀬戸内技法の石核。背面は礫面。
121	D6	II	84	青色チャート	石核	3.2	4.4	1.8	23.6	瀬戸内技法の石核。
122	D8	II	99	白色流紋岩	石核	3.1	7	2.9	45.4	瀬戸内技法の石核。背面は礫面。
123	D7	II	87	尾鈴山酸性岩類	石核	3.8	6.9	3.1	81.3	
124	D5	II	153	チャート（珪質頁岩系）	石核	5.3	3.5	2.6	59.8	頭部調整あり。縦長剥片の剥離痕。背面は礫面。
125	D6	II	172	尾鈴山酸性岩類	石核	5.3	6.2	3.3	102.6	背面は礫面。
126	B2	II	SI2	尾鈴山酸性岩類	石核	11.4	10.9	4.3	704.7	側縁から剥離。SI2 の構成礫。
127	E9	II	95	尾鈴山酸性岩類	剥片	4.6	2.5	1.1	13.8	縦長剥片素材。
127	D9	II	97	尾鈴山酸性岩類	剥片	4.1	2.5	1.8	11.6	縦長剥片素材。
127	B8	II	208	尾鈴山酸性岩類	石核	5.3	5.3	3.1	113	上面と底面からの剥離。背面は礫面。
128	D3	II	124	頁岩	剥片	4.5	1.7	2.6	23.4	背面は礫面。
128	E3	II	241	頁岩	石核	4.3	5.1	3.4	84.1	頭部調整あり。背面は礫面。
129	C5	II	152	白色流紋岩	剥片	5.3	2.5	2	14.5	朝草原Ａ区表採と接合。
130	E4	II	62	白色流紋岩	石核	4.5	3.2	1.5	21.5	朝草原Ａ区表採と接合。
131	D7	II	190	白色流紋岩	剥片	2.5	3	1.8	11.1	朝草原Ａ区表採と接合。
131	D7	II	199	白色流紋岩	石核	5.7	4.6	2.2	48.4	朝草原Ａ区表採と接合。

ﾚｲｱｳﾄ No.	出土 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
	B4	II	1	ホルンフェルス（灰色）	剥片	1.6	2	0.5	1.6	小剥片。上面打面は礫面。
	B4	II	2	ホルンフェルス（灰色）	剥片	2.1	1.3	0.3	0.7	小剥片。
	C3	II	4	ホルンフェルス（黄色）	剥片	1.9	2	0.5	2.2	縦長剥片素材。
	C3	II	5	黒色流紋岩	剥片	3.3	2.4	0.8	6.2	縦長剥片素材。
	C3	II	7	灰色流紋岩	剥片	2.4	1.2	0.7	1.1	
	C2	II	9	灰色流紋岩	剥片	4.3	3.2	0.8	13.3	縦長剥片素材。左側面に礫面を残す。
	C2	II	10	白色流紋岩	剥片	2.3	1.5	0.5	1.2	
	C2	II	12	黒色流紋岩	剥片	6.9	3	2	27.1	縦長剥片素材。243 と接合。背面は礫面。
	C2	II	13	白色流紋岩	剥片	1.9	3.5	1.4	9.3	遺物 No,225 と接合。
	B2	II	14	灰色流紋岩	剥片	1.6	1.5	0.6	1.1	小剥片。
	B3	II	15	ホルンフェルス（灰色）	剥片	1.7	2.5	0.5	1.5	小剥片。遺物 No.16,47 と接合。
	B3	II	16	ホルンフェルス（灰色）	石核	5.3	4.5	2	41.6	背面は礫面。遺物 No.15,47 と接合。
	B6	II	17							礫
	B6	II	18	黒色流紋岩	剥片	4.3	4.2	1.5	20	背面に礫面を残す。
	B6	II	19	ホルンフェルス（砂岩系）	剥片	2.6	2	0.9	3.6	縦長剥片素材。
	B6	II	20	灰色流紋岩	剥片	5.4	5.3	1.9	46.3	背面に礫面を残す。
	B5	II	21	白色流紋岩	剥片	4.3	4.9	1.5	26.5	背面に礫面を残す。
	B6	II	22	白色流紋岩	剥片	3.2	1.5	1	4.5	縦長剥片。正面下部に細石刃の剥離痕あり。
	C6	II	23	黒色流紋岩	剥片	2	5.1	1.3	6.1	横長剥片素材。
	C5	II	24	白色流紋岩	剥片	3.1	2.3	0.8	3.7	縦長剥片素材。
	C5	II	25	黒色チャート	剥片	2.1	1	0.3	0.8	縦長剥片素材。上面打面は礫面。
	C5	II	26	茶色チャート	剥片	1.9	1.1	1	1.8	
	C6	II	27	ホルンフェルス（灰色）	剥片	5.6	3.7	1	19.3	左側面は礫面。
	B6	II	28	チャート（珪質頁岩系）	剥片	4.3	4.3	1.5	24.7	右側面は礫面。
	B7	II	30							欠番
	B7	II	31	頁岩		1.3	1.1	0.2	0.3	小剥片。
	B7	II	32	白色流紋岩	剥片	3.9	2	1	6.9	縦長剥片。
	B7	II	34	白色流紋岩	剥片	2.7	3	1	6.7	背面に礫面を残す。
	B7	II	35	白色流紋岩	剥片	4.8	5.3	2	44.3	背面に礫面を残す。
	B7	II	36	ホルンフェルス（灰色）	剥片	4.1	4.8	1	16.1	上面打面は礫面。
			38							礫
	B7	II	39	黒色流紋岩	剥片	4.4	3.2	1	12.1	縦長剥片素材。
	B7	II	40	頁岩	剥片	2.1	1.4	0.3	1.6	背面に礫面を残す。
	B7	II	41	砂岩	石核	5.2	5.6	1.6	47	縦長剥片の剥離痕。
	B8	II	42	ホルンフェルス（灰色）	剥片	1.4	1.9	0.5	0.9	小剥片。
	B8	II	43	尾鈴山酸性岩類	剥片	5.4	3	1.3	12.7	縦長剥片素材。
	B8	II	44	頁岩		3.5	1.8	0.8	4.3	縦長剥片。
	C8	II	45	茶色流紋岩		4.3	2.9	1.5	15.1	左側面は礫面。
	C8	II	46	茶色流紋岩		2.2	3	0.5	3.3	
	C7	II	47	ホルンフェルス（灰色）	剥片	2.7	3.1	0.9	5.9	小剥片。遺物 No.15,16 と接合。
	C7	II	48	ホルンフェルス（砂岩系）	剥片	7.2	4.2	1.5	38.7	縦長剥片素材。
	C7	II	49	灰色流紋岩	剥片	2.1	2	0.9	2.6	
	C6	II	50	黒色チャート	剥片	2.4	1.9	0.8	2.6	上面打面は礫面。
	B5	II	51	頁岩		2.6	2.5	0.6	2.6	縦長剥片。正面は礫面。
	D2	II	52	頁岩		3.5	3.4	1	11.3	右側面は礫面。
	E3	II	53							礫
	E3	II	54	ホルンフェルス（泥質岩系）	剥片	8.1	4.1	2.3	47.1	縦長剥片素材。
	E3	II	55	白色流紋岩	剥片	4.3	6	1.6	28.4	横長剥片素材。
	D3	II	56	白色流紋岩	剥片	3.2	1.4	1	3.7	
	D3	II	57	白色流紋岩	剥片	1.7	3	0.5	2.2	横長剥片素材。
	D3	II	58	白色流紋岩	剥片	3.9	4	1.3	16.1	遺物 No.60 と接合。背面は礫面。
	D3	II	59	白色流紋岩	剥片	1.2	3.1	0.5	1.5	横長剥片。

ﾚｲｱｳﾄ No.	出土 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
	D4	II	60	白色流紋岩	剥片	5.2	3	1.8	20.4	遺物 No.58 と接合。背面は礫面。
	E3	II	61	黒色流紋岩	剥片	3.7	5.6	1.1	21.1	横長剥片素材。表面の 2/3 は白色の斑点。
	D4	II	63	頁岩	剥片	2.4	3	0.7	3.1	背面は礫面。
	D4	II	64							欠番
	E4	II	65	流紋岩（尾鈴山酸性岩系）	剥片	4.2	4.2	1.5	17.4	上面は礫面。
	E4	II	66	白色流紋岩	剥片	4.5	3.4	0.9	15.7	縦長剥片素材。背面は礫面。
	F4	II	67	ホルンフェルス（泥質岩系）	剥片	3.5	4	1	13.3	横長剥片素材。
	F4	II	68	頁岩	剥片	2.2	1.4	0.9	2.4	
	F3	II	69	黒色チャート		2.1	3.8	1	8.9	横長剥片素材。
	F4	II	70	白色流紋岩	剥片	2.5	1.6	1	4.7	
	F5	II	71	黒色流紋岩	剥片	6.7	4.9	1.5	37.3	縦長剥片。背面は礫面。
	E5	II	72	灰色頁岩	剥片	2.1	2.4	0.6	3.3	
	E5	II	73	青色チャート	剥片	4.2	3.4	2	24.2	遺物 No.184 と接合。背面に礫面を残す。
	D5	II	74	灰色流紋岩	剥片	4.3	2.7	1.2	11.4	縦長剥片素材。背面下部は礫面。
	D5	II	76	ホルンフェルス（黄色）	剥片	5.4	5	1.7	38.4	背面に礫面を残す。
	D5	II	77	黒色流紋岩	石核	4.8	4.8	2.3	30	横長剥片。表採資料と接合
	F6	II	79	白色流紋岩	剥片	3.2	4.4	1.1	10.9	横長剥片素材。
	F6	II	80	茶色流紋岩	石核	5.8	4.4	2	57	頭部調整あり。上面からの剥離。
	E6	II	81	ホルンフェルス（黄色）	剥片	7	4.2	1.5	31.8	縦長剥片素材。
	E6	II	82	茶色流紋岩	剥片	3.8	4	1.2	18.8	横長剥片。背面に礫面を残す。底面からの調整あり。
	E6	II	83	黒色流紋岩		2.1	1.3	1.3	2.8	縦長剥片素材。
	D6	II	85	黒色流紋岩	剥片	2.3	2.3	0.9	3.6	左側面は礫面。
	D7	II	88	黒色流紋岩	剥片	3.5	3.4	1.2	9.6	表面の 3/2 以上が白色の斑点。
	D7	II	90	ホルンフェルス（砂岩系）	石核	2.8	3.8	2	21.3	
	E8	II	91	黒色チャート	剥片	1.5	1	0.7	1	
	E8	II	92	黒色流紋岩	剥片	2.7	1.8	1	3.5	縦長剥片素材。
	E8	II	93	頁岩	剥片	2.4	2.4	0.8	3.2	
	D8	II	100	青色チャート	剥片	1.8	1.9	1.1	2.8	
	E9	II	101	ホルンフェルス（灰色）	剥片	5.3	4.7	1.3	20.9	縦長剥片素材。
	B2	II	102	茶色流紋岩		2.4	3.6	1.1	8.4	横長剥片。背面は礫面。
	B2	II	103	黒色流紋岩	剥片	1.8	3.5	1.2	3	頭部打面は礫面。微細な調整あり。
	B2	II	104	白色流紋岩	剥片	2.2	2.3	0.7	3.6	
	B2	II	106	灰色流紋岩	剥片	0.9	1	0.3	0.1	調整剥片。
	B2	II	108	黒色流紋岩	剥片	1.1	1	0.4	0.3	調整剥片。
	B3	II	109	泥岩	剥片	2.8	1.4	1	4.1	
	B3	II	110	白色流紋岩	剥片	1.6	1.4	0.6	0.9	
	B3	II	111	白色流紋岩	剥片	0.9	2.3	0.7	1.2	横長剥片素材。
	B3	II	112	黒色チャート	剥片	1.2	0.7	0.5	0.3	小剥片。
	B3	II	113	頁岩	剥片	3	3.3	0.9	7.9	右側面に礫面を残す。
	B3	II	115	白色流紋岩	剥片	1.4	0.9	0.4	0.2	調整剥片。
	C2	II	116	ホルンフェルス（泥質岩系）	石核	4.5	5.8	2.2	44.6	縦長剥片の剥離痕。
	C3	II	117	黒色流紋岩	剥片	3.2	2.3	1.2	6.6	縦長剥片素材。
	C3	II	118	灰色流紋岩	剥片	2	2.9	1.3	4.9	横長剥片素材。
	C3	II	119	流紋岩（尾鈴山酸性岩類系）	剥片	1.7	1.6	1	1.3	
	C3	II	120	頁岩		2.6	1.4	0.7	1.9	縦長剥片素材。
	C2	II	121							礫
	D3	II	122	灰色流紋岩	剥片	3.3	4.3	1.3	20.4	上面打面は礫面。
	D3	II	123	尾鈴山酸性岩類	剥片	6.3	4.4	2	50.6	縦長剥片素材。背面は礫面を残す。
	D3	II	125	流紋岩（尾鈴山酸性岩類系）	剥片	2.9	3.2	1.1	10.6	
	D3	II	126							礫
	C3	II	127	白色流紋岩	剥片	3.3	2.9	0.8	4.7	
	C4	II	129	黒色流紋岩	剥片	2.9	3	1	7.3	右側面は礫面。
	C4	II	130	黒色流紋岩	剥片	2.4	2.1	0.7	2.8	横長剥片素材。

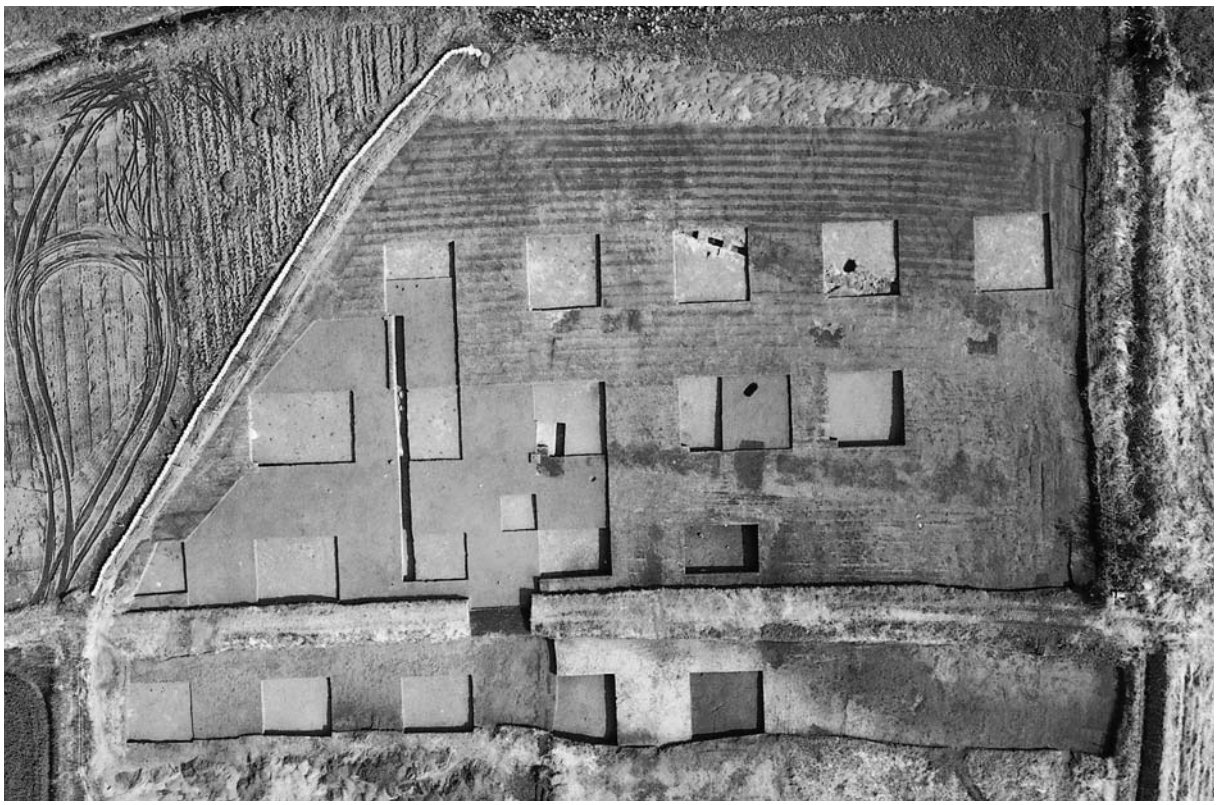
ﾚｲｱｳﾄ No.	出土ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
	C4	II	131	白色流紋岩	剥片	2.9	3.5	0.8	7.3	横長剥片素材。
	C4	II	132							礫
	C4	II	133	白色流紋岩	剥片	3.5	5.4	1.9	27.2	横長剥片素材。背面は礫面。
	D4	II	134	流紋岩（尾鈴山酸性岩類系）	剥片	2.6	1.5	1	3.2	
	D4	II	136	ホルンフェルス（泥質岩系）	剥片	3.2	3.5	0.7	8.8	
	D4	II	137	灰色流紋岩	剥片	2.3	1.6	1.1	3.5	縦長剥片素材。
	D4	II	138	流紋岩（尾鈴山酸性岩類系）	剥片	2.6	2.2	1	3.6	
	D4	II	139	ホルンフェルス（灰色）	剥片	4.7	3	0.9	10.4	縦長剥片素材。
	D4	II	140	白色流紋岩	剥片	4.1	2.5	0.9	7.9	縦長剥片素材。
	D4	II	141	ホルンフェルス（泥質岩系）	剥片	2.5	4.5	1	7.4	横長剥片素材。
	E4	II	142	黒色流紋岩	剥片	3.3	3.5	1.2	10.6	背面に礫面を残す。
	E4	II	143	白色流紋岩	剥片	3.1	3.2	1.5	11.6	
	E4	II	145	泥岩	剥片	4	3.3	1.8	18.1	右側面に礫面を残す。
	E4	II	146							礫
	D5	II	150	黒色流紋岩	剥片	2	1.2	0.4	0.7	縦長剥片素材。
	C4	II	151	白色流紋岩	剥片	6.4	4	2	48.4	縦長剥片素材。背面底部にわずかに礫面を残す。
	C5	II	154	黒色流紋岩	剥片	2.1	2.3	0.5	2.3	
	C5	II	155	灰色流紋岩	剥片	1.9	1.5	0.5	1.3	縦長剥片素材。
	C5	II	157	白色流紋岩	剥片	3	31.8	1.2	5.5	背面に礫面を残す。
	D5	II	159	白色流紋岩	剥片	1.6	1.7	0.5	0.9	
	E5	II	160	尾鈴山酸性岩類	剥片	6.6	4.8	2.1	42.6	縦長剥片素材。
	E5	II	161	尾鈴山酸性岩類	石核	6.9	8.1	3.4	96.5	
	E5	II	162	尾鈴山酸性岩類	石核	5.9	3	2.7	45	縦長剥片の剥離痕。
	E5	II	163	黒色流紋岩	剥片	3.8	2.5	1.3	12.2	縦長剥片素材。
	E5	II	164	尾鈴山酸性岩類	剥片	4.5	1.8	1.6	10.8	縦長剥片素材。
	E5	II	165	白色流紋岩	剥片	3.5	2.9	0.9	7	縦長剥片素材。
	F5	II	166	ホルンフェルス（泥質岩系）	剥片	3.6	2	1.9	7.5	縦長剥片素材。
	E5	II	168	黒色流紋岩	剥片	2.3	2.6	0.8	2.9	
	E5	II	169	青色チャート	剥片	2.7	3	1	7.1	背面は礫面。
	D5	II	170	白色流紋岩	剥片	7	4.1	2.1	37.1	
	D6	II	171	白色流紋岩	石核	5.9	5	4.9	79.5	背面に礫面を残す。
	D6	II	173	黒色流紋岩	剥片	4.1	2.4	1.3	10.8	縦長剥片素材。側面に微細な剥離。
	C6	II	174	黒色流紋岩	石核	3.8	3.4	2.9	30.6	表面に白色の斑点。
	E6	II	176	黒色流紋岩	剥片	2.6	2.3	0.7	2.9	縦長剥片素材。
	E6	II	177	頁岩		3.6	2.3	0.7	4.1	
	E6	II	178	茶色流紋岩	剥片	1.6	1.5	0.9	1.8	
	E6	II	179	黒色流紋岩	剥片	2.7	2.3	0.8	2.6	
	E6	II	180	ホルンフェルス（砂岩系）	石核	5.1	6.8	2	72.4	瀬戸内技法による剥離。
	E6	II	183	黒色流紋岩	剥片	3.3	2.5	0.7	6.8	縦長剥片素材。右側面は礫面。
	C6	II	184	青色チャート	剥片	4.1	3.7	1.5	16.3	遺物 No.73 と接合。背面に礫面を残す。
	C7	II	185	砂岩	剥片	5.6	3.9	1.9	35.8	縦長剥片素材。
	C7	II	186	黒色流紋岩	剥片	1.8	1.7	0.7	1.9	
	D7	II	187	ホルンフェルス（砂岩系）	石核	4	4.1	4.2	96.4	
	D7	II	189	尾鈴山酸性岩類	石核	6.5	5.8	2.4	80.2	
	D7	II	191	ホルンフェルス（灰色）	剥片	2.7	3.4	0.8	4.8	横長剥片素材。
	D7	II	193	白色流紋岩	剥片	2.3	1.2	0.5	1.2	縦長剥片素材。
	D7	II	194	黒色流紋岩	剥片	2.5	2	1	3.9	遺物 No.219 と接合。
	D7	II	195	茶色流紋岩	剥片	4.7	2	0.7	5.3	縦長剥片素材。背面に礫面を残す。
	D7	II	196	黒色チャート	剥片	1.1	1.5	0.3	0.5	
	D7	II	197	灰色流紋岩	剥片	2.2	0.9	0.5	0.4	縦長剥片素材。
	D7	II	200	ホルンフェルス（灰色）	剥片	6	2.7	1.7	19.4	背面に礫面を残す。
	E8	II	201	黒色流紋岩	剥片	1.6	2.3	0.4	0.9	
	E8	II	202							礫
	E7	II	203	茶色流紋岩	剥片	1.6	2.7	0.6	2.7	横長剥片素材。
	E8	II	204							礫

ﾚｲｱｳﾄ No.	出土 ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層	遺物 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
	D8	II	205	ホルンフェルス（灰色）	剥片	2.5	2.6	1	4.4	
	D8	II	206	ホルンフェルス（黄色）		3.3	6.8	2	31.4	横長剥片素材。
	A9	II	207	ホルンフェルス（黄色）	剥片	4.9	3.3	1.6	24.9	縦長剥片素材。遺物 No.209 と接合。背面は礫面。
	B8	II	209	ホルンフェルス（黄色）	剥片	3.7	1.3	0.8	3.2	縦長剥片素材。遺物 No.207 と接合。背面は礫面。
	B8	II	210	黒色流紋岩	石核	4.8	4.7	2.1	43	背面は礫面。
	B8	II	211	砂岩	剥片	4	2.6	1.2	9.9	縦長剥片素材。
	B8	II	212	白色流紋岩	剥片	1.3	1.6	0.5	0.9	
	B8	II	213	チャート（珪質頁岩系）	剥片	3.5	6.4	2	42.2	横長剥片素材。
	A8	II	216	黒色流紋岩	剥片	1	1	0.2	0.2	調整剥片。
	B8	II	217	灰色流紋岩	剥片	2.4	1.1	0.5	1.2	縦長剥片素材。
	C7	II	218	ホルンフェルス（黄色）	剥片	1.4	1.5	0.3	0.5	小剥片。
	C7	II	219	黒色流紋岩	剥片	2.7	2.5	0.6	3.2	194 と接合。
	C7	II	220	黒色流紋岩	石核	4.5	3.4	1.1	18.1	頭部打面は礫面。縦長剥片の剥離痕。
	C4	II	224	頁岩	剥片	2.4	1.7	0.5	1.7	
	B4	II	225	白色流紋岩	剥片	5.6	6	2.5	84.8	遺物 No.13 と接合。13 に打点あり。背面底部に礫面を残す。
	D3	II	226	黒色流紋岩	剥片	3	4.2	1.3	15.4	横長剥片素材。右側面は礫面。
	C2	II	228	白色流紋岩	剥片	2	2.7	0.5	3	横長剥片素材。
	D2	II	229	尾鈴山酸性岩類	剥片	3.9	4.7	2.3	30	
	D2	II	230							礫
	D2	II	231	茶色流紋岩	剥片	3.1	1.9	1	4.4	縦長剥片素材。右側面は礫面。
	F3	II	232	白色流紋岩	剥片	2.2	2.7	0.5	2.6	横長剥片素材。
	F6	II	233	チャート（珪質頁岩系）		1.9	2.5	0.6	2.7	
	B7	II	234	白色流紋岩	剥片	1.8	2.4	0.8	1.8	横長剥片素材。
	B6	II	235	黒色流紋岩	剥片	5.2	2.4	0.5	6.8	縦長剥片素材。
	C2	II	236	灰色流紋岩	剥片	0.9	1.7	0.4	0.5	調整剥片。
	E6	II	237	尾鈴山酸性岩類	剥片	3.3	1.7	0.6	2.7	
	C2	II	238	茶色流紋岩	剥片	4.9	3.5	1	16.6	縦長剥片。上面は礫面。
	D4	II	239	青色チャート	剥片	1	1.4	0.4	0.5	小剥片。
	D4	II	240	黒色流紋岩	剥片	0.9	0.7	0.4	0.2	調整剥片。
	D6	II	242	白色流紋岩	剥片	2.2	3.4	0.8	4.1	横長剥片素材。
	D6	II	243	黒色流紋岩	剥片	5.4	4.3	1.3	27.6	縦長剥片素材。遺物 No.12 と接合。背面は礫面。
	D5	II	245	黒色流紋岩	剥片	1.7	2.1	0.7	2.5	横長剥片素材。背面は礫面を残す。
	F7	II	246	ホルンフェルス（泥質岩系）	剥片	5.2	3.8	1	14.7	
	C7	II	247	チャート（珪質頁岩系）	剥片	3.1	4	1.6	13	

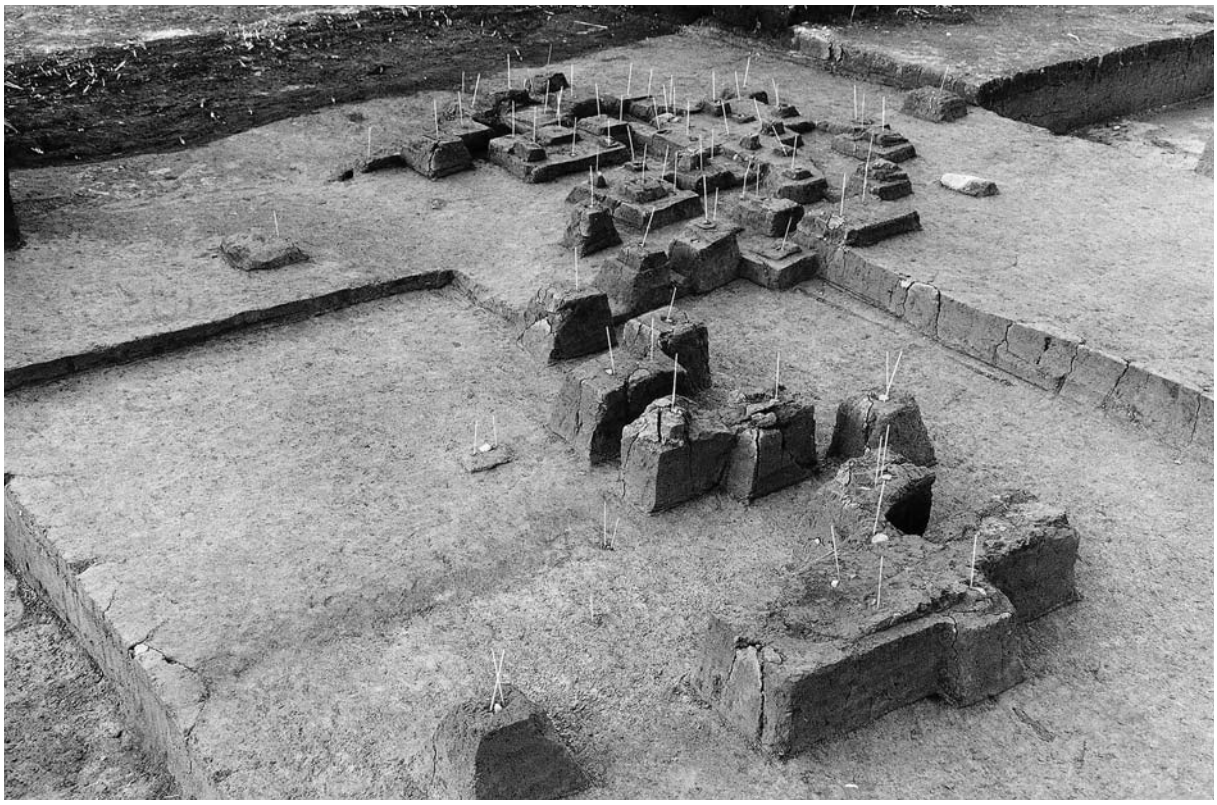
図　版

図版　1

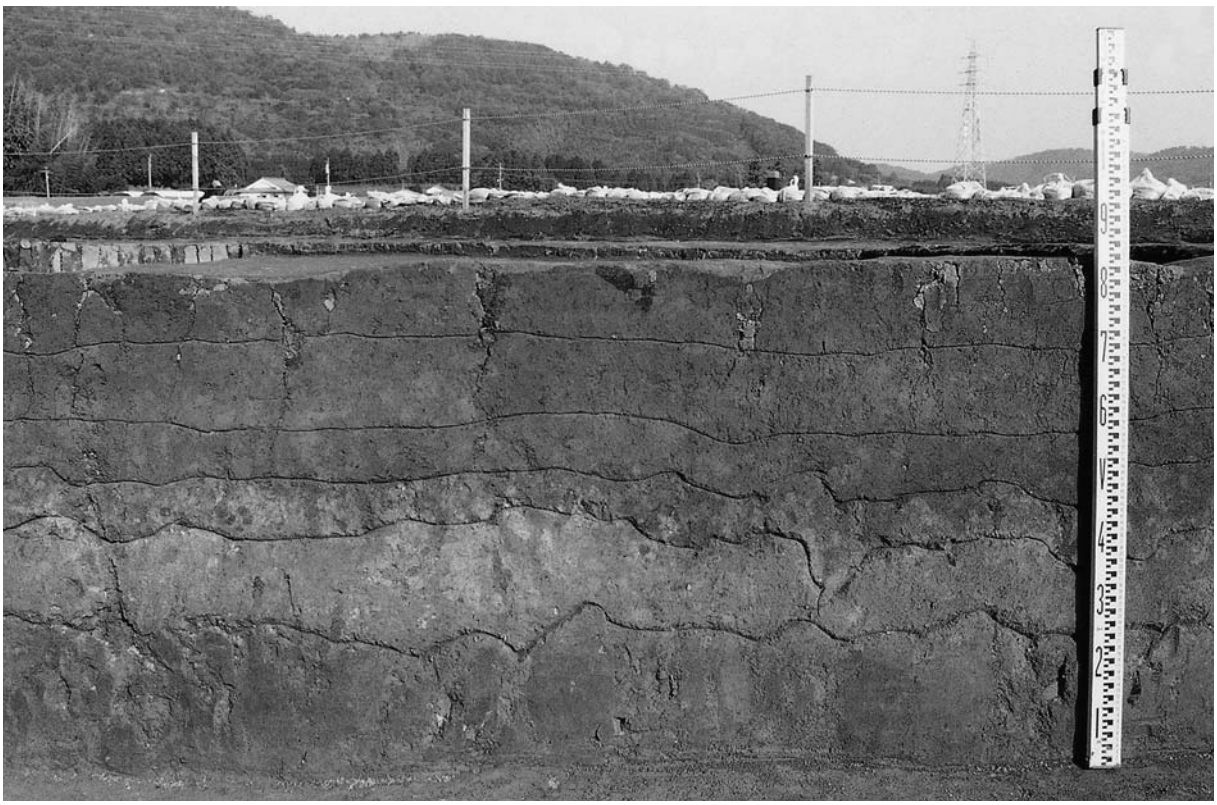
朝草原遺跡俯瞰（北から）



朝草原遺跡A区遺跡俯瞰（西から）

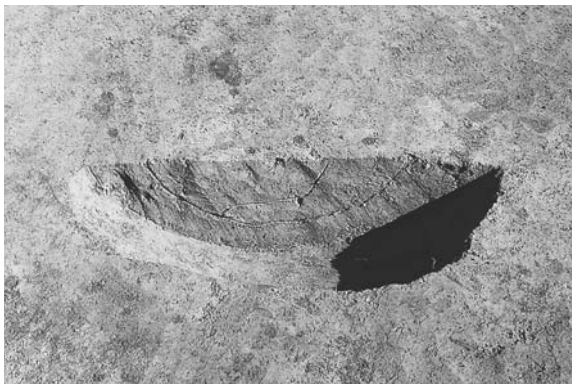


朝草原遺跡A区Ⅳ層無文土器出土状況（南から）

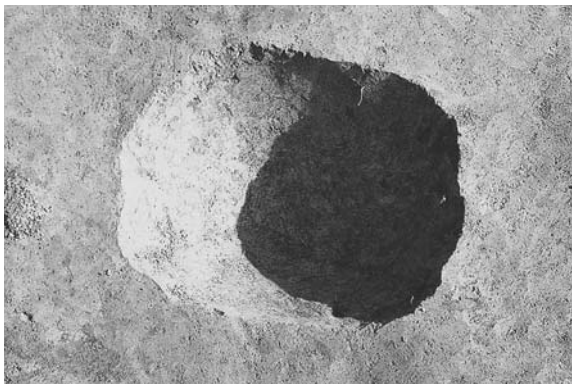


朝草原遺跡A区土層断面（南から）

図版　3

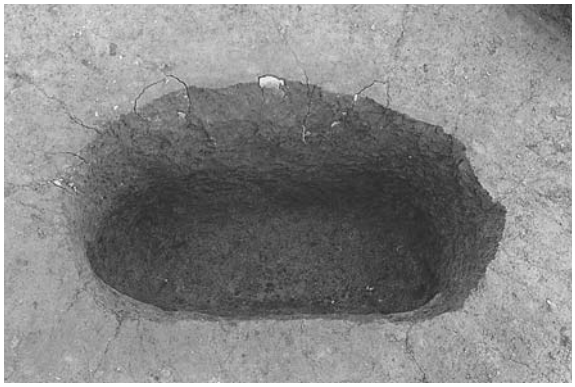


朝草原遺跡A区SC 1断面（西から）

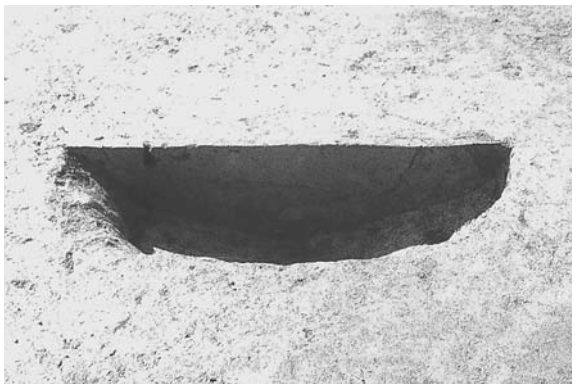


朝草原遺跡A区SC 1完掘（西から）

朝草原遺跡A区SC 2断面（西から）

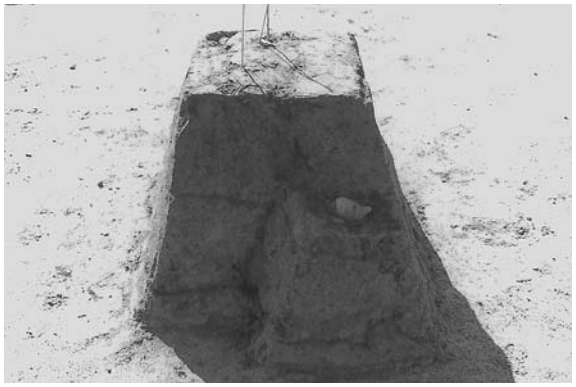


朝草原遺跡A区遺跡SC 2完掘（西から）

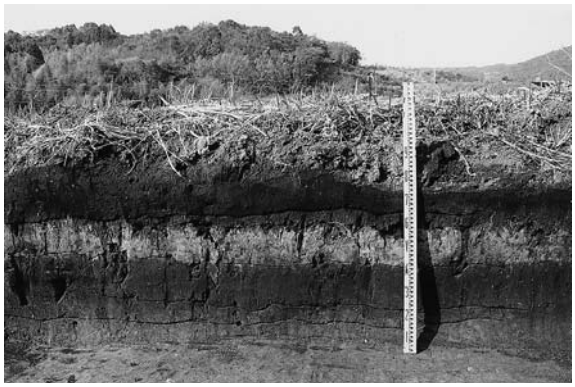


朝草原遺跡A区遺跡SC 3断面（西から）

朝草原遺跡A区遺跡SC 3（西から）

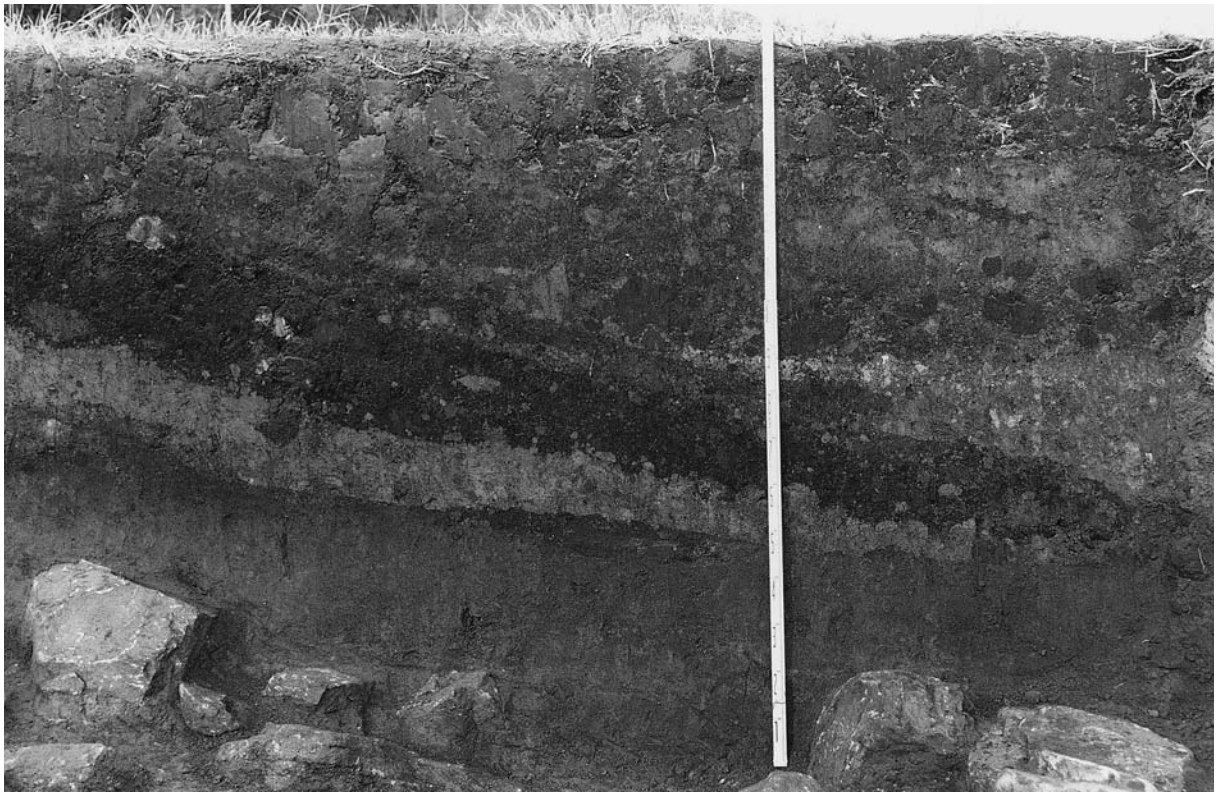


朝草原遺跡A区V層無文土器出土状況（北から）



朝草原遺跡A区K3グリッド土層断面（南から）

朝草原遺跡Ｂ区・Ｃ区俯瞰



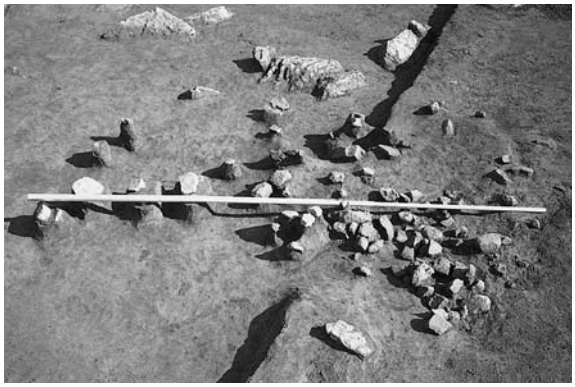
朝草原遺跡Ｂ区北壁土層断面

図版　5

朝草原遺跡Ｂ区ＳＩ４（西から）

朝草原遺跡Ｂ区ＳＩ５（西から）

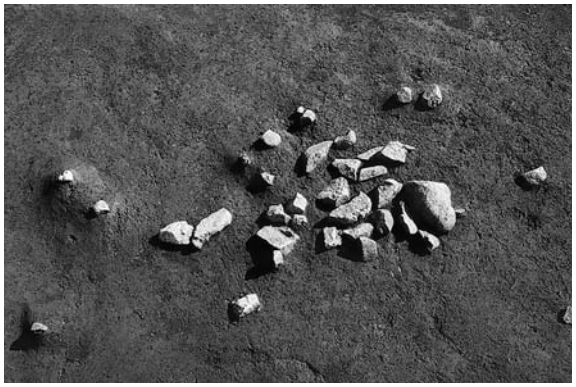
朝草原遺跡Ｃ区ＳＩ１（南から）



朝草原遺跡Ｂ区ＳＩ５北側散礫（西から）

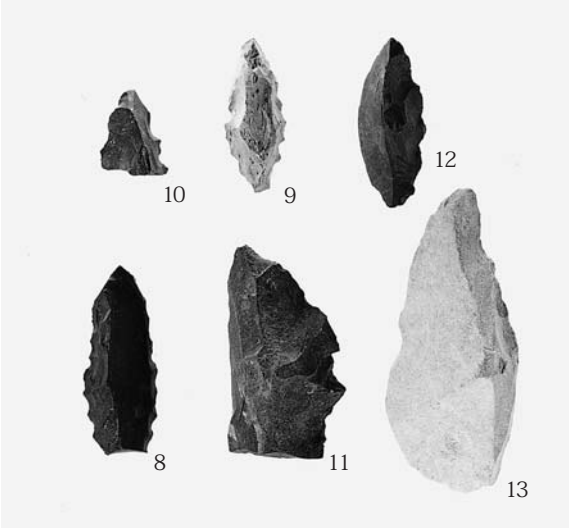
朝草原遺跡Ｃ区ＳＩ１断面（南から）

朝草原遺跡Ｃ区ＳＩ１完掘（南から）

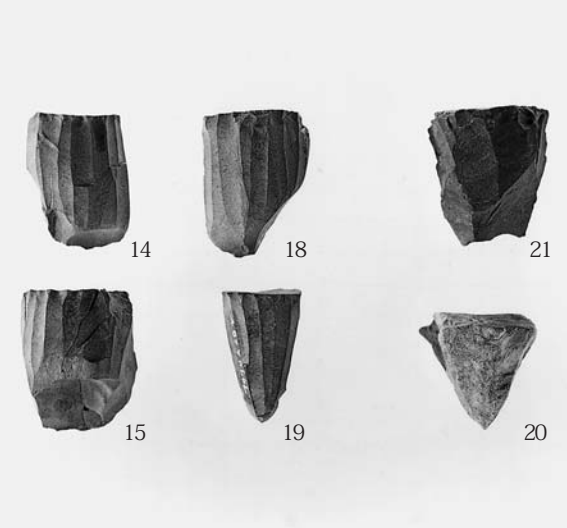


朝草原遺跡Ｃ区ＳＩ2（東南から）

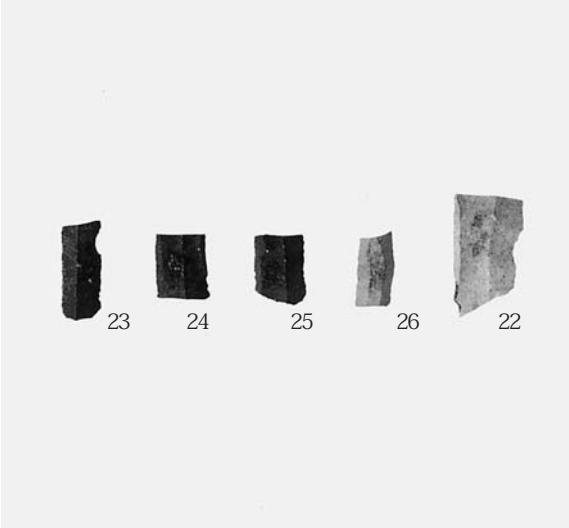
朝草原遺跡Ｃ区ＳＩ３（東南から）



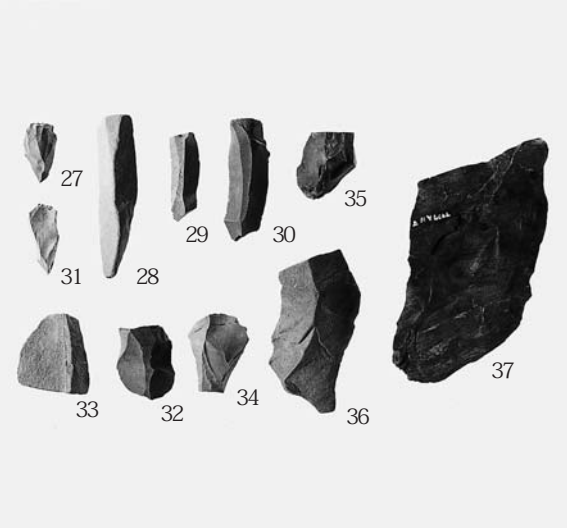
A区出土角錐状石器、ナイフ形石器、



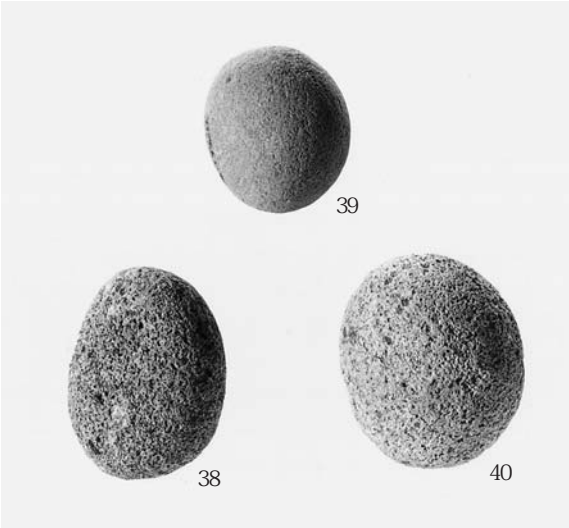
A区出土細石刃核



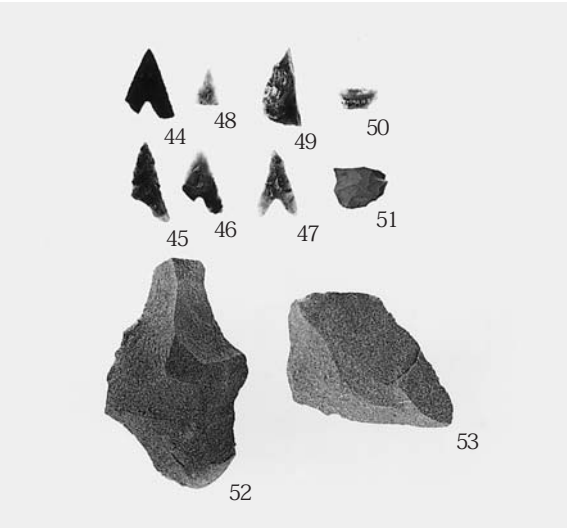
A区出土細石刃



A区出土剥片、石核

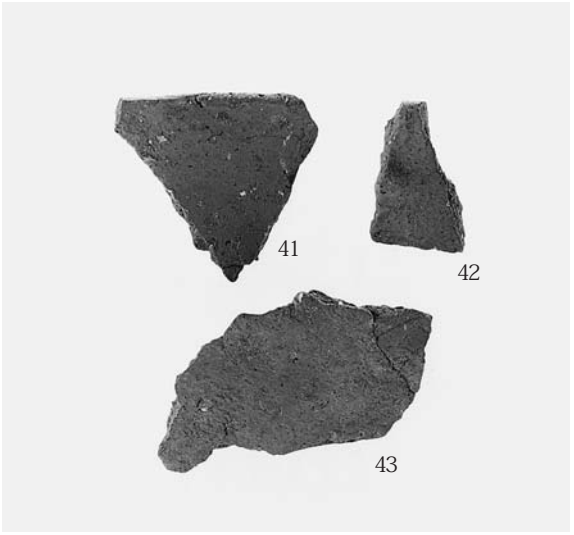


A区出土石器（石鏃、石鏃の未製品、剥片）

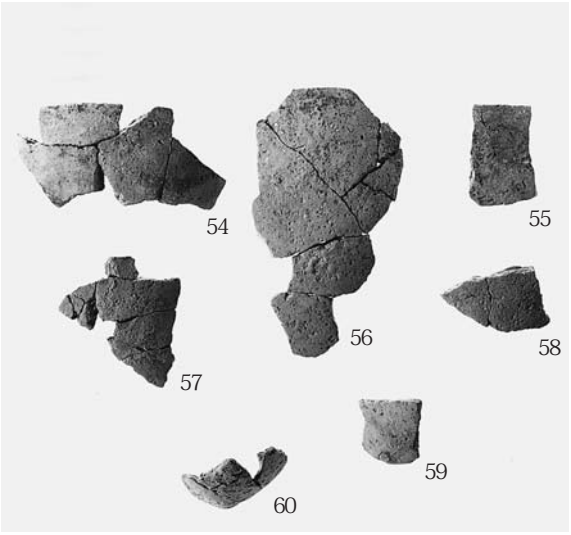


A区出土敲石

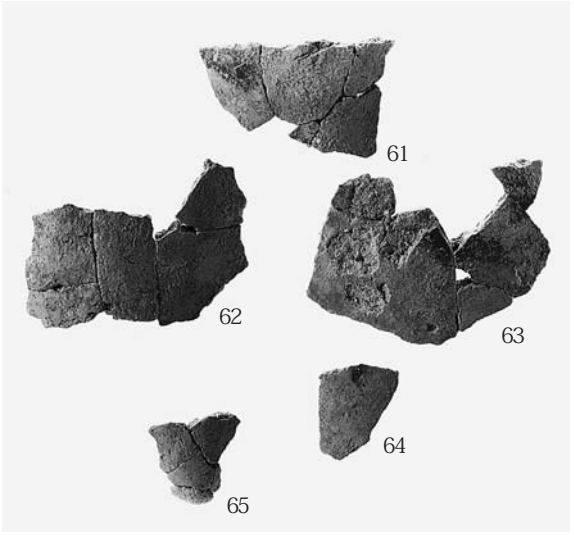
図版　7



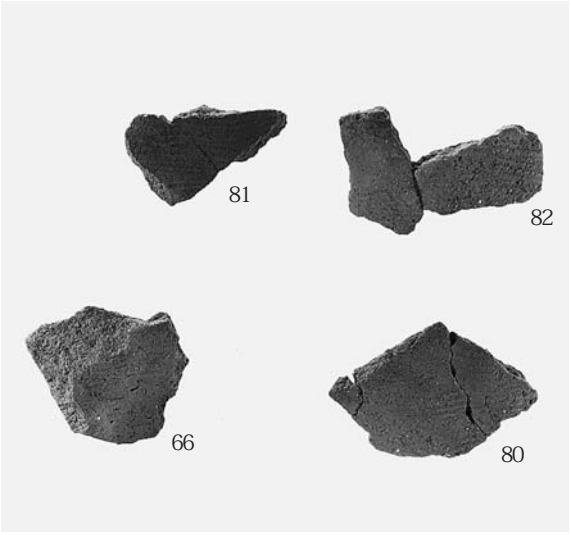
A区V層出土土器



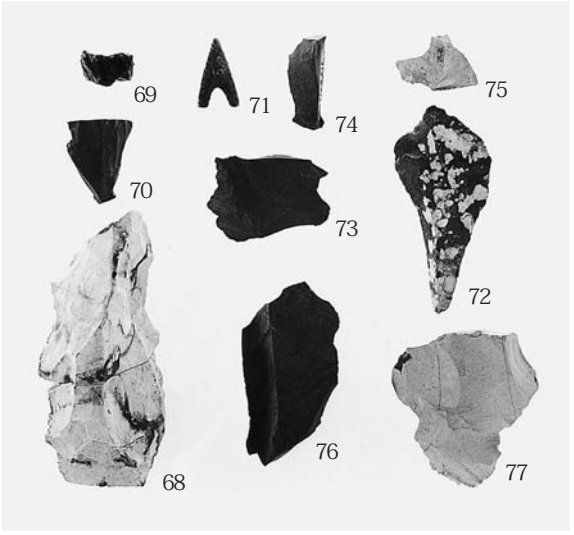
A区Ⅳ層出土土器



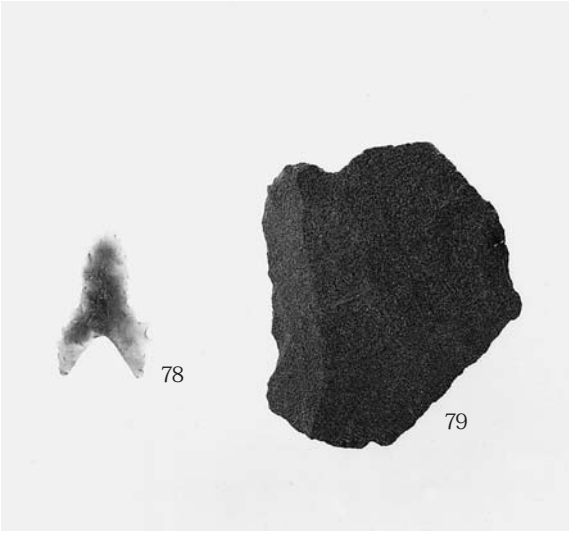
A区Ⅳ層出土土器



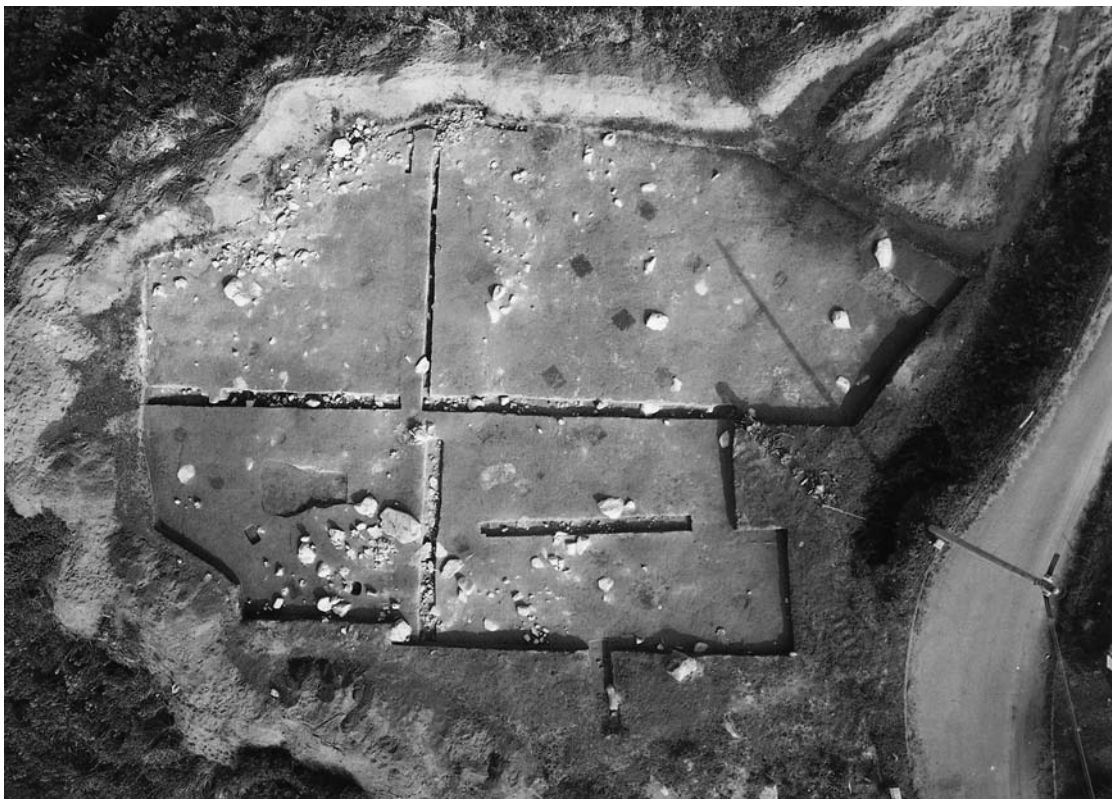
A区V層出土土器、C区Ⅳ層出土土器



B区出土石器
（角錐状石器、細石刃核、石鏃、石核、剥片）



C区出土石器

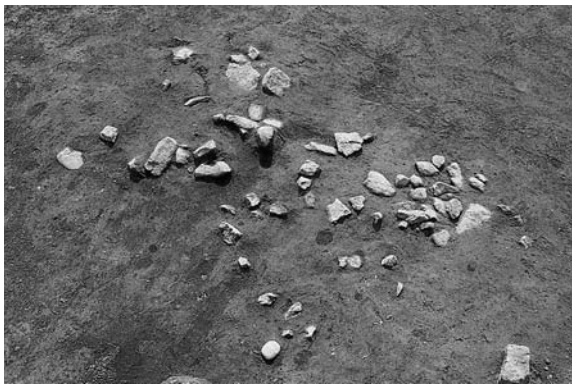


尾立第３遺跡俯瞰

尾立第３遺跡北側散礫（西から）

図版　9

尾立第３遺跡SI 1（西から）



尾立第３遺跡SI 2（西から）

尾立第３遺跡SI 3（西から）

尾立第３遺跡SI 4（西から）

尾立第３遺跡SI 5（西から）

尾立第３遺跡SI 6（西から）

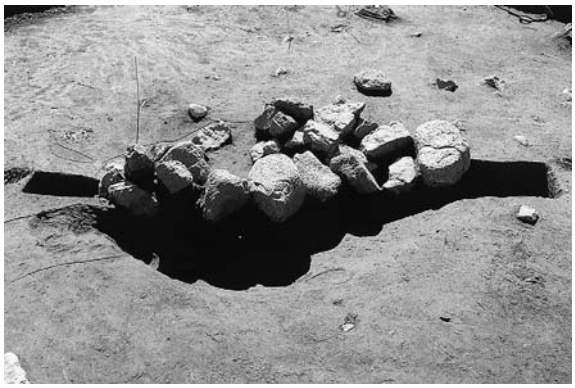
尾立第３遺跡SI 7（西から）

尾立第３遺跡SI 8（西から）

尾立第３遺跡 SI9（西から）

尾立第３遺跡 SI10（西から）

尾立第３遺跡 SI11（西から）


尾立第３遺跡 SI11 断面（西から）

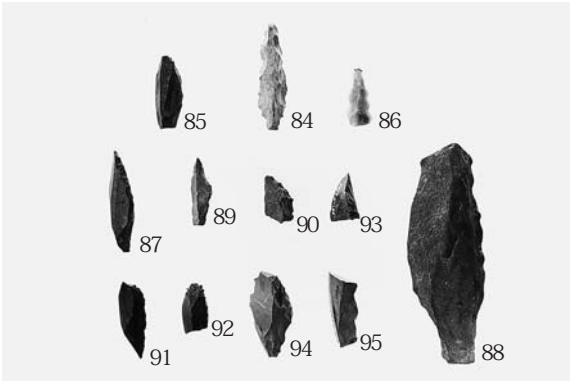
尾立第３遺跡 SI11 完掘（西から）

尾立第３遺跡 SI12（西から）

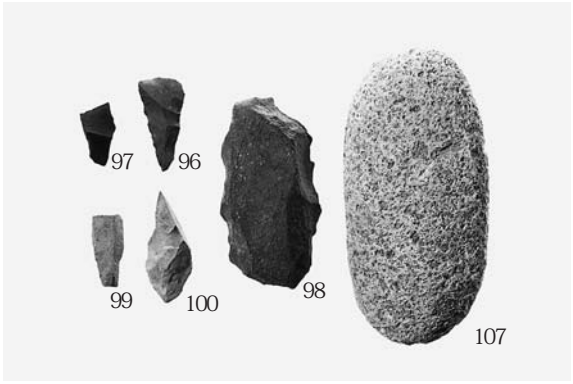
尾立３遺跡Ⅱ層石器出土状況（西から）

朝草原遺跡Ｂ区作業風景

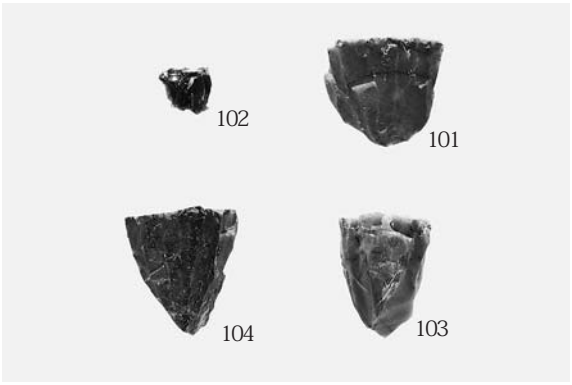
図版　11



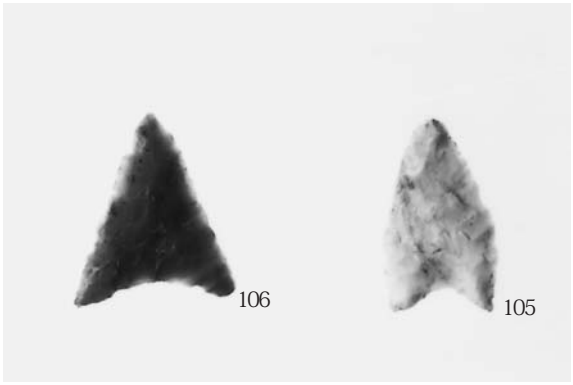
角錐状石器、ナイフ形石器



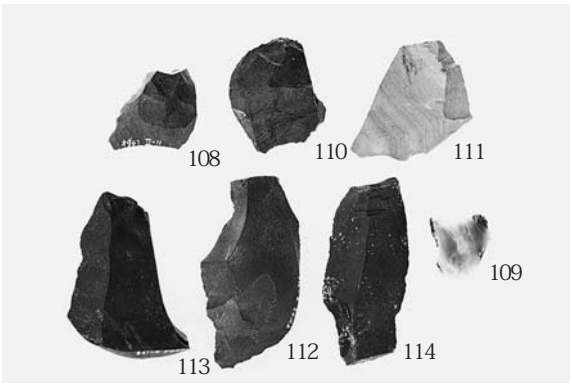
台形石器、掻器、二次加工剥片、敲石



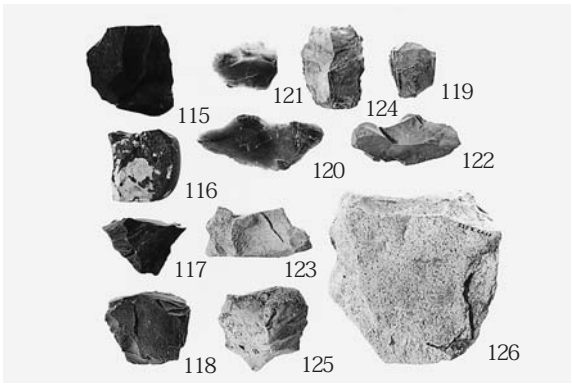
細石刃核



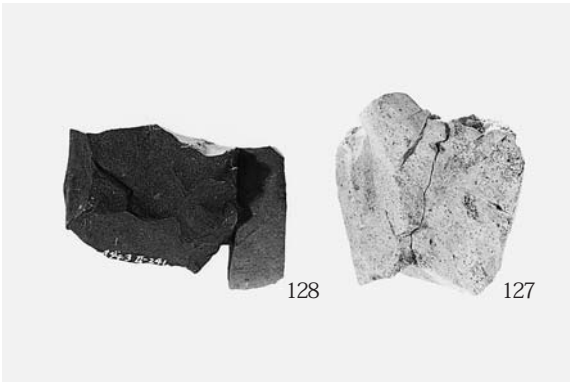
石鏃



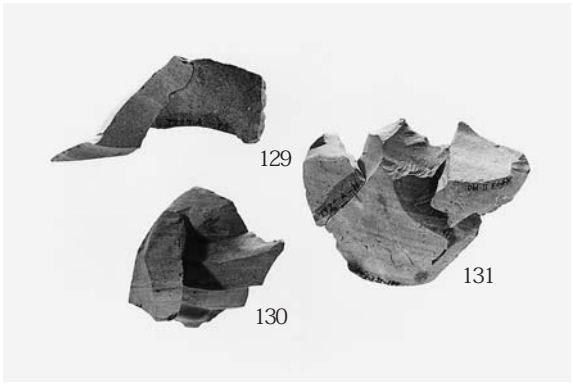
剥片



石核



接合石器



朝草原遺跡・尾立第３遺跡の遺跡間接合石器

報告書抄録

ふりがな	あさくさばるいせき　おだてだい3いせき
書名	朝草原遺跡　尾立第３遺跡
副書名	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 42
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 147 集
執筆・編集担当者名	井上 美奈子
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒 880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
発行年月日	2007 年 2 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
朝草原遺跡（あさくさばるいせき）	宮崎県（みやざきけん） 児湯郡（こゆぐん） 都農町（つのちょう） 大字川北（おおあざかわきた） 字朝草原（あざあさくさばる）	45406		32° 15′ 01″	131° 31′ 36″	2005. 9. 1 ～ 2005.12.22	4,430㎡	東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査
尾立第３遺跡（おだてだい３いせき）	宮崎県（みやざきけん） 児湯郡（こゆぐん） 都農町（つのちょう） 大字川北（おおあざかわきた） 字尾立（あざおだて）	45406	1011	32° 15′ 05″	131° 31′ 29″	2005. 9. 1 ～ 2005.10.26	1,000㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
朝草原遺跡	集落跡	旧石器時代終末期 縄文時代草創期 縄文時代早期	礫群　２基 集石遺構　３基 土坑　３基	角錐状石器、ナイフ形石器、 細石刃核、石鏃、 無文土器、剥片、石核
尾立第３遺跡	集落跡	旧石器時代終末期 縄文時代早期	礫群　10 基 集石遺構　２基	角錐状石器、ナイフ形石器、 台形石器、細石刃核、 石鏃、剥片、石核

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第147集

朝草原遺跡
尾立第３遺跡

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書42

2007年2月28日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL　0985(36)1171　FAX　0985(72)0660

印　刷　株式会社イースト朝日
〒897-0122　宮崎市芳士字中原590-1
TEL　0985(62)5055　FAX　0985(62)5054